

第II部 東京大学構内の遺跡発掘調査報告

東京大学本郷構内の遺跡

農学部家畜病院地点

発掘調査報告

1997

東京大学埋蔵文化財調査室

例 言

1. 本報告書は東京大学農学部家畜病院（ペテリナリーメディカルセンター）の建設に伴う発掘調査報告である。
2. 調査地は東京都文京区弥生1丁目1-1の東京大学農学部構内で、調査面積は1040m²である。調査は1990年1月31日から3月14日まで行った。
3. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行った。調査担当者は武藤康弘である。
4. 執筆分担は、以下のとおりである。
 - I, II, III, IV, V 武藤康弘
 - VI-1 堀内秀樹 VI-2 寺島孝一 VI-3, 4, 5 安芸毬子
 - VII-1 武藤康弘 VII-2 堀内秀樹 VII-3, 4 安芸毬子
5. 発掘作業および報告書作成にあたり下記の方々から御協力・御教示を得た。明記して謝意を表したい。(敬称略)

東京都教育委員会 文京区教育委員会

東京大学施設部 農学部 工学部建築学科 史料編纂所

文学部国史学研究室 考古学研究室

加藤重機建設株式会社

浦野慶吉 大塚達朗 小川望 梶原勝 金子浩昌 小林謙一 杉森哲也 高橋三郎

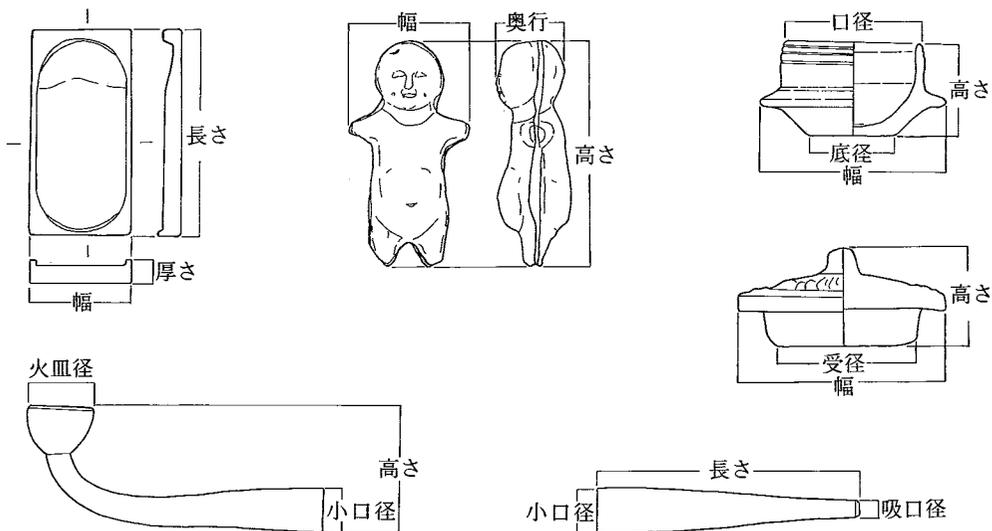
長佐古真也 袴田 穰 両角まり 宮崎勝美

凡 例

陶磁器・土器

1. 実測図は基本的に1/4で掲載する。
2. 実測図に付けられる記号は以下のことを表している。
 - ・▲は高台、見込みなどの釉際を表している。
 - ・|——| は口唇部の口銹を表している。
 - ・|←→| は人為的な磨耗、敲打痕を表している。
 - ・↓ ↓は播鉢体部擋目の範囲を表す。
 - ・中心線上下端の破線は推定口径を表す。
 - ・— —は断面を表す。
3. 本文で記述した分類は胎質・産地—器種—小分類の順で行った（VI部3参照）。
4. 遺構出土遺物群については推定個体数100個体以上出土した遺構に限り、本遺跡の相対年代を示し（VI部3参照）、それ以下の遺構については遺物を呈示するにとどめた。

石製品、人形・ミニチュア・玩具、金属製品計測部位（図1）



東京大学本郷構内の遺跡
農学部家畜病院地点
発掘調査報告 目次

例 言

凡 例

I 調査に至る経過	103
II 遺跡の位置と環境	103
III 調査の経過	103
IV 江戸時代以前の遺構と遺物	104
V 江戸時代の遺構	106
VI 江戸時代の遺物	
1 陶磁器・土器	115
2 屋根瓦	126
3 石製品	128
4 人形・ミニチュア・玩具	130
5 金属製品	138
VII 発掘調査の成果	
1 遺構	145
2 陶磁器・土器	145
3 人形・ミニチュア・玩具	154
4 金属製品	159

参考文献

写真図版

報告書抄録

I 調査に至る経過

東京大学農学部家畜病院（以下、家畜病院とする）では、かねてから施設の全面的な改築が計画されていた。しかし、農学部構内は江戸時代に水戸藩中屋敷が存在していたことと、弥生土器発見の地として著名な国指定史跡の向ヶ岡貝塚に隣接していることから、新営工事に先立って埋蔵文化財の有無を確認する必要があるがあった。そこで、農学部から調査の依頼を受けた東京大学遺跡調査室（当時）は1985年8月に用地内の87m²に対して試掘調査を行なった。この結果、幕末以降の削平地業によって立川ローム層の上部が失われているものの、江戸時代の遺構が確認されたため、本格的な発掘調査の必要があると判断された。

上記のような状況の中で、1990年度から家畜病院の新営工事が着手されることになったために、東京大学施設部より依頼を受けた東京大学埋蔵文化財調査室は新営工事用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行なうことになった。

II 遺跡の位置と歴史的環境

東京大学農学部の位置する文京区弥生2丁目には、江戸時代に水戸藩徳川家中屋敷、播磨安志藩^{あなし}小笠原家下屋敷等の大名屋敷と旗本森川金右衛門の邸宅が存在していた。調査地点の家畜病院の位置する部分は水戸藩邸北端の安志藩邸に隣接する位置にあたるのが、江戸時代の切絵図との対比から明らかになっている。しかし、水戸藩邸内部の絵図は現在まで公開されているものは一切なく、藩邸内での正確な位置づけは不明である。

III 調査の経過

調査は重機によって旧家畜病院の解体後の整地面から表土を除去するところから始められた。重機による掘削は当初整地面から約0.5mの深度を予定していたが、作業の進行にともなって、それ以下の土層も明治時代以降の盛土であることが判明したため、旧表土上面まで平均深度1mの土層を一挙に除去した。また、残土搬出の都合で調査区を東西に2分割し切り返して発掘することになったため、まず東側の調査を先行して行なった。遺構確認作業では調査区東側で、縄文時代の陥穴3基、江戸時代の地下室4基、大型土坑2基、溝状遺構1基とその他の遺構12基、それと時期不明の円形土坑2基を検出した。調査はこれらの遺構の掘り上げを中心として、測量、写真撮影等を行なった。調査期間中は度重なる降雪と不順な天候に悩まされたが、約1ヶ月で東側の調査を完了した。その後、調査区西側の調査を行なったが、予想以上に近代以降の攪乱が激しく、江戸時代の溝状遺構等を検出し

たにとどまり短期間で調査を終了した。最後に立川ローム層以下の先土器時代の遺物確認のため、3ヶ所で深掘り(図2 遺構配置全体図に細線で記入した2m角の調査区)を行った。北側の野球場の方向に開析された谷が入り込んでいたため、立川ロームの残存層も薄く、すぐ武蔵野ローム層へと移行する状況で、先土器時代の遺構および遺物は全く確認されなかった。

調査地点の標高は約21mである。弥生町1丁目1の東京都の水準点(郷(3))からレベル移動して調査区内に仮水準点を設定した。また、平面図は国土座標系に基づく測量基点を調査区内に設定し、それを中心に作図した。

IV 江戸時代以前の遺構と出土遺物

江戸時代以前の遺構として、図2の遺構全体図に示したように調査区東側で陥穴が3基(SK12, 13, 24)確認された。いずれも幅狭で細長い典型的な陥穴の形状を有する。ローム面が削平されているため、深度が0.5mにもみたないが、本来は1mを超える深さであったものと推定される。図3にはSK13の平面図および土層断面図を示した。埋土はほぼ均一でローム粒・スコリア粒を少量に含む褐色土である。なお、遺構中からは遺物は全く出土しなかった。したがって、縄文時代のいずれの時期の遺構であるかは不明である。

図4には縄文時代後期から平安時代までの出土遺物を図示した。いずれも、盛土層中や江戸時代の遺構の覆土から検出されたものである。1は縄文時代後期中葉の加曾利B3式の精製土器の胴部破片。2～5は同じく加曾利B3式の粗製土器深鉢の口縁部および胴部破片である。6～9は後期後葉安行1式の精製土器の胴部および口縁部破片。10～12は後期末の安行2式である。12は精製土器深鉢の口縁部突起の破片である。13は縄文時代晩期の安行3a式の精製土器深鉢。14, 15は同じく安行3a式の粗製土器深鉢の口縁部破片である。16～18は安行3b式, 19～23は安行3c式の精製および粗製土器深鉢の破片である。25は安行3d式で、沈線で入り組み文が描かれている。26～35は弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。27, 30は同一個体で外面には羽状構成の細縄文が施され、内面が赤色塗彩されていることから高坏と考えられる。29は壺の胴部破片である。赤色塗彩された器面に刷毛目調整をミガキ残した鋸歯状の区画が横位に展開する文様構成をもつ土器である。

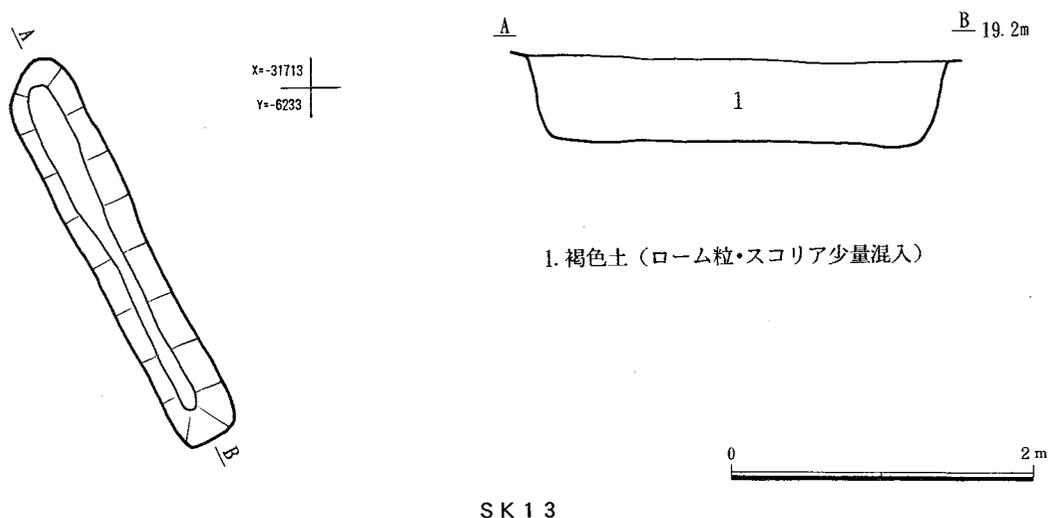


図3 縄文時代遺構実測図

胎土には粘土粒が含まれている。31, 32, 35は台付き甕。33は内外面ともヘラミガキ調整が施された椀。34は壺の底部破片である。36~37は平安時代前期の坏および台付き甕の破片。38は縄文時代の打製石斧である。

上記のように出土遺物の年代は縄文時代後期から平安時代まで多時期にわたる。これらの出土遺物のうち、縄文時代後・晩期のものは、湯島から千駄木方面にかけて本郷台地の端部に点々と分布する後・晩期の小貝塚との関連が窺われる。また、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物は、隣接する向ヶ岡貝塚や浅野地区から附属病院地区に展開する古墳時代前半の集落遺跡と関連があるものと考えられる。

V 江戸時代の遺構

発掘調査で確認された江戸時代の遺構群の配置を図2およびPL.1に示している。なお、全体図の中で、調査区西側を南北にはしる柱列のように細線で描いた遺構はすべて近代以降のものである。それ以外のもは全て近世の遺構である。

このうち主要な遺構としては次のものがあげられる。

SU01 (図5, PL.2上) 調査区南東角で確認された地下室。幅約2m, 奥行き約1mの規模の居室に、幅約1m, 奥行き約2mの竪坑が付設した構造である。西側の居室部分は攪乱によって大きく破壊されているが、下部はほぼ全形を保った状態で確認された。上部は一部分ではあるが削平をまぬがれて約0.15mの厚さで天井も遺存している。埋土は最

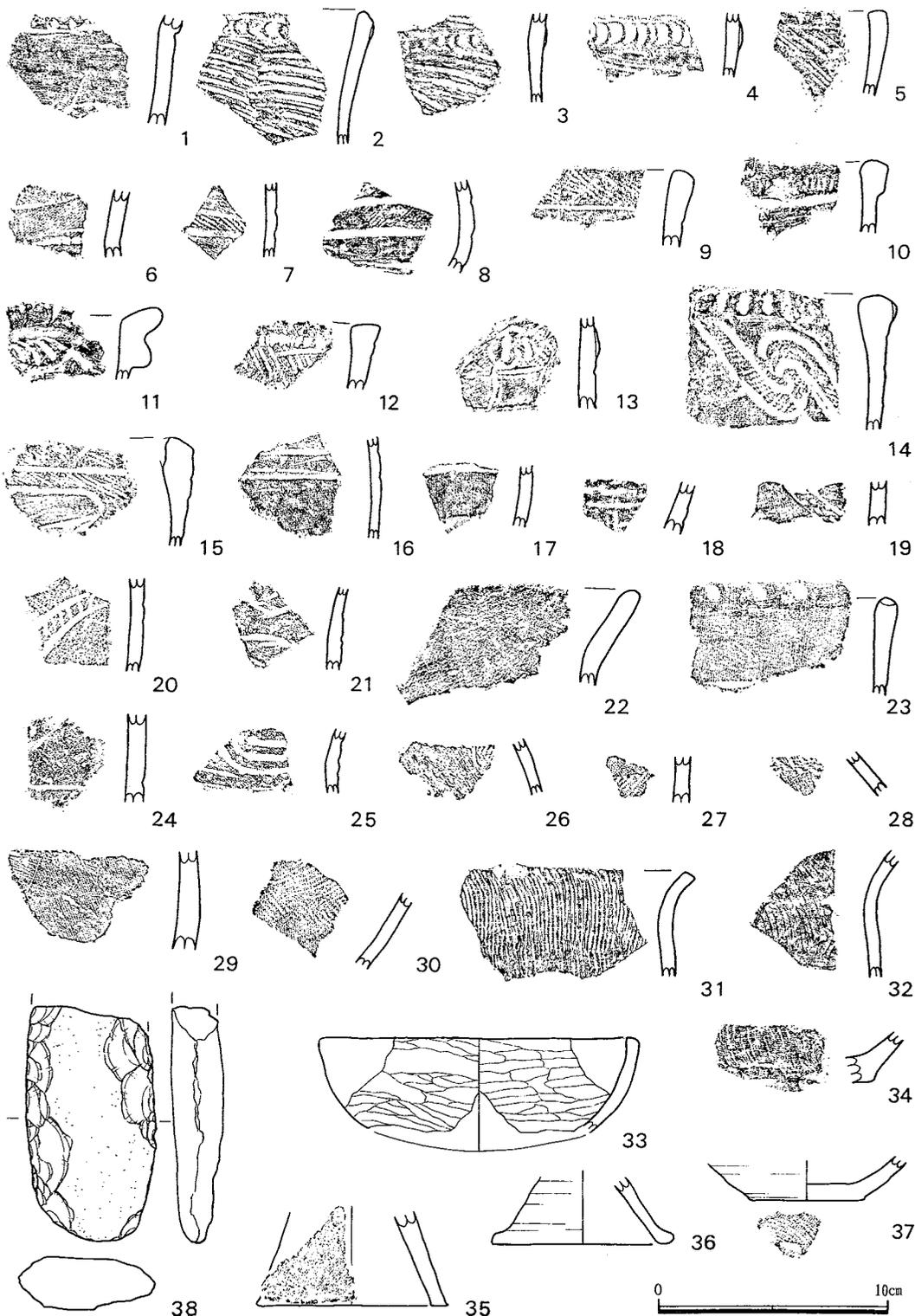


図4 縄文時代～平安時代遺物実測図

上部の1層は黒色土で、それ以下の2、3層はローム、粘土ブロック混じりの暗褐色土となる。最下部の4層は灰褐色粘土層で、この層から主体的に遺物が出土した。遺物は徳利、播鉢、碗などの陶磁器、かわらけ、瓦燈、瓦(背面に刻印のある丸瓦)、砥石、火打ち石等が出土した。出土遺物の年代は18世紀中葉を中心とする時期であるので、地下室の年代もほぼ同時期と判断される。

SK02 (図6, PL. 2下) 調査区北東角で確認された不整形の大型土坑。埋土は漆黒の黒色土で、江戸時代の遺物が大量に出土した。出土遺物は徳利等の陶磁器類、瓦、それに硯や砥石等の石製品が主体となるが、灯明皿、ひょうそく等の灯明具と土人形、玩具類が大量に出土したことが注目される。また、柄鏡が2点出土していることも特筆される。これらの出土遺物の年代は陶磁器等から19世紀前半の時期のものと判断される。したがって、遺構の年代もほぼ同時期と考えられる。

SU03 (図6, PL. 2下) 調査区北東角で確認された地下室。SK02との重複によって上半部が失われ、攪乱によって一部が破壊されているものの、主室部分はほぼ全形が保たれている。地下室は幅奥行きとも約2mの規模の正方形の主室の短辺の一方に階段が付設した構造となる。階段は3段でローム削り出しの構造で補強の板や杭の痕跡は確認されなかった。埋土は粘性の強い暗褐色土で、遺物は全く出土しなかった。

SK04 調査区東側中央に位置する小型の方形土坑。埋土は黒色土で、陶磁器の破片が少量検出された。北壁は縄文時代の陥穴を破壊している。出土遺物の年代から、18世紀後半の時期の遺構と考えられる。

SD05 調査区東側を南北にはしる溝状遺構。幅約0.5m、深さ約0.3mの小型のもので、断面形は長方形を呈する。底面は平坦で柱当たりや砂等の流水の痕跡は確認されなかった。埋土は黒色土で、陶磁器の破片が少量出土した。出土遺物から18世紀後半の時期の遺構と考えられる。

SK06 (図7, PL. 3上) 調査区南端に位置する大型の円形土坑。大部分は調査区域外に広がっており、全体の約1/3の範囲を調査した。調査部分だけでも幅約6mもあることから、全体ではかなり大型になるものと推定される。土坑の深さは約0.5mと平面形の大きさの割合には浅く、壁もなだらかに立ち上がり断面形態は浅い皿状を呈する。埋土は上層が黒色土、下層がローム粒混じりの暗褐色土で、遺物は下層から主体的に出土している。出土遺物は碗皿類、徳利、かわらけ、ほうろく等の陶磁器および土器類を主体として、「寛永通寶」等の銭貨や瓦等がある。この中で特に注目されるのは肥前磁器の大皿(図10-SK06

(1)-1) である。これは東側の埋土下層から同一個体がまとまって検出されたものである。また陶磁器等の遺物の他に、土坑の西端で壁面に沿って貝殻の廃棄ブロックが検出され、アワビ、アカニシ、サザエ、ハマグリ、ミルクイ、ヤマトシジミ等の貝殻と共に、スズキ、マダイ、アジ等の魚骨が検出された。肥前磁器大皿は17世紀後半のものであるが、他の出土陶磁器の年代はそれよりも新しく18世紀代のものが主体となる。したがって、遺構の年代は18世紀代と判断される。

S U 0 7 (図5, PL. 3下) 調査区中央に位置する小型の地下室。幅約1.5m, 奥行き約2mの主室に約1m四方の竪坑が付設する構造である。入口の竪坑の直下の主室の床面には段状の造り出しが設けられている。土層断面図にも示したように、主室は天井まで約0.6mの高さしかなく容積の非常に小さいことが特徴といえる。埋土は上層が黒色土で、下層はローム混じりの暗褐色土等を主体としている。遺物はおもに下層から出土している。出土遺物には碗、播鉢、かわらけ等の陶磁器類がある。遺構の年代は出土遺物の年代から18世紀後半と考えられる。

S X 0 8 (図7) 調査区中央に位置する円形土坑。底面には壁に接近して柱穴状の浅い掘り込みが4基確認された。埋土は底部分に薄く黒色土が堆積している他は大部分がロームを主体とする土層である。また底は住居の床面のように硬化しておらず、軟弱なロームを掘り抜いた状態になっている。地床炉等の内部施設や底面上の焼土の分布等は一切確認されなかった。柱穴状のピットは上面形が不整形で、掘り方断面形も円錐形になることから柱穴とは認められない。また、壁の立ち上がりが緩やかで断面形が鍋底状を呈することや、柱穴状のピットも位置が壁に近接しすぎていると判断される。以上の特徴から、この円形土坑は住居等の遺構とは考えられず、仮に竪穴状遺構という名称を与えておくことにする。遺構の年代は、出土遺物が全くないことと、他の遺構との重複関係もないことから現段階では明確にしない。

S K 0 9 (図7) 調査区中央に位置する大型土坑。部分的に円形の張り出し部分をもつ三角形に近似した不整形の平面形で、東端で溝状遺構(SD18)と連結している。底面は大部分平坦であるが、中央だけは円形に大きく落ち込んでいる。埋土は上層がロームブロックを多量に含む暗黄褐色土で、埋土中位は灰色粘土・ローム粒を含む暗褐色土と炭化物層と灰褐色粘土層の互層になっている。埋土最下層は中央の円形に窪んだ部分にのみ堆積している層で、粘性の強い暗褐色土を主体にして構成される。なお、埋土には水成堆積によって形成された痕跡は看取されなかった。遺物はおもに埋土上層と中層から出土している。

主な出土遺物としては肥前磁器と堺播鉢や瀬戸の徳利等の陶器類、ほうろく、かわらけ等の土器類が大量に出土している。また、煙管、おろし金や銭貨などの金属製品、石臼や硯、砥石等の石製品も出土している。また、遺構の壁面に沿って貝殻や魚骨等が大量に出土した。

SK10 SK09の南側に位置する小型の土坑。土管の埋設溝によって破壊されて一部しか遺存していない。

SU11 (図6) 調査区中央南端に位置する地下室。南北方向に細長くのびた不整形の主室の一端に方形の入口部が付設する特異な形状である。埋土は主室部分は炭化物粒やロームブロックを含む灰褐色土で、入口部は暗褐色土である。僅かに出土した陶磁器から、遺構の年代は18世紀前半と判断される。

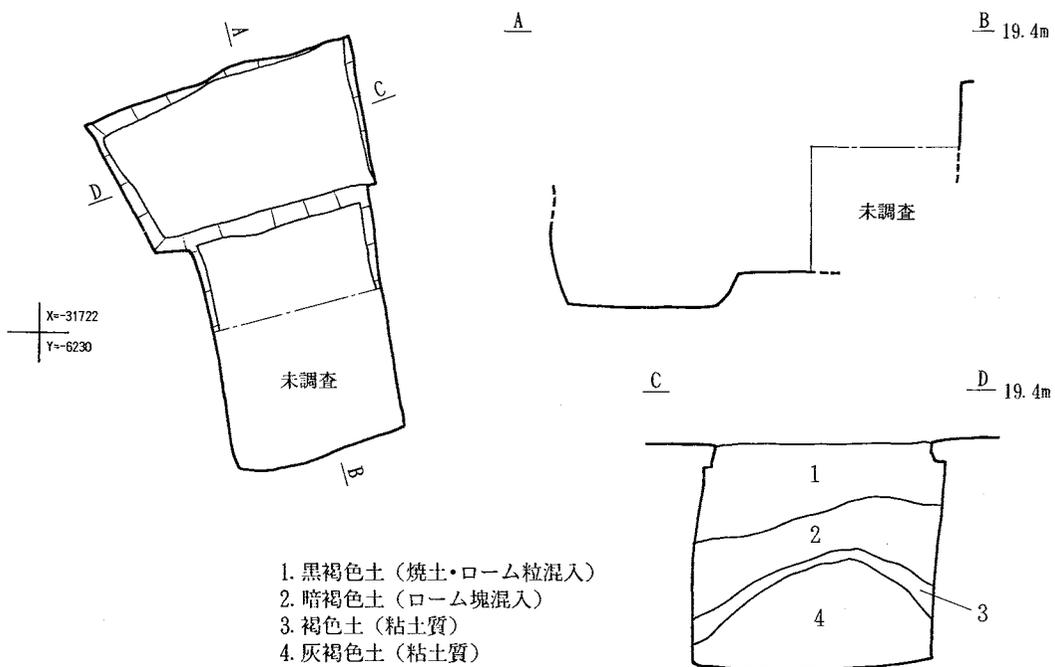
SK14 調査区中央北端に位置する円形土坑。底面中央が一段高く盛り上がるという形態上の特徴から植栽痕と考えられる。

SD18 (図8) 調査区中央西側に位置する溝状遺構。断面形は逆台形状で東西方向にのびてSK09に接続している。埋土は暗褐色土を主体としている。覆土および底面には明確な流水の痕跡は確認されなかったが、東西方向にかなり傾斜しながらSK09に接続している点から、本来は排水溝として設けられたものと考えられる。出土遺物から、遺構の年代は17世紀後半から18世紀代と判断される。

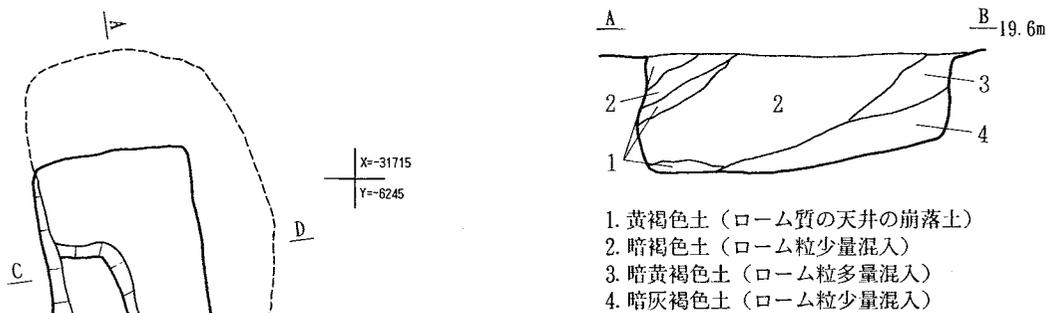
SK19 (図8) 調査区中央西側でSD18の底面で確認された方形の土坑。埋土は底部では黒褐色土が、上部では暗褐色土が主体となる。断面形は長方形でローム層を掘り抜いただけの簡単な構造で側板や杭の痕跡は全く確認されなかった。SD18と埋土が共通していることから、溝状遺構にともなうサイフォン様の施設と考えられる。出土遺物から、SD18とほぼ同時期の遺構と考えられる。

SK20 調査区北西側で確認された長方形の平面形の土坑。埋土中から鶏形土製品や陶磁器片が出土した。出土遺物の年代から19世紀前半の時期の遺構と判断される。

SX23 (PL. 2下) 調査区北東角で確認された大型の円形土坑。SX08と同様の鍋底状の断面形を呈し、底面に柱穴状のピットを有する。埋土は、底面に僅かに暗褐色土が堆積している他は、確認面上面まで堅くしまったローム質の黄褐色土が堆積している。底面のピットは3基確認されたが、いずれもSX08と同様に不整形の形状で柱穴とは考えられない。底面は竪穴住居の床面のようにしまっておらず、地床炉等の施設や焼土の分布も一切確認されなかった。埋土内からは全く遺物は出土せず時期は明確に特定できないが、SK02



SU01



SU07



図5 江戸時代遺構実測図(1)

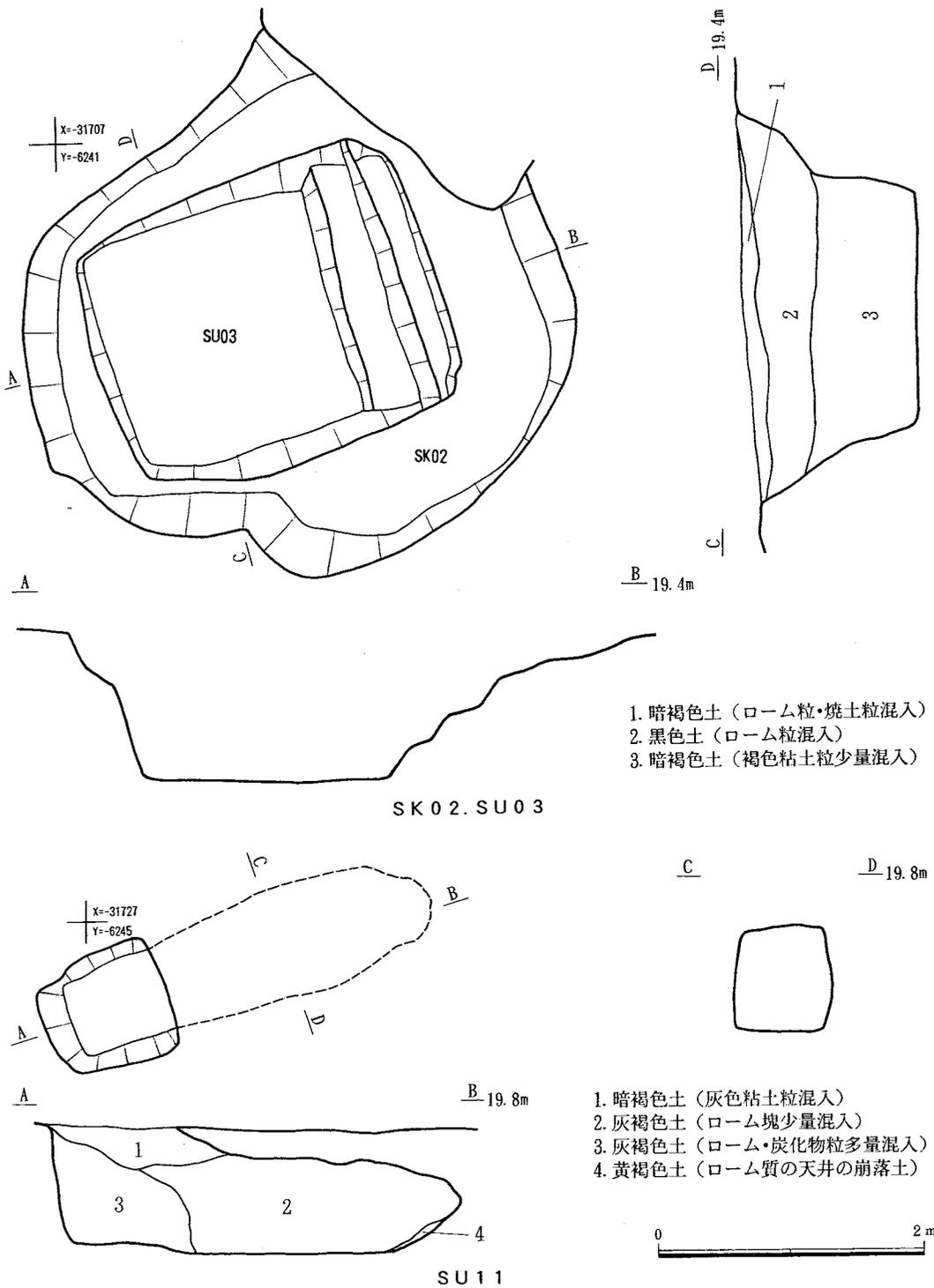


図6 江戸時代遺構実測図(2)

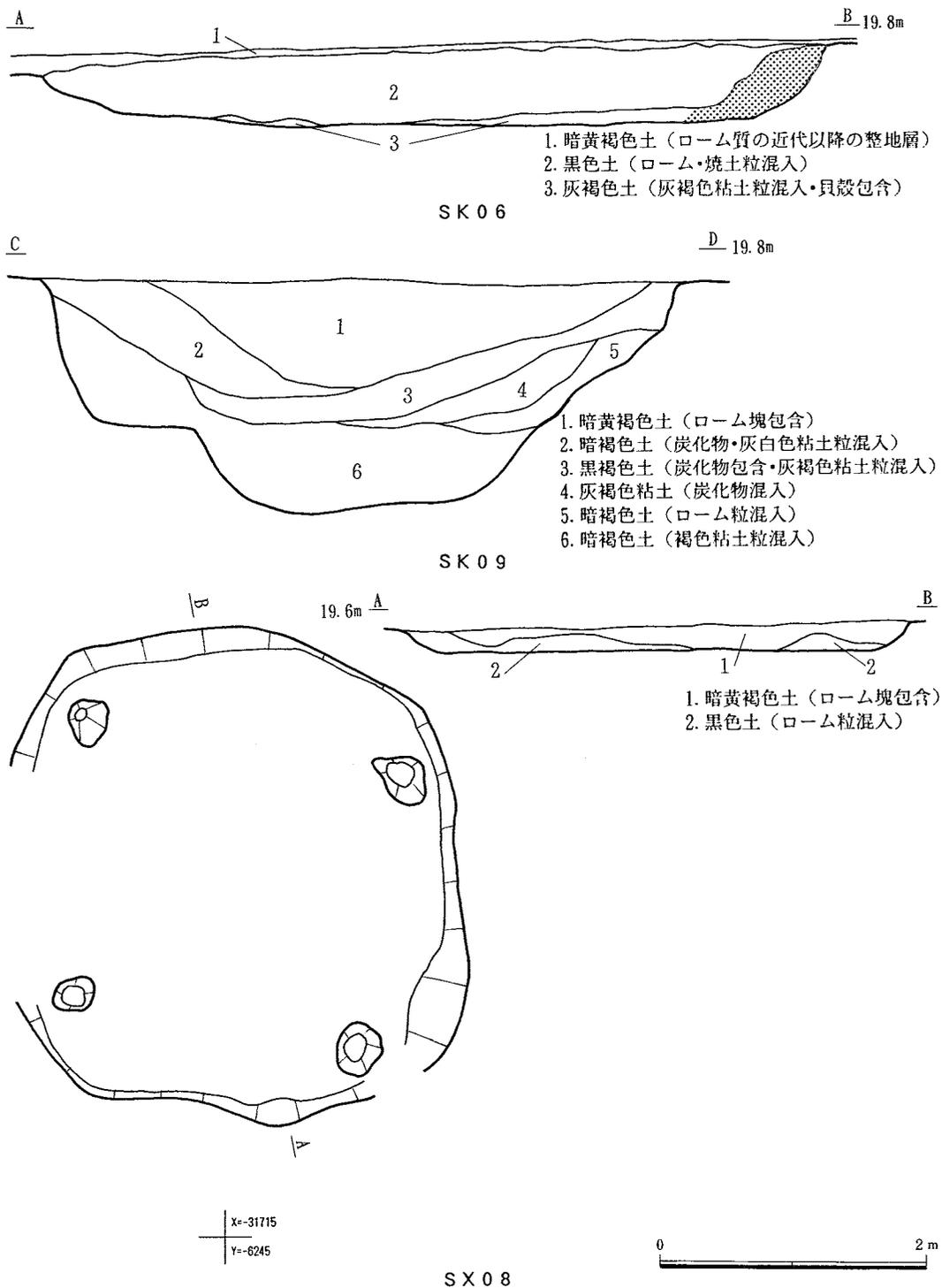


図7 江戸時代遺構実測図(3)

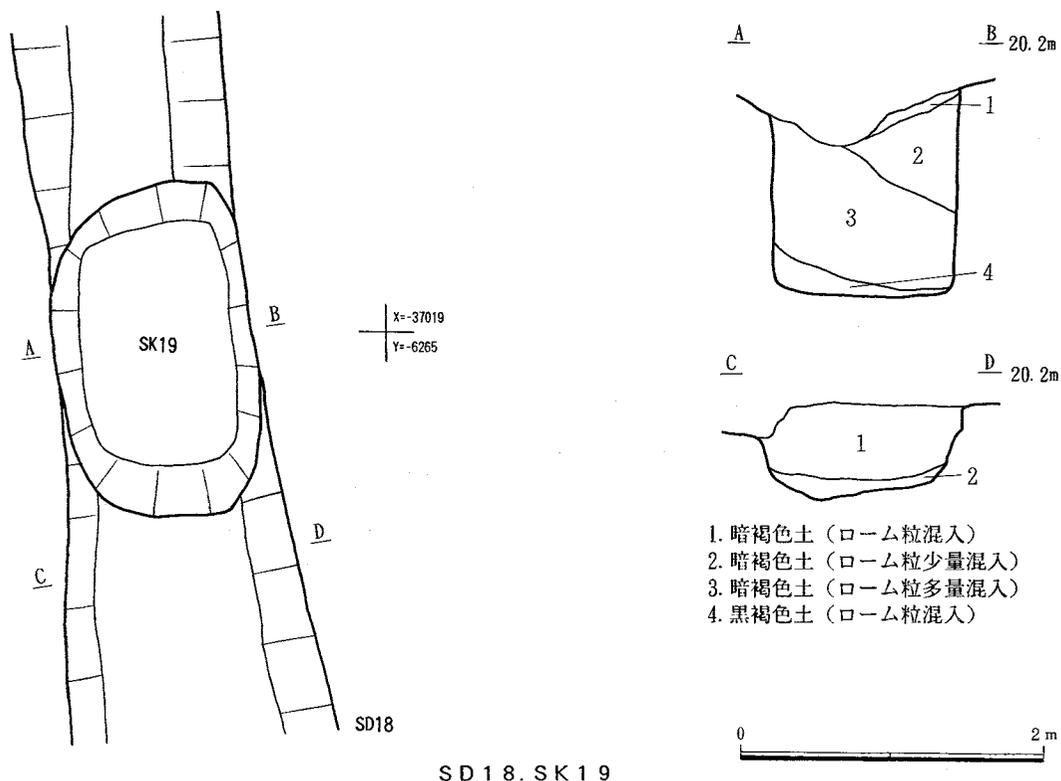


図8 江戸時代遺構実測図(4)

およびSU03に破壊されていることから、少なくとも江戸時代後期よりは古期の遺構と考えられる。

SK27 調査区東側中央で確認された小型の方形土坑。埋土は黒色土で、焼塩壺の蓋が出土した。出土遺物から遺構の年代は18世紀前半と考えられる。

この他に土坑 (SK15, 17, 22, 25, 26), 柱穴 (SP21), 溝状遺構 (SD16) 等の遺構が確認された。これらは埋土の特徴等からいずれも江戸期のものと判断されるが、いずれも遺物が全く出土しておらず、遺構の時期や性格等は明らかにすることはできなかった。

VI 江戸時代の遺物

1 陶磁器・土器

SK01 (図9)

2は磁器，1，3は陶器である。2は染付仏飯器でJB-8に分類される。1はいわゆる貧乏徳利でTC-10-dに分類される。胴部には釘彫りで「伊」?の字が刻まれている。頸部から肩部にはウノフ釉が流し掛けられている。3は播鉢でTC-29に分類される。釉はやや透明感のある明るい茶褐色を呈する。

SK02 (図9・10, PL.4)

本遺構からは，多量の陶磁器，土器が出土している。かわらけ，灯明具，仏神具等，一部の器種に偏りをみせており，該期の通常の器種組成とは大きく異なっている。東大編年では遺物群の様相よりVIIIc期に該当する。

磁器 (1～7)

1，6は瀬戸・美濃系染付磁器，2，3，5，7は肥前系染付磁器，4は肥前系色絵磁器である。1はJC-1-dに分類される。高台幅がやや広く，後出的な特徴がみられる。2はやや小型ではあるがJB-1-fに分類される。焼き継ぎの痕跡が認められる。3～6は御神酒徳利で，3～5はJB-10-cに，6はJC-10-cに分類される。4の器面には松竹梅が浮文に型作りされ，花，葉，岩などが赤，緑，紫色の絵具で，上絵付けされている。7は仏飯器で，JB-8に分類される。

陶器 (8～21)

8は香炉で，TC-9に分類される。器面には鉄で草花文?が摺絵されている。9は底部無釉の碗で，鉄絵で松の文様が描かれている。生産地は京都か?。10～21は灯明具である。灯明皿(上皿)が10～12，16～18，油受け皿(下皿)が13～15である。10がTD-2-a，11，12はTD-2-bに分類される。いずれも内面には3ヶ所のピン痕がみられる。13はTD-40-b，14～15はTD-40-aに分類される。16～18はTC-2-o，19～21はTC-40-cに分類される。

土器 (22～49)

22～24は灯明皿で，DZ-2-hに分類される。表面には透明釉が施される。25～30は油受け皿(下皿)で，25～27はDZ-40-bに，28～30はDZ-40-aに分類される。表面には透明釉が施される。31～33は，ひょうそくで，DZ-44-bに分類される。表面には透明釉が施される。34～48はかわらけでDZ-2に分類される。34，36～41，43～46は左方向の回転糸切り離

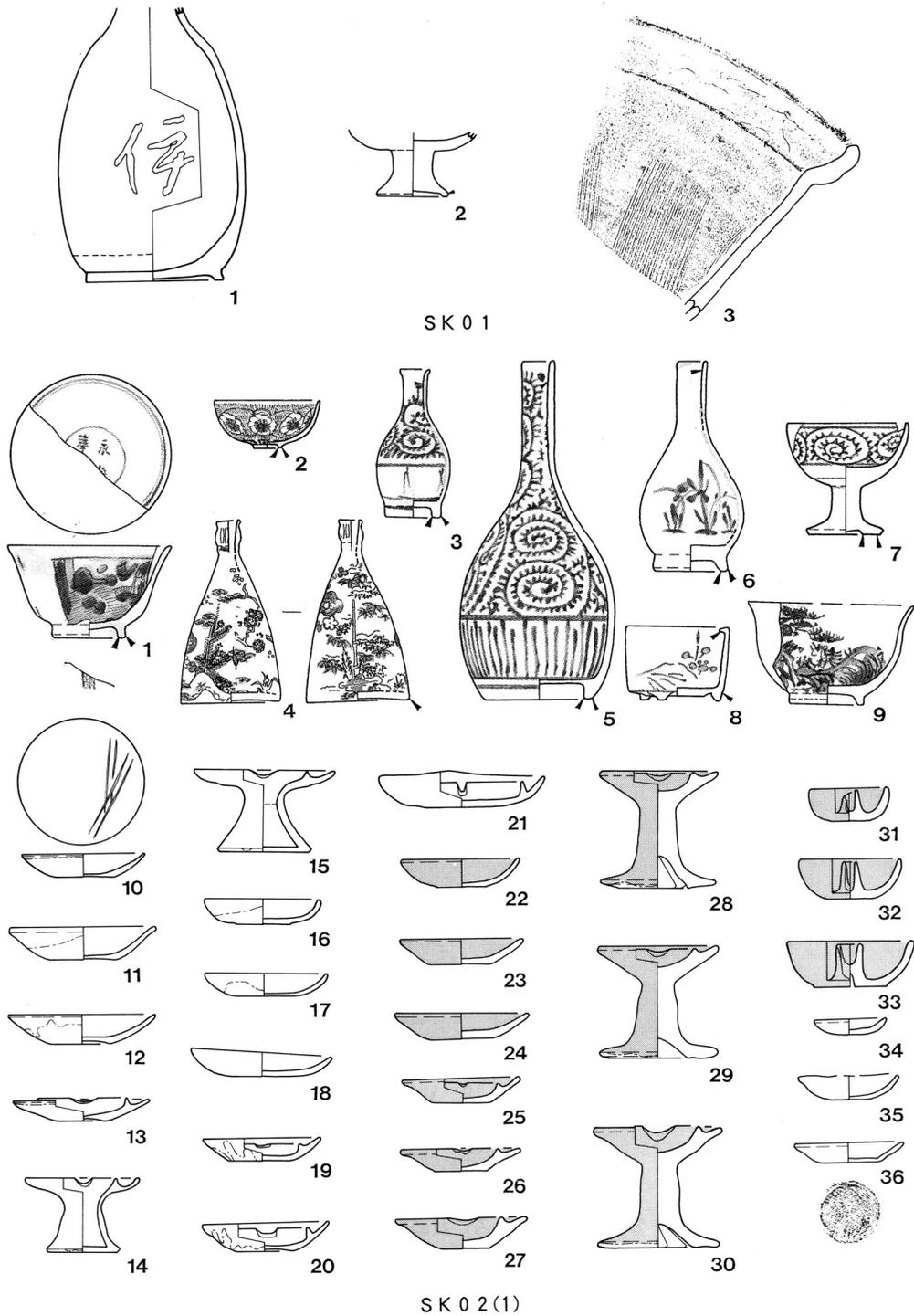


図9 SK01. SK02(1) 陶磁器類

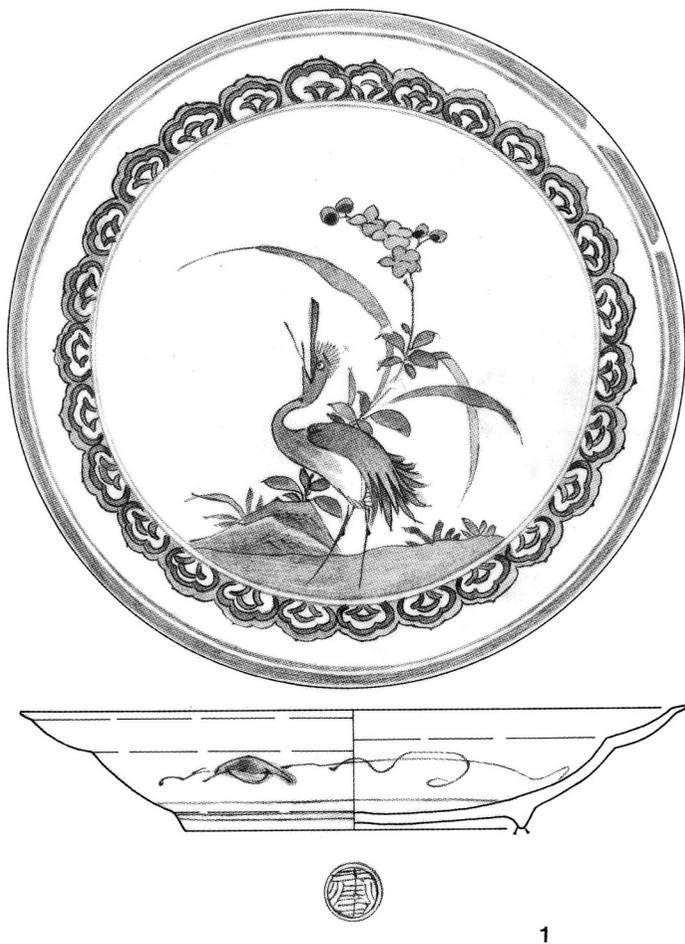
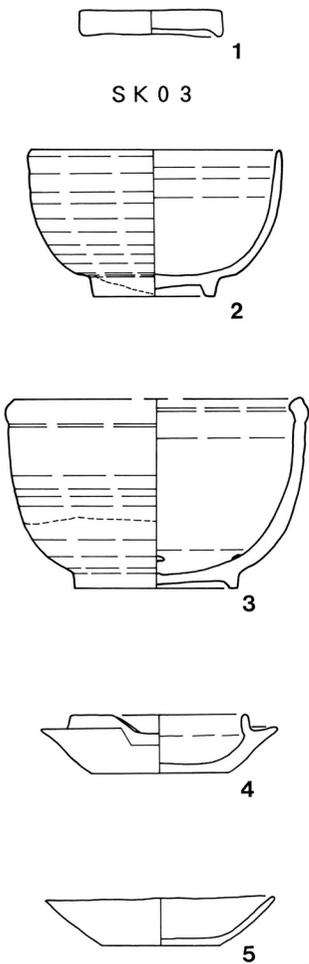
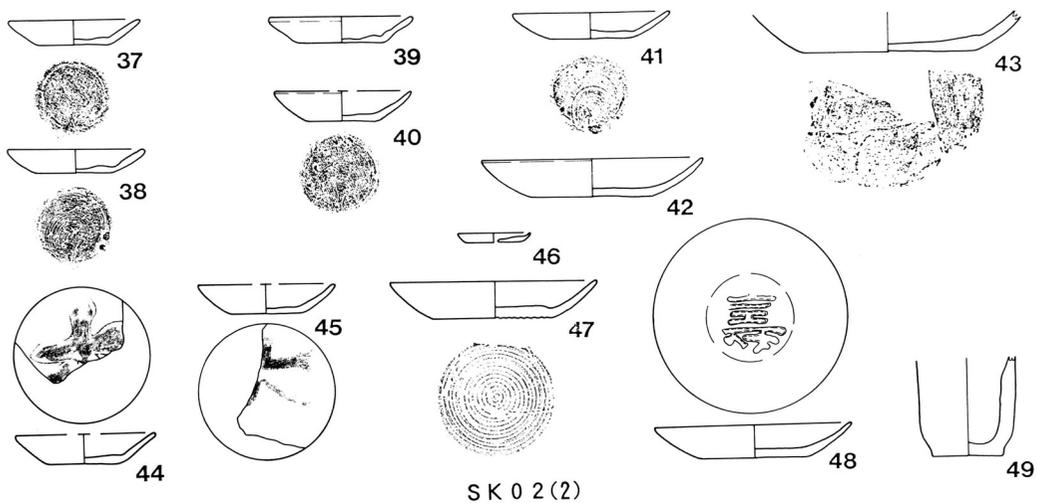
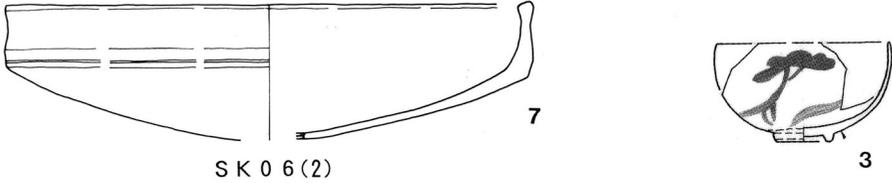
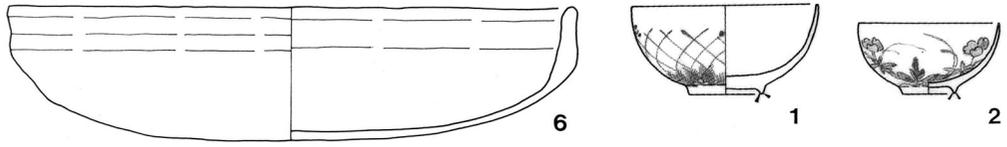
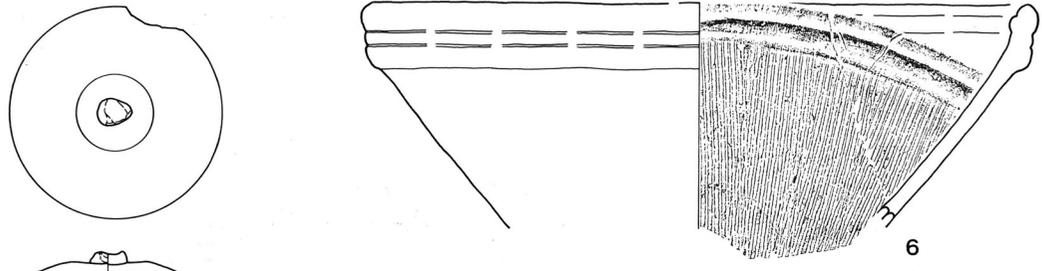


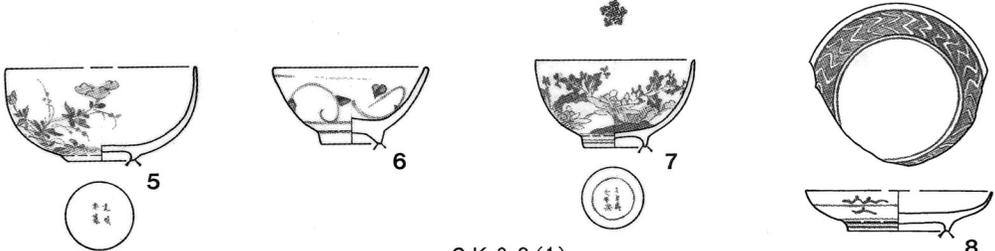
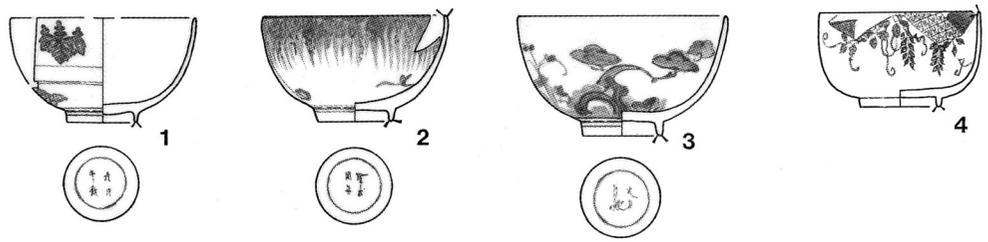
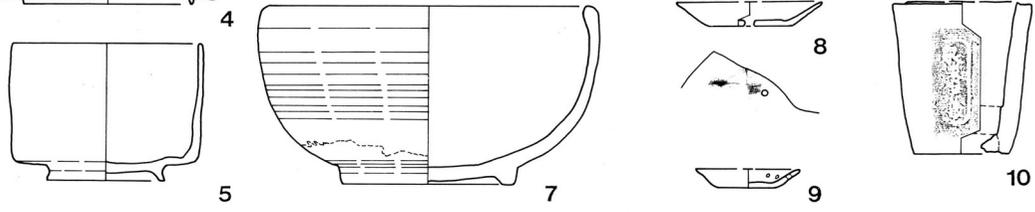
図10 SK02(2). SK03. SK06(1) 陶磁器類



SK 0 6 (2)



SK 0 7



SK 0 9 (1)

図11 SK06(2). SK07. SK09(1) 陶磁器類

しでDZ-2-b, 35は手づくねでDZ-2-g, 42は裏面全面研磨の「磨きかわらけ」でDZ-2-d, 47は底面に溝を切るタイプの「磨きかわらけ」でDZ-2-cである。44, 45は「大」の字が墨書されている。46は底部中央に穿孔され、また、裏面は使用によると推定される擦痕で、回転糸切りの痕跡が確認しづらくなっている。48の見込み中央には「寿」文が浮文されている「磨きかわらけ」である。灯心の痕跡は38, 40, 45に認められる。49はロクロ成形の焼塩壺の身で、DZ-51-tに分類される。

SK03 (図10)

1は焼塩壺の蓋でTZ-14-cに分類される。

SK06 (図10・11)

1は肥前系磁器染付皿である。JB-2-cに分類される。2は底部無釉の灰釉丸碗でTC-1-cに分類される。3は鉄釉片口鉢でTC-23に分類される。見込みには3ヶ所のトチの溶着痕が認められる。4は土器油受け皿でDZ-40-dに分類される。5はかわらけでDZ-2-bに分類される。口唇部には灯心の痕跡が認められる。6, 7は、ほうろくでDZ-33-aに分類される。

SK07 (図11)

1, 2は肥前系磁器染付碗でJB-1-fに分類される。3は陶器碗でTD-1-bに分類される。赤, 緑, 青絵具で上絵付けされている。4, 5は同一個体である。炆器質の胎土で、鉄釉が施される。TF-13に分類される。底部及び内面は無釉である。6は播鉢でTL-29に分類される。7は灰釉鉢である。TC-5に分類される。8・9はかわらけでDZ-2-bに分類される。8は底部中央に1ヶ所, 9は体部中位に2ヶ所並んで孔が穿たれている。10は「泉湊伊織」の刻印を持つ焼塩壺の身である。DZ-51-gに分類される。

SK09 (図11~16, PL.4・5)

本遺構はもっとも多く遺物が出土した遺構である。東大編年では遺物群の様相よりIV b期に該当する。これまでの調査の中ではIV b期の遺物群が出土した遺構は医学部附属病院地点 K30-1, 御殿下記念館地点537号遺構等があるが, K30-1は遺物の点数が少ないこと, 537号遺構は年代的には限定できるものの, 上質磁器のセット物が中心の構成となっており, 種々の考察には必ずしも適当な資料ではなかった。本遺構の資料は量的にも器種のバリエーションも豊富であり, IV b期の指標的な資料と位置づけてもよいだろう。

磁器 (1~17)

4, 12は色絵, 11, 14, 16は白磁, 17は青磁, そのほかは染付である。1~3, 7はJB

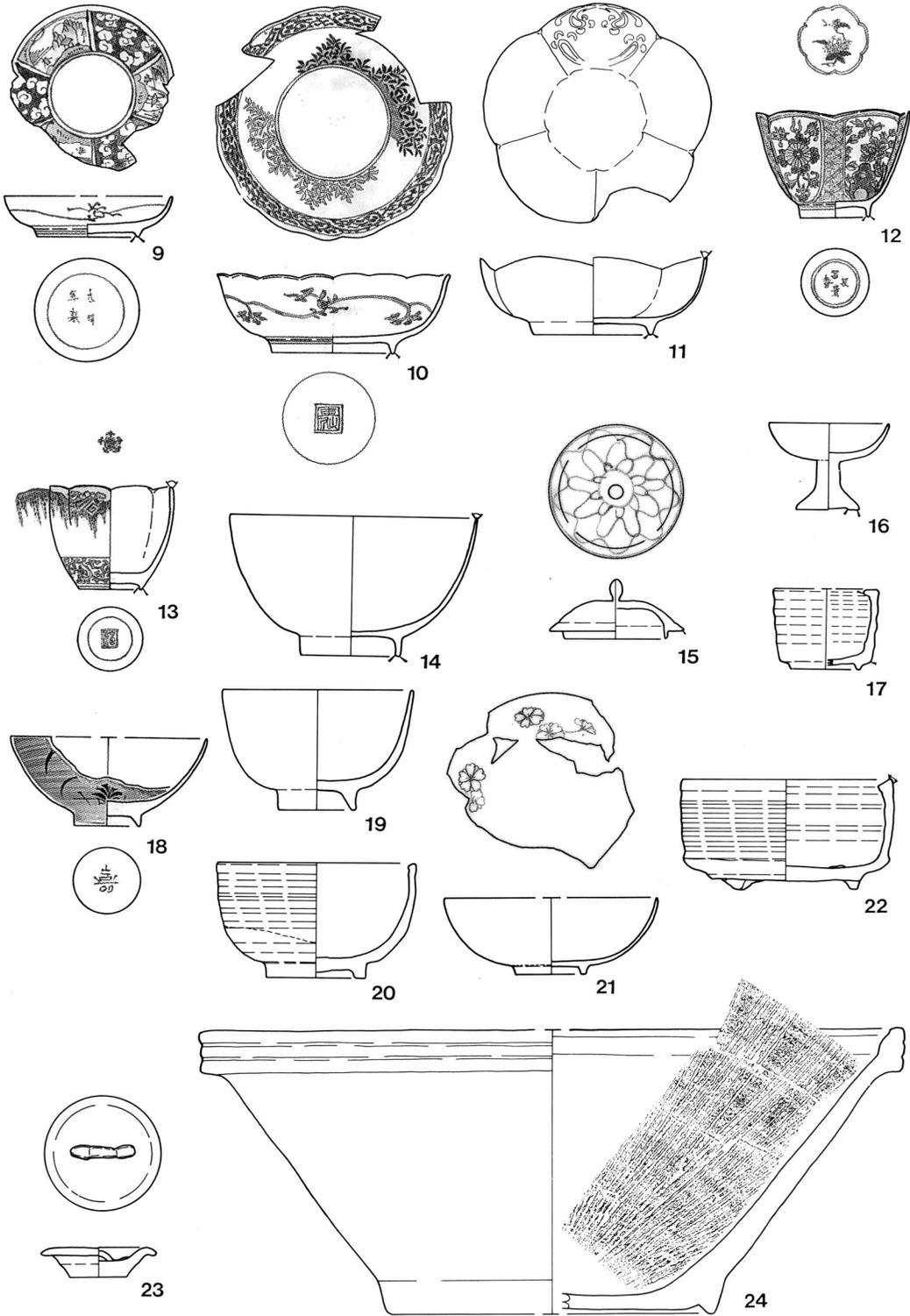


図12 SK09(2) 陶磁器類

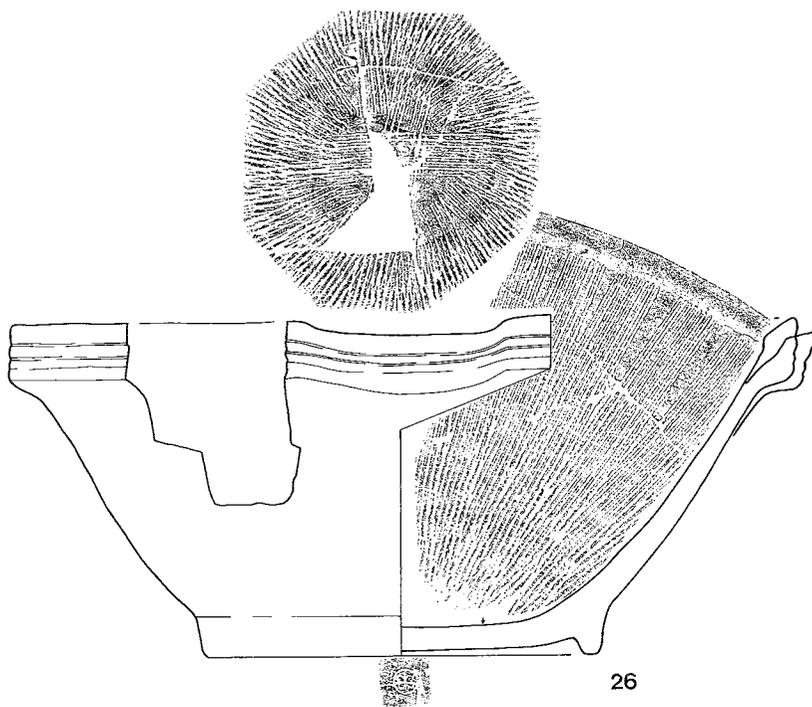
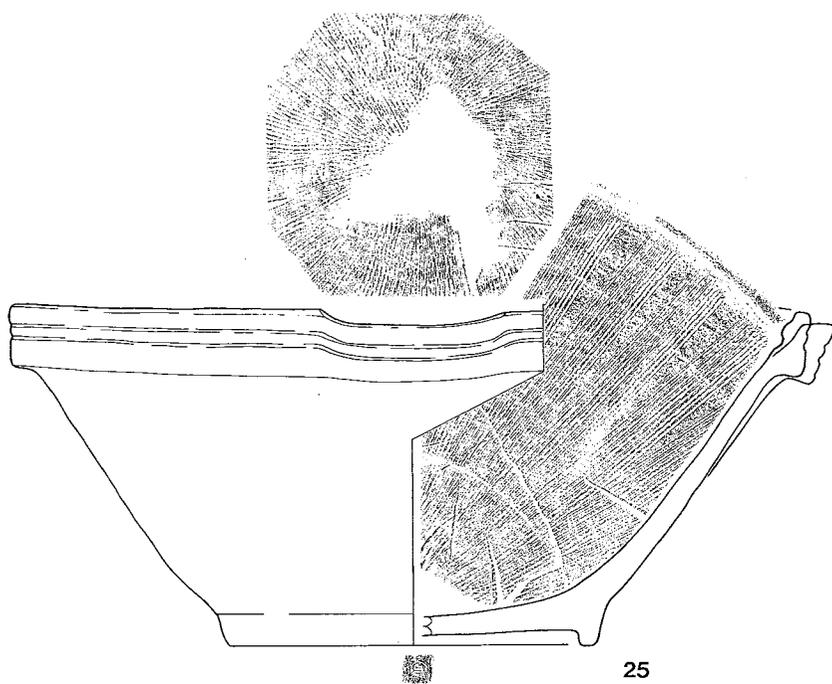


図13 SK09(3) 陶磁器類

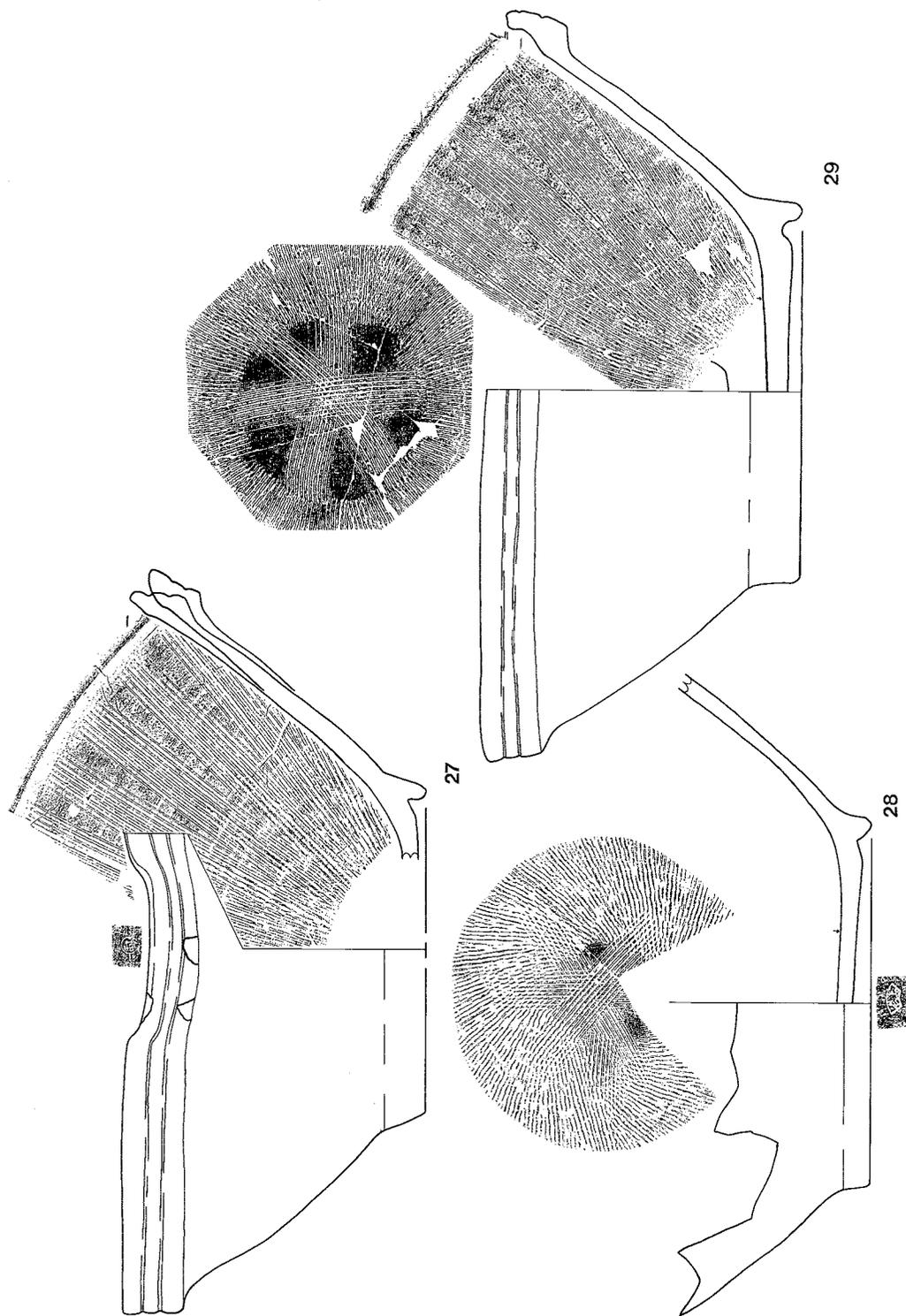


図14 SK09(4) 陶磁器類



図15 SK09(5) 出土遺物



図16 SK09(6). SK11. SD19. 遺構外 陶磁器類

-1-dに分類されるが、その指標となる病院地点のF34-11出土の製品と比較して、高台径、高台高ともにやや小さくなっており、後出的な様相が窺える。1はコンニャク印判、2は型紙摺りで施文されている。7の見込みは手描き五弁花が付されている。4は蓋物でJB-13-aに分類される。5はJB-1-fに分類されている。銘款が付されていることや高台が内傾していることなど古い様相が窺える。6は小碗でJB-1類に分類される。8、9は小皿でJB-3-aに分類される。10、11は上質の磁器である。JB-2-dに分類される。10の裏文様は枠線ありの如意頭唐草文である。11は5単位の輪花に型打ちされ、内面には波頭文風の浮文様が、5単位施されている。12～14はJB-5に分類される。12は染付で区画された窓絵の中は菊、牡丹文が交互に緑、赤、紫、金で、窓絵の間の四方襷文は赤で上絵付けされている。高台裏は二重圏線に「富貴長春」銘が染付されている。3個体出土している。13は非常に丁寧な作りで、文様の雨降り柳は手描き、雷文は墨弾き、グミも濃淡を使い分けている。見込み中央は手描き五弁花が付されている。15は蓋物の蓋でJB-14-fに分類される。16は仏飯器でJB-8に分類される。17は青磁の香炉でJB-9に分類される。内面、底部は無釉である。

陶器（18～32）

18は刷毛目碗で、TB-1-dに分類される。内外面横方向の刷毛目を施した後に器面には草花文が、高台裏には「嘉」の字が描かれている。19は「呉器手風のもの」といわれるもので、TB-1-aに分類される。20は口縁部の一部が欠損しているため注口は失われてしまっているが、片口鉢と思われる。TC-23に分類される。21は平碗で、TD-1-hに分類される。銕絵染付で花文が描かれる。高台脇は面取りされている。22は鉄釉香炉でTC-9に分類される。見込みには3ヶ所にトチの溶着痕がみられる。口唇部には明瞭な敲打痕が認められ、灰落としに転用利用されたい。23は鉄釉の壺の蓋でTC-14-bに分類される。24～32は備前系焼締め播鉢である。24～27が備前産でTE-29、28～32が堺産でTL-29類に分類される。それぞれ胎土、整形、器形、播目の入れ方など類似点が多く、技術的な系譜があることを容易に窺わせるが、備前産のものは器面に泥が塗られていること、高台脇と見込み体部中位に重ね積みの痕跡が残ることなどの特徴が、また、堺産のものは見込み中央と高台裏に焼台の痕跡が残ることなどの特徴を有する。25は○の中に「三」の字の、26は○の中に軍扇模様の刻印が高台裏に、27は○の中に井桁模様の刻印が注口部に押印されている。また、扇の中に「上長」の刻印が、28は高台裏に、30、31は注口部に押印されている。

土器（34～42）

33～36は土器皿である。33, 34はDZ-2-b, 35, 36は「磨きかわらけ」で、底部調整の違いでそれぞれDZ-2-c, DZ-2-dに分類される。36は器厚が薄づくりで、底部及び見込み中央部が黒色を呈している。37は瓦質の平底のほうろくでDZ-33-bに分類される。内面には3ヶ所の橋状把手がつけられている。38は器種は不明である。あるいは置竈、風炉などのミニチュアかもしれない。二次的な加熱を受けた痕跡は観察されない。39～41は焼塩壺である。39は輪積み整形で「天下一御壺塩師堺見なと伊織」、40は板作り整形3ピースの「御壺塩師堺湊伊織」、41は板作り整形2ピースの大杵「泉州麻生」銘の焼塩壺の身で、それぞれDZ-51-d, DZ-51-f, DZ-51-iに分類される。42は板作り整形の焼塩壺の身に伴うと推定される蓋で、DZ-14-cに分類される。蓋の上面には花の文様が墨書されている。

SK11 (図16)

1はラフな作りの染付磁器碗で、JB-1-gに分類される。2, 3は土器皿でDZ-2-bに分類される。4は板作り整形の焼塩壺の身に伴うと推定される蓋で、DZ-14-cに分類される。内面には布目が明瞭に観察できる。

SD19 (図16)

1は白磁の小杯でJB-6-aに分類される。2は土器皿でDZ-2-bに分類される。

遺構外出土遺物 (図16)

1は雁首から吸口まで一体型の陶製の煙管である。雁首に相当する部分にはやや濃い柿釉が施され、ラウ部は片面に竹文、その裏面には炎火文?の下に「火の用心」と浮文されている。所々に墨状の黒色の顔料が付着しており、使用時には着色されていたのかもしれない。胎土は非常に堅緻である。2は柿釉が施されたインキ瓶である。胴部下端には中央に「M」、その外周に「MARUZENS INK・TOKYO」と読める刻印が押印されている。口縁部には注口が設けられている。

2 屋根瓦 (図17)

全域から出土しているが、瓦溜めや瓦落ちなど、まとまった形では発見されておらず、考察の対象にはなり得ないので、主なものを紹介するにとどめる。

1～4は本瓦の軒丸瓦で、いずれも周囲に珠文を配する巴文軒丸瓦である。1, 4が左巻き, 2, 3が右巻きで尾は比較的長く造られている(註)。5は二重線で造られた中心飾り・子葉を持つ軒平瓦で、加賀藩邸でこれまでに見つかったものとは、文様構成がやや異なっている。

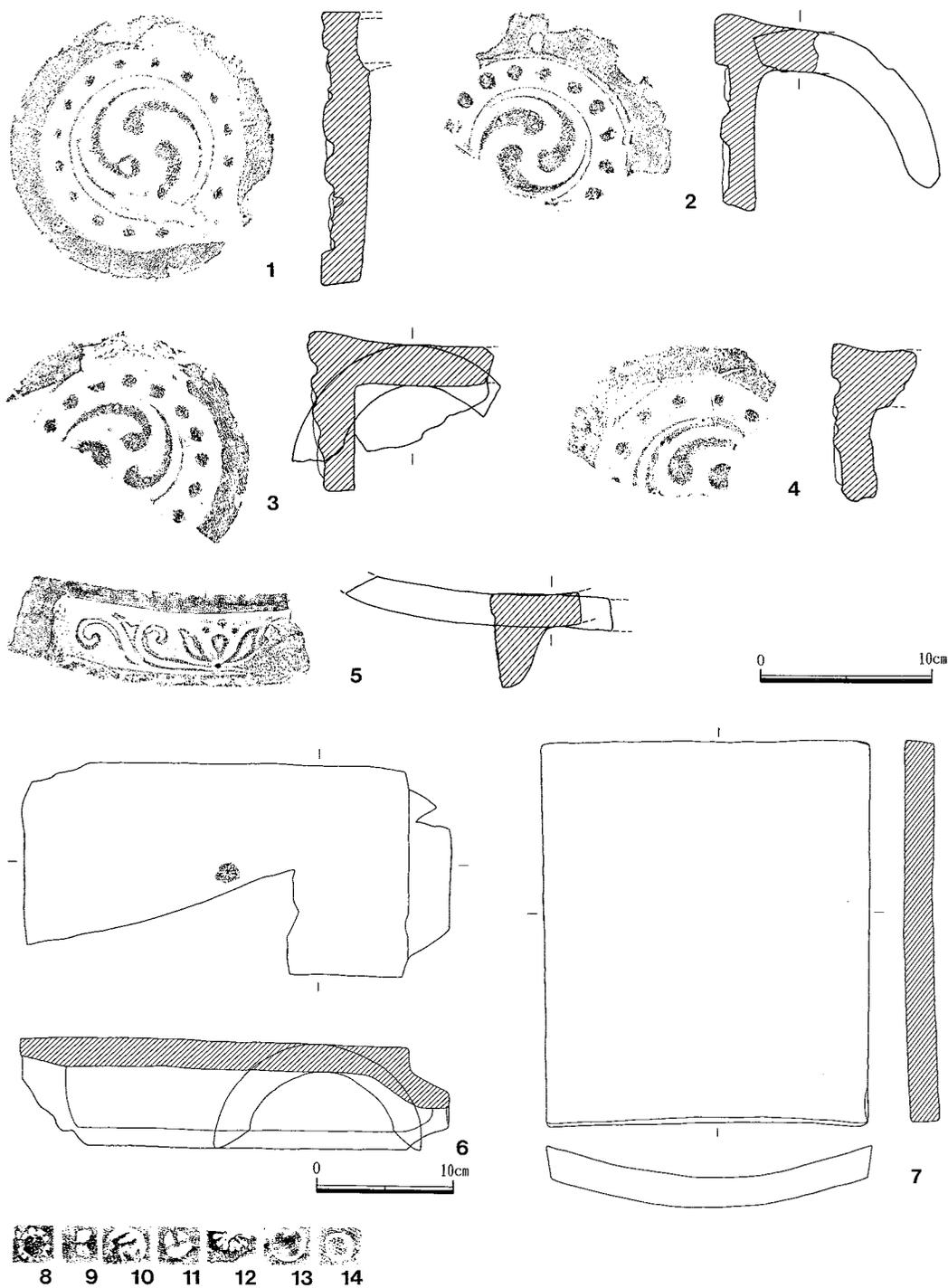


图17 SK02 出土瓦

6は本瓦の丸瓦で、凸面の縦方向の削り調整、側面や先端部の調整も丁寧に行われている。7の平瓦は、全面に丁寧なナデ調整が施されており、布目などの痕跡は全く認められない。

8～14は瓦に刻印された記号で、側面や端面に施される場合が多い。

註

巴文の右・左巻きは報告者によって異なる場合がある。ここでは、京都の故木村捷三郎先生の「人魂状の基本モチーフを『頭』と『尾』とから成り立つと考えれば、頭の方に回転すると表現すべきである」（木村1996）という指摘をとる。

3 石製品 (18図. PL. 6・表1)

本遺跡から出土した石製品は完形品、破片を含め37点であった。37点のうち硯7点 (SK02-2点, SK06-1点, SK09-4点), 砥石22点 (SK01-7点, SK02-4点, SK06-1点, SK09-9点, SK11-1点), 火打石7点 (SK02-6点, SK06-1点), 不明1点 (SK02) であった。

出土地点、計測値は表1に記載した。

硯 (1～5)

硯の各部の名称は、『The 硯』木村鐵郎著を参考とした。墨を摺る部分を「墨道」、墨汁をためる部分を「海」、墨道から海部にかけての部分「落潮」、硯の周囲を「縁」とした。

1, 4, 5は長方硯である。1は墨道を中心に落潮部にかけ摩耗している。縁部の一部は欠損している。4の硯面は平坦である。硯面に無数の突痕と突痕を囲むように刃傷痕あり。5は墨道と、落潮に擦痕が認められる。3は隅丸長方硯。硯面は墨道を中心に緩やかに窪んでいる。硯面脇に刃傷痕あり。2は硯面を二つ持つ「双履硯」であろうか。縁部と墨道の一部を残すのみで正確な形を把握することは困難である。

砥石 (6～9)

6は砥面に擦痕が認められる。砥面は3面認められ、欠損断面も砥面としている。置砥石。7の砥面は両面 (表裏) に4面認められ、主研面は使い込まれ薄い。置砥石、仕上砥。8の砥面は主研面のみ。置砥石。9の縁は面取りした様子を呈する。砥面は主研面のみ。

火打石 (10～12)

本遺跡からは火打石と推測されるものは7点出土している。いずれも使用時に出来た破片と思われる。

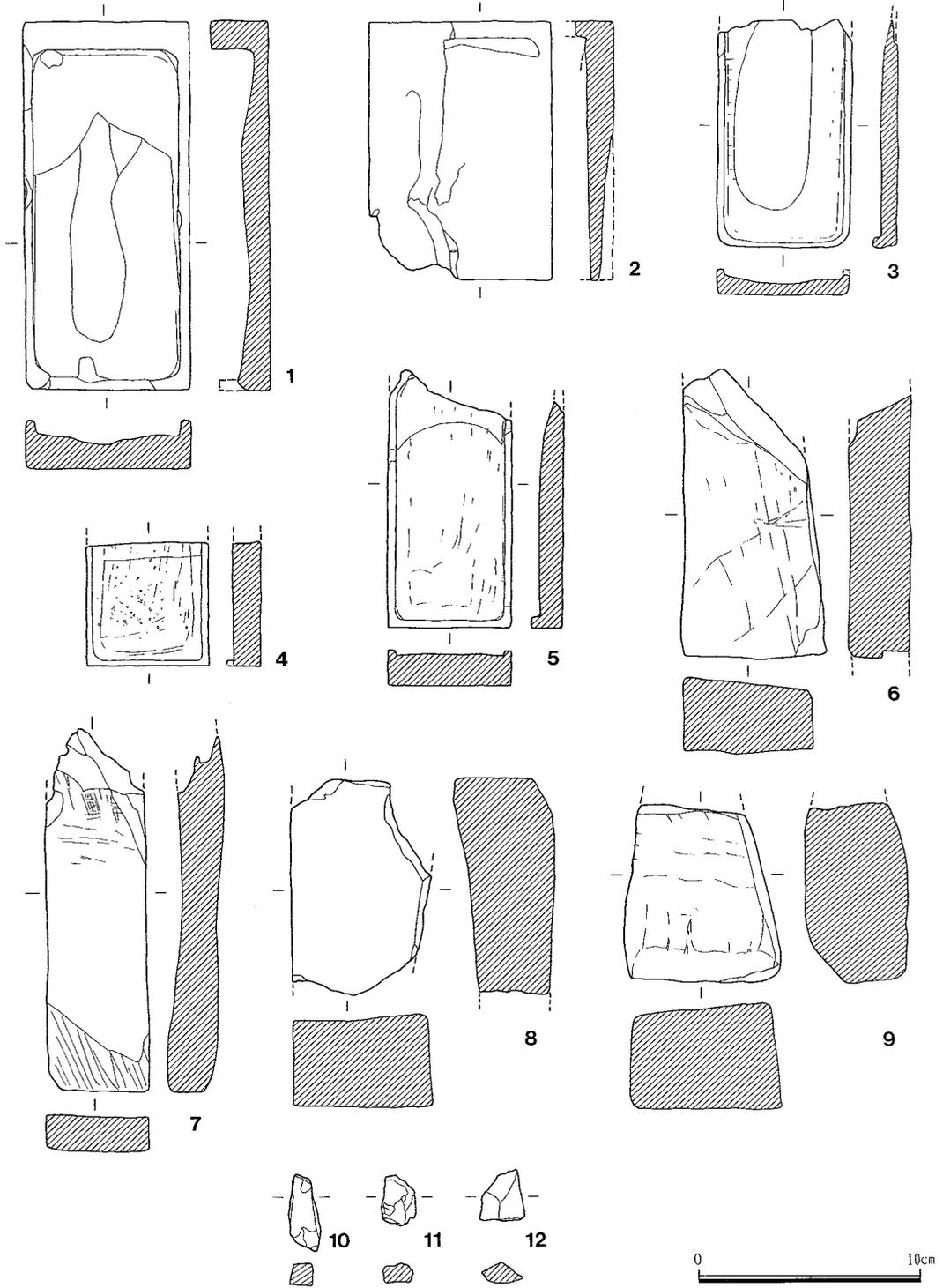


図18 石製品

本遺跡からは火打石と推測されるものは7点出土している。いずれも使用時に出来た破片と思われる。

10は、白色のガラス質を含む半透明の石材。稜に使用痕が認められる。11は、不透明な白色の粒子を含む半透明の石材。稜に使用痕が認められる。12は他の2点と異なり、不透明な灰色の石で帯状に黒色の成分を含む石材。

表1 石製品観察表

図版番号	遺構番号	器種	単位 cm (残存値)		
			法量		
			長さ	幅	厚さ
18-1	SK02	硯	16.60	7.50	2.50
18-2	SK09	硯	(11.60)	8.20	(1.70)
18-3	SK09	硯	(10.50)	6.00	1.10
18-4	SK06	硯	(5.50)	5.50	(1.20)
18-5	SK09	硯	(11.60)	5.50	1.40
18-6	SK01	砥石	(13.20)	5.70	3.30
18-7	SK09	砥石	(16.40)	4.60	4.10
18-8	SK09	砥石	(9.70)	6.30	4.10
18-9	SK09	砥石	(8.00)	6.70	4.70
18-10	SK02	火打石	(3.40)	(1.40)	—
18-11	SK02	火打石	(2.20)	(1.50)	—
18-12	SK02	不明	(2.20)	(2.00)	—

4 人形・ミニチュア・玩具 (19~20図. PL. 6~7・表2)

ここでは便宜上、人間および動物のかたちをモチーフとしたものを人形、実物を写した小型の器物、建造物をミニチュア、競い合う性格をもつものを玩具とした。

材質の大半が土製で、胎土から産地は江戸在地系(橙褐色)、京都系(淡白褐色、淡褐色)に大別されるが大半は江戸在地のものであった。若干ではあるが陶、磁器質のものも出土している。

出土破片総数96点、うち人形は62点(SK02-60点, SK09-1点, SK20-1点)、ミニチュア24点(SK02-16点, SK09-7点, SK20-1点)、玩具8点(SK02-7点, SK20-1点)、不明2点(SK07-1点, SK27-1点)であった。

本稿では96点のうち46点を図示し特記した。出土地点、計測値については表2に記載した。

人形

狐(1, 2, 4)

3点とも型起こし成形、前後合わせの中空で、底部は開口している。1, 4の胎土は橙

褐色を呈する。2の胎土は2点とは異なり浅黄橙色を呈し、また形態も異なる。同形のものが難波宮址第89次調査地点から出土している。胎土も同じ浅黄橙色を呈している。

組相撲（6）

手捻り成形。胎土は橙褐色を呈する。上半身、下半身、襦は別作りで貼り合わせている。単純な作りであるが表現は巧い。

お多福（5）

型起こし成形。前後合わせ、中空である。胎土は橙褐色を呈する。内面に指頭圧痕が見られる。

狐面（3）

型起こし成形。器壁は厚く、指頭圧痕は内面に顕著にみられる。胎土はキラ粒子を含む、黒褐色を呈する。成形はやや粗く、耳の大きさは左右で異なる。

福助（7，9）

型起こし成形。前後合わせ、中空である。胎土は、橙褐色を呈する。7，9の作り方に相異が見られる。7は型抜き後に接合面を丁寧にヘラでナデ調整し、接合面を消している。また底部は中央にかけ窪ませ、ヘラで調整している。全体に描写が丁寧である。9は接合面をナデ調整しているのみである。

熊乗り金時（8）

型起こし成形。前後合わせ、中空である。底部穿孔。胎土は粗く黒褐色を呈する。土鈴状の様相を呈する。港区白銀館II遺跡の262Pから同形のものが出土している。胎土は橙褐色で本遺跡のものよりやや小さい。

ぶら人形（10）

この人形についてはぶら人形、腹孕人形、裸人形、友引人形と呼称されているが本稿では、郷土人形研究者の呼称であるぶら人形とする。

型起こし成形。前後合わせ、中空である。右足に穿孔を有する。穿孔は左右両タイプある。胎土は橙褐色を呈する。本来図にあるものが完形品ではなく、更に土製の手足がつくものである。手足は布で繋ぎ合わせる。おそらく三つ折れ人形を意識したものであろう。

獅子頭（11）

型起こし成形。指頭圧痕は内面に顕著に見られる。胎土はにぶい橙色を呈する。年頭や、祭礼の祝儀に邪悪な霊を追い払うために獅子舞を行ったり、獅子頭を飾った。祭礼の際の獅子頭に因み子どもの玩具として作られたといわれる。



図19 人形・ミニチュア・玩具

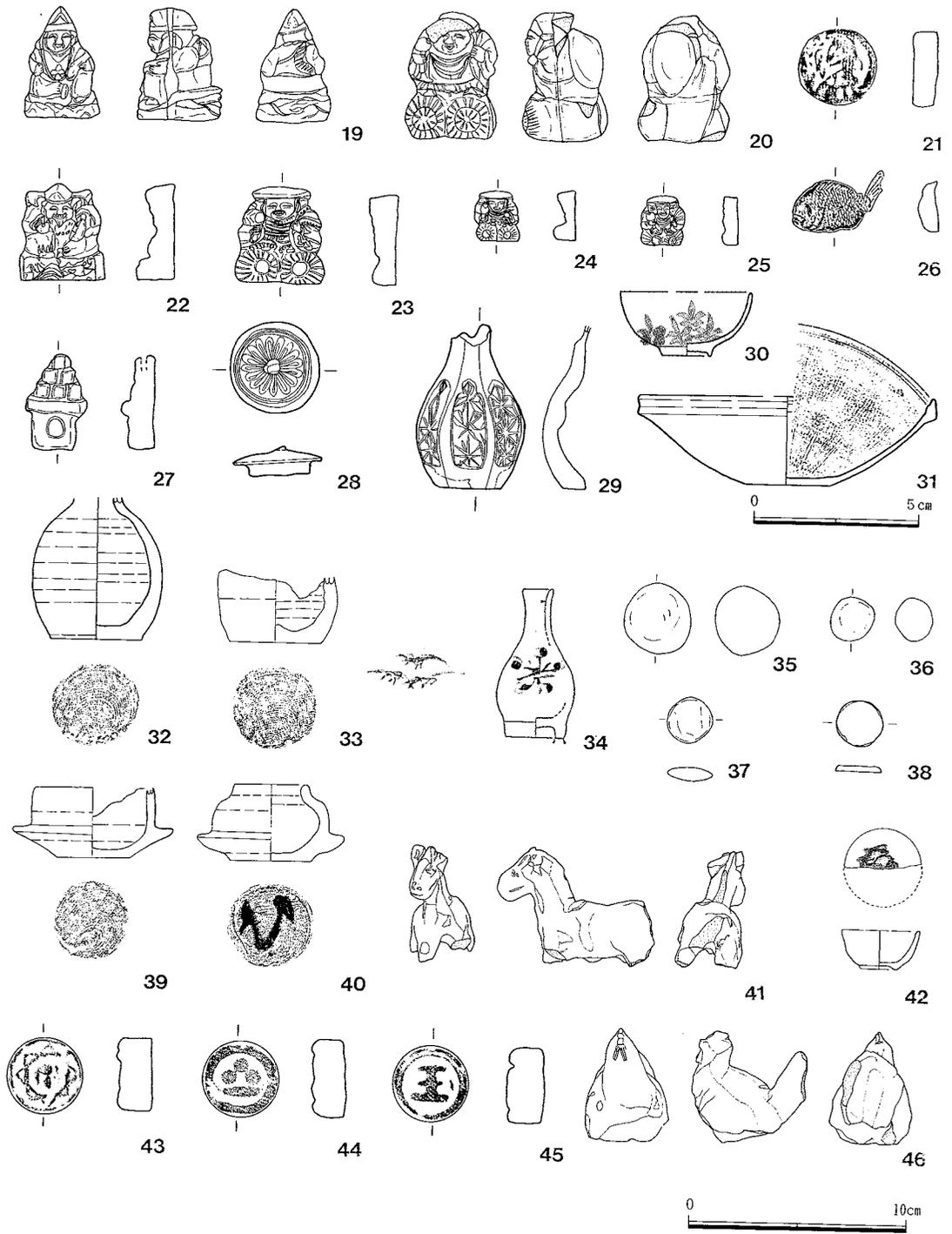


図20 人形・ミニチュア・玩具

天神様 (12)

型起こし成形。人形は前後合わせ，中実である。台座は別に作出している。台座の底部は楕円形に抉っている。中央に穿孔，穿孔は人形の下部まで達している。胎土は淡白褐色を呈する。束帯は焦げ茶色，台座は明るい緑色を彩色をしている。透明釉を施している。笏，手足は無色で施釉のみである。

亀 (13)

型起こし成形。上下合わせ，中空である。足は型抜き後にへうで作出。尾の右側付け根に後方から穿孔。胎土は淡白褐色を呈する。甲羅は緑釉，腹部は無釉である。

鹿乗り寿老人 (14)

型起こし成形。前後合わせ，中実である。鹿と寿老人は個別に作出している。胎土は，鹿は赤味を帯びた茶，寿老人は淡白褐色を呈する。斑点の白色は胡粉で描き，寿老人の団扇は黄色，衣は明るい緑色で彩色，無釉である。

富士見西行 (15)

手捻り成形。手足，衣，袖，荷，菅笠は個別に作出している。底部は窪ませている。胎土は褐色を呈する。衣は焦げ茶色，菅笠は赤，背面の袴，荷物は無色，無釉である。西行には，立ち姿の立西行と腰掛けている姿の富士見西行とがある。

犬 (16)

手捻り成形。鼻，目，耳は鉄釉，体部は灰釉である。口は孔を穿つ。底部（腹部）無釉。前足部欠損している。陶製。

大黒天 (17, 20, 23, 24, 25)

5点とも型起こし成形。17, 20は前後合わせ，17は中実で底部穿孔。20は中空である。胎土は5点とも橙褐色を呈する。23, 24, 25は片面のみで背面は平坦である。23の背面中央部は抉られている。また右下角に，斜め上方からの穿孔あり。細部にわたり精巧に作られている。24, 25は背面上部に，二カ所斜め上方からの穿孔あり。いずれの孔も乾燥，彩色の際に使用された孔であろう。25は顔を三つ持つ三面大黒天で，右に毘沙門天，左に弁財天を配するという。離れ剤のキラの残存が顕著である。

恵比須 (18, 19, 22)

型起こし成形。18, 19は前後合わせ中実，胎土は鈍い橙色を呈する。22の背面は平坦である。胎土は橙褐色を呈する。18, 22は細部にわたり精巧に作られている。19は底部穿孔，離れ剤のキラの残存が顕著である。23の大黒様と同様右下角に孔を有する。18, 19, 22は

鯛を抱えた鯛恵比須である。

馬 (41)

手捻り成形。耳，顔，胴は個別に作出。脚部，胎土は橙褐色を呈する。尾欠損。成形は粗いが描写は巧い。背に何か乗せていた痕跡あり。

鶏 (46)

手捻り成形。鶏冠，尾は捻りだして作出している。胎土はキラ粒子を含む黒褐色を呈する。腹部左右後方より孔を穿つ。棒状のものを差し込んで足を表現したものであろうか。

ミニチュア

蓋 (28)

型起こし成形。袴の部分は別に作出されている。胎土は淡白褐色を呈する。菊花が浮文されている。摘みは欠損している。

六角徳利 (29)

型起こし成形。1/2残存。胎土は淡白褐色を呈する。胴部に緑釉，胴下部，底部は無釉である。注口部は棒状工具で穿っている。

碗 (30, 42)

30はロクロ成形。染付で，外面に草花文が描かれている。畳付は無釉である。肥前系磁器。42はロクロ成形。1/2残存。染付で，見込みに文様あり。畳付は釉を搔きとっている。口縁部の器壁厚は一定ではない。高台内に磁器片付着，重ね焼きの痕であろうか。肥前系磁器。

播鉢 (31)

ロクロ成形。焼き締った上質のもので外面に火襷が見られる，備前の摺鉢を意識したのか。焼締め陶器。

壺 (32)

ロクロ成形。底部は左回転回し糸切りである。胎土は橙褐色を呈する。口縁部，胴部の一部は欠損している。

土製容器 (33)

ロクロ成形。底部は左回転回し糸切りである。胎土は橙褐色を呈する。胴部中央及び，口縁部が欠損しているため形態は不明瞭である。

小瓶 (34)

ロクロ成形。畳付は施釉後に釉を搔きとっている。畳付に離れ砂が付着している。施釉

にむらがある。染付で、外面に笹梅花文様を描いている。瀬戸美濃系磁器。

釜型土製品 (39, 40)

39はロクロ成形。底部は左回転離し糸切りである。鐔から口縁部にかけて直立している。口縁部一部欠損。胎土にキラ、長石粒を含む。橙褐色を呈する。両角氏の形態分類の A1-b-ロにあたる。40はロクロ成形。底部は左回転離し糸切りである。僅かであるが外面器壁全体に赤色の彩色痕が認められる。底部に「ひ」に似た字が墨書されている。胎土はキラ粒子を含む。橙褐色を呈する。両角氏の形態分類の B1-b-ロにあたる。

玩具

泥面子 (21, 26, 27, 43, 44, 45)

6点とも型起こし成形。胎土は橙褐色を呈する。21は「萩と鹿」の文様か。縁部は摩耗している。43～45と比較し器高は薄い。26は「鯛」。尾は型抜き後に捻り作出している。背面の前部に穿孔あり。背面は平坦である。キラの残存は顕著である。かなり精巧に作出されている。27は「御三方」。供物は小判か。供物に赤色の彩色痕あり。頭頂部に穿孔あり。背面は平坦で調整は粗い。43は「重ね榊に二つ巴」を配している文様である。縁部は摩耗している。44は「三つ星に一つ引き」文様。縁部、底部の一部は摩耗している。赤色の彩色痕、キラの残存顕著である。45は「玉」の字を配する文様である。縁部の半分は二重になっている。型抜きの際のズレであろうか。文字の浮文は鮮明である。縁部の一部は摩耗している。

土玉 (35, 36)

手捻り成形。胎土は橙褐色を呈する。大きさは一定していない。使用方法についてはいまだ判然としていない。

基石状土製品 (37)

手捻り成形。不整形、掌痕が認められる。胎土は橙褐色を呈する。

不明土製品 (38)

型起こし成形。上下面とも平坦である。下方がやや広がっている。胎土はキラ粒子を含む、黒褐色を呈する。

以上本調査区から出土した人形・ミニチュア・玩具類について成形技法を中心に記述した。また遺構ごとの遺物の名称、初現、共伴遺物との年代観については、VII-3の発掘調査の成果に記述した。

表2 人形・ミニチュア・玩具類

単位 cm (残存値)

図版番号	遺構番号	器種	材質	法量			
				高さ	幅	奥行	その他
19-1	SK02	狐	土器	8.20	4.50	4.40	
19-2	SK02	狐	土器	(6.30)	2.00	3.10	
19-3	SK02	狐面	土器	5.40	4.40	—	厚さ 2.10
19-4	SK02	狐	土器	(10.50)	4.50	5.20	
19-5	SK02	お多福	土器	(5.50)	(4.50)	—	
19-6	SK02	組相撲	土器	(3.90)	(5.00)	(3.10)	
19-7	SK02	福助	土器	7.40	6.40	5.40	
19-8	SK02	熊乗り金時	土器	7.40	5.30	4.00	
19-9	SK02	福助	土器	7.00	6.70	5.00	
19-10	SK02	ぶら人形	土器	9.00	4.70	2.80	
19-11	SK02	獅子頭	土器	(4.30)	(5.00)	5.30	
19-12	SK02	天神様	土器	(4.40)	4.80	3.10	
19-13	SK02	亀	土器	1.90	(4.50)	3.30	
19-14	SK02	鹿乗り寿老人	土器	(3.20)	2.20	5.00	
19-15	SK02	富士見西行	土器	(4.50)	3.50	5.20	
19-16	SK02	犬	陶器	1.70	2.50	1.20	
19-17	SK02	大黒天	土器	2.80	2.10	1.60	
19-18	SK02	恵比須	土器	2.60	(1.90)	1.80	
20-19	SK02	恵比須	土器	3.50	2.40	2.50	
20-20	SK02	大黒天	土器	3.90	2.60	2.30	
20-21	SK02	泥面子	土器	—	0.70	—	径 2.30
20-22	SK02	恵比須	土器	3.00	2.50	0.80	
20-23	SK02	大黒天	土器	2.80	2.50	0.90	
20-24	SK02	大黒天	土器	1.50	1.30	0.50	
20-25	SK02	三面大黒天	土器	1.50	1.30	0.50	
20-26	SK02	泥面子	土器	1.90	1.70	0.60	
20-27	SK02	泥面子	土器	2.90	1.90	1.00	
20-28	SK02	蓋	土器	(1.00)	2.70	—	受径 1.80
20-29	SK02	六角徳利	土器	(5.00)	—	1.90	
20-30	SK02	碗	磁器	2.00	(4.10)	—	底径 1.50
20-31	SK02	檯体	陶器	2.70	(9.00)	—	底径 (2.60)
20-32	SK02	壺	土器	(5.00)	—	4.10	
20-33	SK02	土製容器	土器	(3.30)	—	4.10	
20-34	SK02	小瓶	磁器	6.70	1.60	2.70	
20-35	SK02	土玉	土器	—	2.90	—	径 3.10
20-36	SK02	土玉	土器	—	1.70	—	径 2.00
20-37	SK02	碁石状土製品	土器	—	0.60	—	径 2.10
20-38	SK20	不明	土器	—	0.30	—	径 2.10
20-39	SK09	釜形土製品	土器	3.20	5.40	—	底径 3.30
20-40	SK09	釜形土製品	土器	3.50	3.40	—	底径 3.60
20-41	SK09	馬	土器	(5.20)	7.20	3.10	
20-42	SK20	碗	磁器	1.80	3.60	—	底径 1.60
20-43	試掘坑	泥面子	土器	—	1.10	—	径 2.40
20-44	試掘坑	泥面子	土器	—	1.00	—	径 2.10
20-45	試掘坑	泥面子	土器	—	1.10	—	径 2.20
20-46	SK20	鶏	土器	5.20	5.20	3.80	

5 金属製品 (21~23図)

本調査区から出土した金属製品は157点で、銅製品97点、鉄製品60点であった。遺構別にみると、SK01-8点(銅製品-3点、鉄製品-5点)、SK02-2点(銅製品-2点)、SK04-3点(鉄製品-3点)、SK06-4点(銅製品-2点、鉄製品-2点)、SU07-3点(銅製品-1点、鉄製品-2点)、SK09-123点(銅製品-76点、鉄製品-47点)、SU11-10点(銅製品-9点、鉄製品-1点)、SK20-3点(銅製品-3点)、表土-1点(銅製品1点)であった。銭貨は別扱いとした。出土地点、計測値は表3、4に記載した。

銅製品 (1~28)

1は筒状製品で、内面は下部口から2mmを折り返ししている。用途不明。2、3は懐中鏡である。2は無文様。3は「天下一藤原作」の銘あり。外出や旅に携帯する鏡である。4はおろし金、厚手の銅板を使用。左右の縁は二回折り返し、表裏の側を作成している。爪刺は表裏に見られ、両面とも下方から刺を起したものである。表は細かく、裏は粗く刺を配している。5は覆金具、引き手の裏側の覆いである。6は環状製品、用途不明。7は巻状製品、蝶番の一部か。8、9は蝶番である。8は木製品の一部に装着した状態で出土している。9は赤の漆塗り木製品の一部に装着した状態で出土している。10は鉸、先端部は欠損している。2は引き手、小形の引出しの引き手であろうか。13は飾り金具、鉸がついたままで出土した。14、15は銅線、14は、二本の銅線を捻っている。15は、木に差し込んだ状態で出土している。16は角金具、引きだし等の角に取り付けられた金具である。11、17は不明製品である。11は、紙の端を胴部に折り込み巻きつけている。19は残存部が少ないため形態は不明である。18は切羽である。周縁には刻みが施されている。19は目貫である。目釘の表裏に施される装飾目貫である。目貫には表裏ある。本調査区のもの裏目貫である。

煙管 (21~28)

21~26はSK09出土、27、28はSK11出土である。20~24、27、28は雁首、25、26は吸口である。20は、脂返しの湾曲が大きく、火皿と首部の接合部に補強帯はない。21は、脂返しの湾曲が大きく、補強帯がない。22は、首部は細く、火皿も小さい。脂返しの湾曲は大きい。23は、首部が細く、火皿は大きい。脂返しの湾曲は大きい。敲打痕がある。24は、肩付きで、脂返しは大きく湾曲する。補強帯の有無については火皿部が欠損しているため明らかでない。27は、脂返しの湾曲が小さく、首部は短い。敲打痕あり。火皿は欠損している。28は、脂返しの湾曲小さく、首部は短い。25は、小口から口唇部にかけ緩やかに細

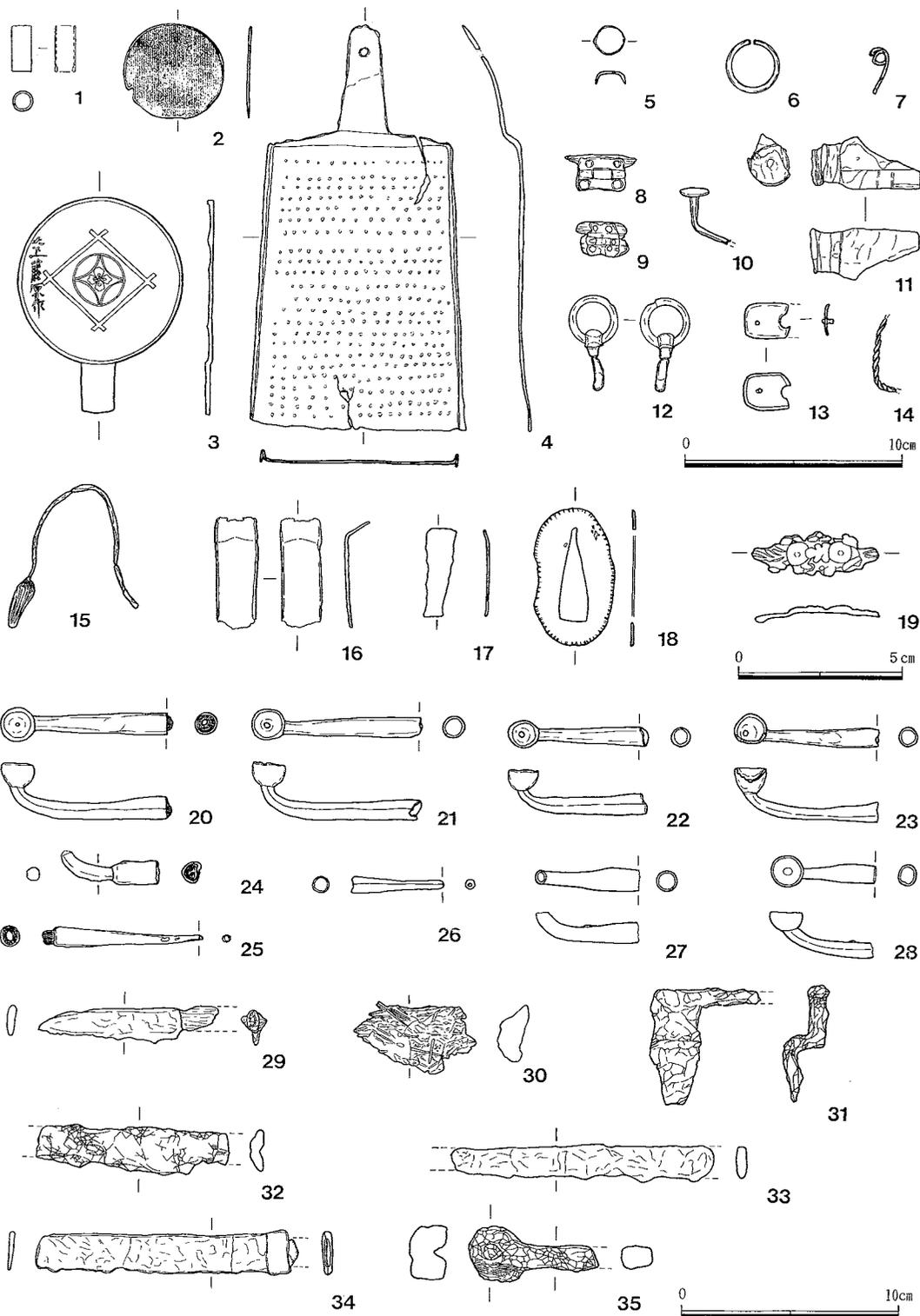


図21 金属製品

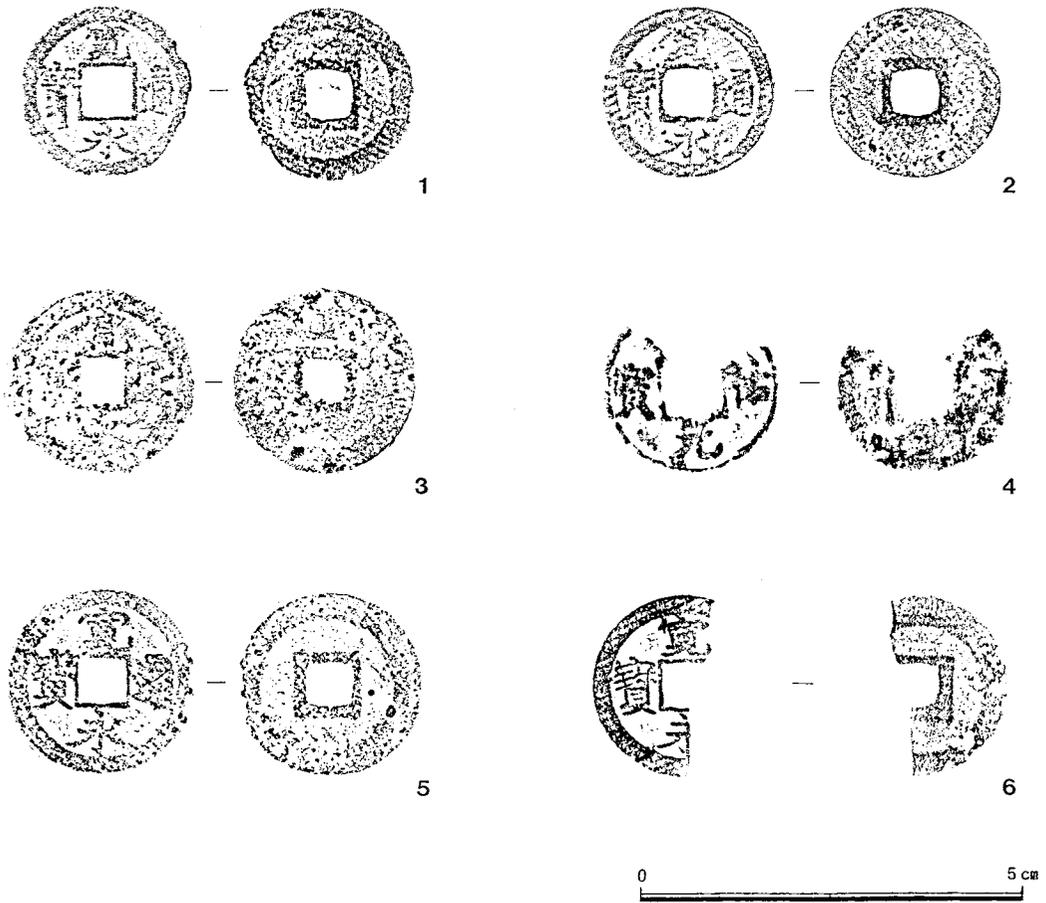
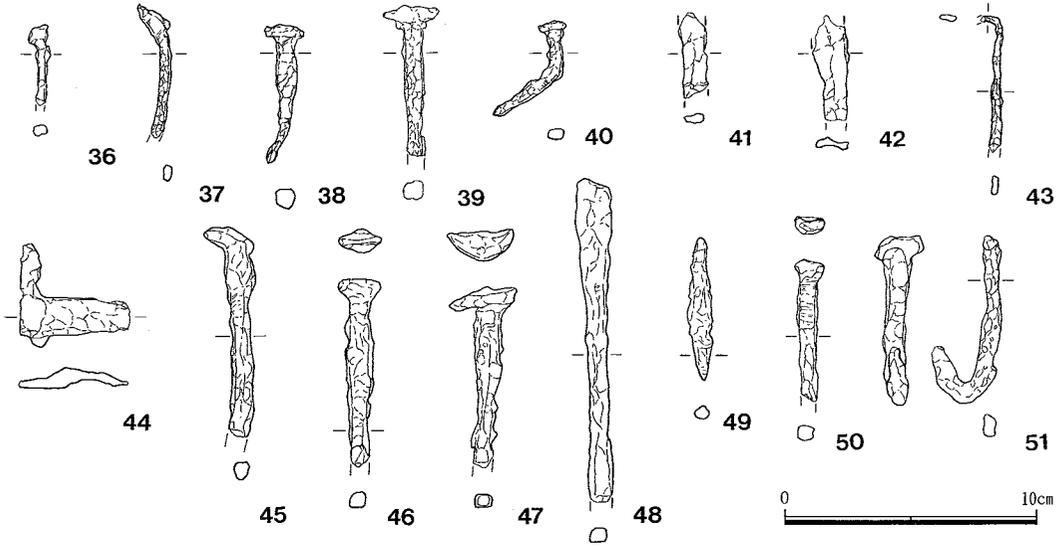
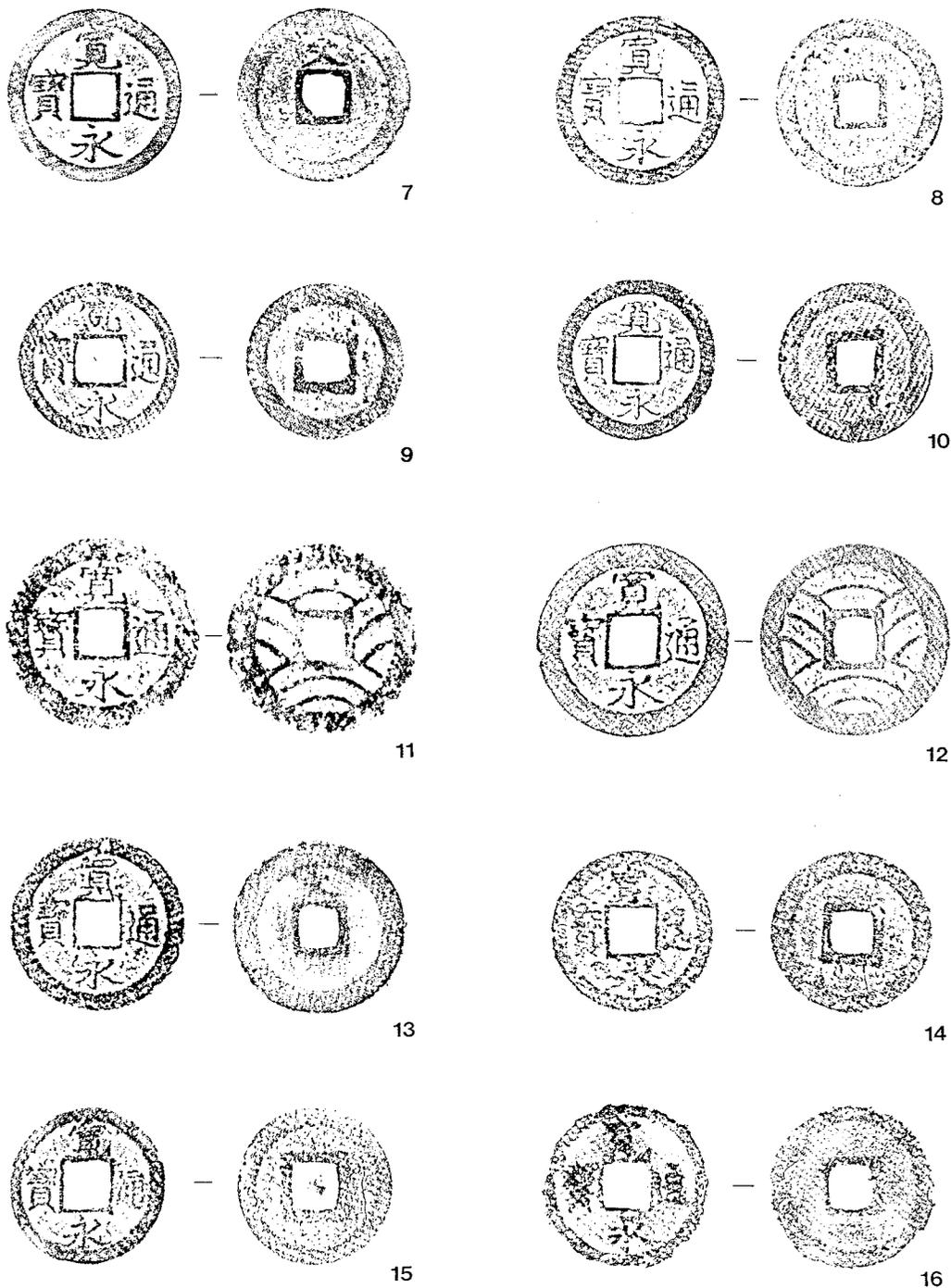


図22 金属製品



0 5 cm

図23 金属製品

くなる。口唇部は欠損している。ラウの一部残存している。26は、25に比べやや丸みをもちながら細くなり口唇部はふくらむ。

以上列記した煙管を古泉編年で分類してみると、20～23は第IV段階(18世紀前半)。24は第II段階(17世紀前半)。27、28は第V段階(18世紀後半)であった。25、26は吸口で古泉編年に帰属する資料ではなかった。

鉄製品 (29～51)

本調査区から出土した鉄製品は欠損と腐食したものが大半で、その形状を捉えることは困難であった。釘の名称については、安田善三郎『釘』を参考とした。頭巻釘は頭を平坦に叩き卷いたもの。工作上等なる雨戸の板其他善きものに使用する。折釘は、直角に曲がれる釘で大折釘、中折釘、小折釘に別ち、大は、長さ坐迄打廻し2寸、中は1寸五分、小は一寸なり。角釘は普通の角形釘である。合釘は両端が尖れる真直な釘で、多くの物を短く用いる。列記した釘は本調査区から出土したもののみを記述した。

29、33、34は刀子。29は棟部切先が狭く短い。木製の柄部が僅かに残存している。33は切先、棟部は厚い。柄部欠損。34は棟部は長く厚さは薄い。切先欠損。刃と柄の接合部は真鍮である。柄部欠損している。30は針状のものが固まって劣化している。32は剃刀か。刃先に向かいやや細くなる。刃先、柄部欠損している。35は留金具か。頭部に別の金属が差し込まれている。脚部は欠損している。36、38、39、40、46、47、50、51は頭巻釘で、51以外は脚部を損している。51は頭巻釘の脚部が曲げられたものか。48は角釘、脚部は欠損している。49は合釘か。31、41、42は不明の鉄片。欠損している為形態把握は困難である。

銭貨

本遺跡からは銭貨が27点出土した。遺構別に見ると、SU01-2点、SK06-1点、SK09-19点、SK11-3点、SK20-1点、表土-1点であった。銭の鑑識は『東亞銭志』『新寛永銭鑑識と手引き』を参考とした。

渡来銭 (4)

4は「景祐元宝」である。北宋期1064年初鑄の北宋銭である。渡来銭は中世後期になると中国の公鑄銭に混じり粗悪な私鑄銭も渡来、さらに国内でも鑄造するようになったといわれる。本遺跡のものは渡来銭か模鑄銭か明確でない。模鑄銭の鑄型は、16世紀中期から後期にかけての遺跡、堺市環濠都市SKT78、271、354、京都市平安京八条三坊、鎌倉市今小路西遺跡から出土している。

古寛永通宝 (5、6)

表3 金属製品観察表

図版番号	遺構番号	種 別	材質	法 量			
				長 さ	幅	厚 さ	そ の 他
21-1	SU01	筒状製品	銅	2.00	0.90	0.20	
21-2	SK02	懐中鏡	銅	—	—	0.05	径 4.50
21-3	SK02	柄鏡	銅	9.80	—	1.50	径 7.50
21-4	SK09	おろし金	銅	18.50	9.80	0.10	
21-5	SK09	覆金具	真鍮	1.30	—	0.05	
21-6	SK09	環状製品	銅	—	—	0.30	径 1.70
21-7	SK09	巻状製品	真鍮	(1.50)	—	0.10	
21-8	SK09	蝶番	真鍮	2.20	1.50	—	
21-9	SK09	蝶番	真鍮	1.80	1.50	—	
21-10	SK09	鋏	真鍮	(2.70)	1.40	—	
21-11	SK09	不明	真鍮	(5.00)	2.10	0.10	
21-12	SK09	引き手	真鍮	4.20	—	0.30	径 2.10
21-13	SK09	飾金具	真鍮	(2.10)	1.60	0.05	
21-14	SK09	銅線	銅	(3.40)	0.20	—	
21-15	SK09	銅線	銅	(9.50)	0.30	—	
21-16	SK06	角金具	銅	(5.00)	2.00	0.10	
21-17	SU11	不明	銅	(4.10)	1.20	0.05	
21-18	SU11	切羽	銅	4.20	3.50	0.10	
21-19	SU11	目貫	銅	3.80	1.40	0.15	
21-20	SK09	煙管・雁首	真鍮	7.60	—	—	火皿径 1.50 小口径 0.90
21-21	SK09	煙管・雁首	真鍮	7.80	—	—	火皿径 1.50 小口径 0.90
21-22	SK09	煙管・雁首	真鍮	6.20	—	—	火皿径 1.20 小口径 0.80
21-23	SK09	煙管・雁首	真鍮	6.30	—	—	火皿径 1.40 小口径 0.80
21-24	SK09	煙管・雁首	真鍮	(4.40)	—	—	火皿径 — 小口径 (1.10)
21-25	SK09	煙管・雁首	真鍮	7.50	—	—	小口径 0.80 吸口径 (0.30)
21-26	SK09	煙管・雁首	真鍮	(4.20)	—	—	小口径 (0.70) 吸口径 0.50
21-27	SU11	煙管・雁首	真鍮	(4.80)	—	—	火皿径 — 小口径 0.90
21-28	SU11	煙管・雁首	真鍮	(4.80)	—	—	火皿径 1.40 小口径 (0.80)
21-29	SK09	刀子	鉄	(8.20)	—	0.30	
21-30	SK09	不明	鉄	—	—	—	
21-31	SK09	不明	鉄	(5.40)	2.40	0.60	
21-32	SK09	剃刀か	鉄	(9.00)	1.20	0.50	
21-33	SK09	刀子か	鉄	(12.00)	1.50	0.50	
21-34	SK09	刀子	鉄	(12.00)	1.80	0.30	
21-35	SK09	留金具か	鉄	(6.00)	2.40	—	
21-36	SU01	頭巻釘か	鉄	(3.30)	0.60	—	
21-37	SU01	打釘か	鉄	(5.60)	0.30	—	
21-38	SU01	頭巻釘	鉄	(5.60)	0.70	—	
21-39	SU01	頭巻釘	鉄	(6.00)	0.90	—	
21-40	SK04	頭巻釘	鉄	(5.60)	0.60	—	
21-41	SK04	鉄片	鉄	(3.60)	(1.30)	(0.20)	
21-42	SK06	鉄片	鉄	(0.70)	(1.50)	(0.30)	
21-43	SK06	手抜きか	鉄	(0.30)	(0.30)	(0.60)	
21-44	SK07	不明	鉄	(4.50)	(4.50)	(0.60)	
21-45	SU09	折れ釘	鉄	(8.50)	0.40	—	
21-46	SK09	頭巻釘	鉄	(7.70)	0.60	—	
21-47	SK09	頭巻釘	鉄	(4.40)	(0.70)	—	
21-48	SK09	角釘	鉄	(12.90)	(0.60)	—	
21-49	SK09	合釘	鉄	(5.90)	(0.60)	—	
21-50	SK09	頭巻釘	鉄	(5.60)	(0.70)	—	
21-51	SU11	頭巻釘	鉄	(6.90)	(0.50)	(0.90)	

5, 6は寛永十三年(1636)から十七年(1640)にかけ武蔵国江戸浅草橋場と江戸芝網縄手で鑄造された。また寛永十七年の鑄錢停止後, 明暦初年(1655)に錢が不足し再び鑄造されたとある。

新寛永通宝(1~3, 7~12, 14~16)

7, 13寛文八年(1668)から天和三年(1683)にかけ江戸亀戸村で鑄造された錢貨で, 背面に「文」の字を配することから通称「文錢」と呼ばれた。1, 2, 8, 9, 10, 14, 15は宝永五年(1708)から正徳三年(1713)にかけ江戸亀戸村で鑄造されたものと思われる。16は元文期(1736~1740)に鑄造されたものか。劣化しているため判読は出来ない。11, 12は明和六年(1769)深川十萬坪で鑄造された。波紋は「11波」である。明和五年(1768)に鑄造されたものが最初で波紋は「21波」であった。四文錢として通用し, 当時「波錢」といわれていた。3は文字が劣化しているため, 鑄造年代の特定は出来なかった。

以上錢貨を含む金属製品について記述してきたが, 各遺構について金属と主に陶磁器からの年代観についてはVIIの発掘調査の成果に記述した。

表4 錢貨観察表

図版番号	遺構番号	種別	材質	単位 mm		
				外径	穿径	錢厚
21-1	SU01	新寛永通宝	銅	23.0	6.5	1.0
21-2	SU01	新寛永通宝	銅	23.0	6.5	1.0
21-3	SK06	新寛永通宝	銅	24.0	6.0	1.5
21-4	SK09	景祐元宝	銅	24.0	7.0	1.5
21-5	SK09	古寛永通宝	銅	24.5	6.0	1.0
21-6	SK09	古寛永通宝	銅	24.5	6.0	1.0
22-7	SK09	新寛永通宝	銅	25.0	6.0	1.0
22-8	SK09	新寛永通宝	銅	23.5	6.0	1.5
22-9	SK09	新寛永通宝	銅	23.0	6.0	1.0
22-10	SK09	新寛永通宝	銅	23.5	6.5	1.0
22-11	SK09	新寛永通宝	銅	27.0	7.0	1.5
22-12	SK09	新寛永通宝	銅	27.0	6.5	1.5
22-13	SK11	新寛永通宝	銅	25.0	6.5	1.0
22-14	SK11	新寛永通宝	銅	23.5	6.5	1.0
22-15	SK11	新寛永通宝	銅	22.0	6.5	1.0
22-16	表土	新寛永通宝	銅	23.0	6.0	1.0

VII 発掘調査の成果

1 遺構

今回の家畜病院地点の発掘調査は水戸藩中屋敷の初めての本格的な発掘調査であった。

江戸時代の遺構に関しては、幕末以降の削平地業の影響もあり柱穴や礎石列といった具体的な建物に関わる遺構は全く確認することができなかった。廃棄土坑と考えられる大型土坑や溝状遺構が存在することから、調査地点は少なくとも主要な建物が集中する地域ではなかったものと判断される。このことは、地下室が僅かしか検出されなかったことから間接的に裏付けられる。また、古絵図との対比から調査地点は安志藩下屋敷との境界付近に位置する可能性が高いと推定されるが、調査範囲からは境界を示すような柱穴列や石組遺構等は検出されなかった。先にあげた地下室等の遺構の分布が希薄なことは、調査地点が水戸藩中屋敷の外縁部に位置することを逆に示していると考えられることも可能であろう。

今後は、水戸藩徳川家中屋敷の藩邸内の絵図等の史料の公開および研究を押し進め、同じ本郷キャンパス内の加賀藩上屋敷において、近世考古学上で重要な成果を得た古絵図との対比による考古学的調査を、農学部の位置する弥生地区でも行えるようにして、藩邸相互の比較研究を行うことを将来展望としたい。

2 陶磁器・土器

(1) 分析の方法

家畜病院地点出土の陶磁器群の整理、分析をするにあたっては分類可能な遺物全点を分析の対象とし、特に遺構中より出土したものについては遺構別の把握を行い、以後の分析の基礎資料とする。以前筆者らが関わった医学部附属病院地点では、遺構一括出土遺物をまとまりとしてとらえ、定量的分析の対象とした。分析は底部片数100片以上出土した遺構について行ったが、家畜病院地点では推定個体数100個体以上出土の遺構を対象とした。数量は推定個体数で行った。分析の方法についてはほぼ医学部附属病院地点で行った方法を踏襲した。遺構一括遺物の年代的な分析を行うにあたっては次のような手順で行った。

- ① 出土した陶磁器全般にわたり胎土、施釉技法、成形技法、文様等の特徴で産地の、また主に器形的特徴で器種の分類を行う。さらに細分可能な器種に関しては細分類を行い、その分類基準となった諸特徴を示す。

胎質	産地	器種	器種	器種
J 磁器	A 輸入	1 碗	19 水滴	37 薬研
T 陶器	B 肥前系	2 皿	20 蓮華	38 手焙り
D 土器	C 瀬戸・美濃系	3 小皿	21 植木鉢	39 おろし皿
	D 京都・信楽系	4 型皿	22 花生け	40 油受け皿
	E 備前系	5 鉢	23 片口鉢	41 油徳利
	F 志戸呂系	6 小坏	24 喫煙具	42 行平鍋
	G 常滑系	7 猪口	25 鬘水入れ	43 十能
	H 萩系	8 仏飯器	26 甕	44 ひょうそく
	I 万古系	9 香炉	27 水注	45 瓦燈
	J 大堀・相馬系	10 瓶	28 洩瓶	46 八間
	K 丹波系	11 仏花器	29 播鉢	47 たんころ
	L 堺系	12 油壺	30 餌入	48 焜炉
	M 益子・笠間系	13 蓋物	31 火鉢	49 火消し壺
	N 九谷系	14 蓋	32 柄杓	50 五徳
	O 壺屋系	15 壺	33 鍋	51 焼塩壺
	P 淡路系	16 急須	34 土瓶	52 燭台
	Z 不明	17 紅皿	35 戸車	53 蒸し器
		18 合子	36 盤	54 懐炉

- ② 遺構一括遺物群における各分類の数量を推定個体数での呈示を行い、以降の分析の基礎資料とする。
- ③ 陶磁器群がほぼ同様の器種組成をするものについて同時期の廃棄ととらえると共に、その組成が相対年代に位置づけるに際して共通の理解を得られるであろう最小単位の把握を行う。またその組成を呈示する。
- ④ 各最小単位の相対的順序を把握する。遺跡における層序、遺構の切り合いから各期の組列の方向を推定し、段階の古い順にその様相をとらえていく。
- ⑤ 主な遺構の一括遺物群の年代的集中を知る手掛かりとして時間的な分布状況を示す。これは遺物群のもつ年代幅が分析の妥当性そのものに影響を与えることが指摘されう

農学部家畜病院地点 発掘調査報告

和名 器名 分類

◎ J A 群—輸入磁器

- 1—碗 (中国、朝鮮)
- 2—皿 (中国、朝鮮)
- 5—鉢 (中国)
- 6—小坏 (中国)
- 10—瓶 (中国、朝鮮)
- 13—蓋物 (中国)
- 14—蓋 (中国)
- 15—壺 (中国)
- 20—壺車 (中国)
- 26—壺 (中国)
- 27—水注 (中国)
- 30—瓢入 (中国)
- 36—盤 (中国)

◎ J B 群—肥前系磁器

- 1—碗
 - ・ J B-1-a (高台断面「U」字状、いわゆる初期伊万里)
 - ・ " b (高台内転輪)
 - ・ " c (高台断面三角の製品、長吉谷系指標)
 - ・ " d (高台断面「U」字状で高台高の高い製品)
 - ・ " e (高台断面「U」字状で高台高の低い製品、内山系)
 - ・ " f (高台径が小さい半球形の薄手碗)
 - ・ " g (いわゆるくわんか、縁付・作りの粗雑な碗)
 - ・ " h (高台径が小さい腰の張る碗)
 - ・ " i (高台高が高く、いわゆる小広東碗)
 - ・ " j (高台径が小さい腰の張る碗、小丸碗)
 - ・ " k (大瓶りの筒形碗、いわゆる初期伊万里)
 - ・ " l (小瓶りの筒形碗)
 - ・ " m (広東碗、蓋付有)
 - ・ " n (輪反碗、蓋付有)
 - ・ " o (小瓶りの腰が張る碗、湯呑碗)
 - ・ " p (高台から直線的に開く薄手の碗、飯碗、蓋付有)
 - ・ " q (高台が「八」の字状に開く碗、大瓶りで腰が張る、蓋付き)
- 2—皿
 - ・ J B-2-a (高台断面「U」字状、いわゆる初期伊万里)
 - ・ " b (高台断面三角で高台径が小さい、ズンペリ家指標)
 - ・ " c (高台断面三角で高台径が大きい、長吉谷系など指標)
 - ・ " d (高台断面「U」字状で上質の製品、南川原系ノ社系指標)
 - ・ " e (高台断面「U」字状)
 - ・ " g (縁付・作りが粗雑、外山系)
 - ・ " h (蛇ノ目高台、初期伊万里)
 - ・ " i (蛇ノ目四形高台で高台高が高い)
 - ・ " j (蛇ノ目四形高台で高台高が低い)
 - ・ " k (見込み蛇ノ目輪割きで高台高が高い)
 - ・ " l (見込み蛇ノ目輪割きで高台径が小、斜格子文)
 - ・ " m (見込み蛇ノ目輪割きで高台径が小、梅花繫ぎ文)
 - ・ " n (鍋島)
- 3—小皿
 - ・ J B-3-a (高台高が低い)
 - ・ " b (輪形)
 - ・ " c (高台断面三角形)
 - ・ " d (蛇ノ目四形高台)
- 4—型皿
 - ・ J B-4-a (糸切り細工の貼付高台)
 - ・ " b (型作り)
- 5—鉢
- 6—小坏
 - ・ J B-6-a (丸形)
 - ・ " b (輪反形)
 - ・ " c (極めて薄手の輪反形)
 - ・ " d (腰折れ直立形)
 - ・ " e (型作り)
- 7—猪口
 - ・ J B-7-a (蛇ノ目四形高台)
 - ・ " b (輪高台)
- 8—仏飯器
- 9—香炉
- 10—瓶
 - ・ J B-10-a (大型長頸瓶)
 - ・ " b (瓶子形)
 - ・ " c (御神酒徳利)
 - ・ " d (御徳利)
- 11—仏花器
- 12—油壺
- 13—蓋物
 - ・ J B-13-a (丸筒形)
 - ・ " b (筒形)
 - ・ " c (車箱形)
 - ・ " d (壺車形)
- 14—蓋
 - ・ J B-14-a (JB-1-e、hの蓋、丸蓋)
 - ・ " b (JB-1-bの蓋、広東碗)
 - ・ " c (JB-1-mの蓋、輪反碗)
 - ・ " d (JB-1-qの蓋、飯碗)
 - ・ " e (JB-1-qの蓋、「八」の字状高台の碗)
 - ・ " f (JB-13の蓋、蓋物)
 - ・ " g (JB-15の蓋、壺)
 - ・ " h (JB-16の蓋、急須)
 - ・ " i (JB-18の蓋、合子)
- 15—壺

- 16—急須
- 17—紅皿
- 18—合子
- 19—水筒
- 20—蓮華
- 21—植木鉢
- 22—花生付
- 24—喫煙具
- 29—摺鉢
- 34—土瓶
- 35—戸車
- 36—盤

◎ J C 群—陶戸・美濃系磁器

- 1—碗
 - ・ J C-1-a (丸碗)
 - ・ " b (小瓶りの筒形碗)
 - ・ " c (広東碗、蓋付有)
 - ・ " d (輪反碗、蓋付有)
 - ・ " e (小瓶りの腰が張る碗、湯呑碗)
 - ・ " f (高台から直線的に開く薄手の碗、飯碗、蓋付有)
- 2—皿
 - ・ J C-2-a (蛇ノ目四形高台)
 - ・ " b (輪高台)
 - ・ " c (蛇ノ目高台)
- 3—小皿
 - ・ J C-3-a (折縁皿、木型打込)
 - ・ " b (丸皿)
- 4—型皿
- 5—鉢
- 6—小坏
 - ・ J C-6-a (丸筒形)
 - ・ " b (筒反形)
 - ・ " c (筒形)
 - ・ " d (極めて薄手、細密な上絵付)
- 7—猪口
- 8—仏飯器
- 9—香炉
- 10—瓶
 - ・ J C-10-a (長頸瓶)
 - ・ " b (瓶子形)
 - ・ " c (御神酒徳利)
 - ・ " d (御徳利)
- 11—仏花器
- 12—油壺
- 13—蓋物
- 14—蓋
 - ・ J C-14-a (JC-1-cの蓋、広東碗)
 - ・ " b (JC-1-dの蓋、輪反碗)
 - ・ " c (JC-1-fの蓋、飯碗)
 - ・ " d (JC-13の蓋、蓋物)
 - ・ " e (JC-15の蓋、壺)
 - ・ " f (JC-18の蓋、合子)
 - ・ " g (JC-16の蓋、急須)
- 15—壺
- 16—急須
- 18—合子
- 19—水筒
- 20—蓮華
- 21—植木鉢
- 34—土瓶

◎ J N 群—丸谷系磁器

- 2—皿
- 6—小坏

◎ J P 群—淡路系磁器

- 20—蓮華

◎ J Z 群—生産地不明

和名 器名 分類

◎ T A 群—輸入陶器

- 1—碗 (ヨーロッパ)
- 2—皿 (ヨーロッパ、ベトナム)
- 5—鉢 (ヨーロッパ)
- 6—小坏 (ヨーロッパ)
- 14—蓋 (ヨーロッパ)
- 27—水注 (ヨーロッパ)

◎ T B 群—肥前系陶器

- 1—碗
 - ・ T B-1-a (いわゆる兵器手)
 - ・ " b (京焼風陶器丸碗)
 - ・ " c (京焼風陶器平碗)
 - ・ " d (駒毛丸碗)
 - ・ " e (駒毛目筒形碗)
 - ・ " f (陶胎胎付)
- 2—皿
 - ・ T B-2-a (網紋輪輪割皿、内野山窯)
 - ・ " b (薄縁皿)
 - ・ " c (京焼風陶器兵器給皿)

表 5 陶磁器・土器の分類(1)

第II部 東京大学構内の遺跡発掘調査報告

- ・TB-2-d (砂目灰軸皿、内野山窯)
- 5—鉢
 - ・TB-5-a (刷毛目鉢)
 - ・ " b (三島手鉢)
 - ・ " c (京坂陶器鉢)
 - ・ " d (瀬原輪軸刷鉢、内野山窯)
- 6—小塚
- 9—香炉
 - ・TB-9-a (陶胎夾付)
 - ・ " b (京坂陶器)
- 10—蓋
- 13—蓋物
 - ・TB-13-a (陶胎夾付)
 - ・ " b (刷毛目)
- 14—蓋
- 15—蓋
- 23—片口鉢
 - ・TB-23-a (鉢形)
 - ・ " b (深皿形、蛇ノ目輪割ぎ)
- 26—壺
- 29—搦鉢
- ◎TC群—瀬戸・美濃系陶器
 - 1—碗
 - ・TC-1-a (天目碗)
 - ・ " b (白天目)
 - ・ " c (灰軸丸碗)
 - ・ " d (御室碗、灰軸に磨かれた山水の呉須絵)
 - ・ " e (長の、小振りの灰軸半球形梅鉢文碗)
 - ・ " f (腰が張る二段の段を有する碗、灰軸鉄軸流し)
 - ・ " g (灰軸に柳文の鉄絵、「八」の字状に開く、柳葉碗)
 - ・ " h (太白手、丸碗)
 - ・ " i (太白手、筒形碗)
 - ・ " j (太白手、広東碗)
 - ・ " k (体部中位に大きな凹み有、灰軸)
 - ・ " l (せんじ、半筒形碗)
 - ・ " m (京坂風丸碗、半球形の小振りの碗、雷文など多い)
 - ・ " n (京坂風平碗)
 - ・ " o (尾呂茶碗、鉄軸)
 - ・ " p (香炉茶碗、漆黒釉に長石釉散らし)
 - ・ " q (半筒碗、錫輪状、横位や波状の沈線)
 - ・ " r (トビガンナ状の押形文、藍茶碗、内外面割分け)
 - ・ " s (刷毛目)
 - ・ " t (しのぎ)
 - ・ " u (御精碗、内面・外面上半灰軸、外面下半精軸)
 - ・ " v (半筒碗、灰軸榫輪割分け)
 - ・ " w (小杉茶碗、京都・信楽系碗の写し)
 - ・ " x (緑軸丸碗)
 - ・ " y (奈良茶碗、壺形有、端反、鉄絵など)
 - 2—皿
 - ・TC-2-a (灰軸丸皿、ビン腹有)
 - ・ " b (灰軸丸皿、輪状底重有底有)
 - ・ " c (志野丸皿)
 - ・ " d (志野輪印花皿)
 - ・ " e (摺絵皿、御深井)
 - ・ " f (石皿、大坂有)
 - ・ " g (馬ノ目皿、見込み外周に扁平な鉄絵による渦巻文)
 - ・ " h (太白手)
 - ・ " i (輪割空室皿、灰軸)
 - ・ " j (鉄絵欄干文、小振り)
 - ・ " k (菊皿、外面しのぎ有、黄瀬戸輪軸鉄軸流し)
 - ・ " l (菊皿、外面しのぎ有、黄瀬戸輪軸鉄軸流し)
 - ・ " m (輪割皿、小振り)
 - ・ " n (跨折れ夕日皿、灰軸)
 - ・ " o (灯籠皿、小振り)
 - ・ " p (把手付灯籠皿)
 - 4—燈皿
 - 5—鉢
 - ・TC-5-a (笠原鉢、鉄絵、口縁部外反)
 - ・ " b (御深井、摺絵)
 - ・ " c (輪割鉢、灰軸、口唇部外割ぎ状)
 - ・ " d (水盤、灰軸鉄軸流し、流水状の浮文、斑状の刺突)
 - ・ " e (水盆、灰軸、茶碗底、口縁部一面所四み)
 - ・ " f (水盆、灰軸、茶碗底、口縁部一面所四み)
 - ・ " g (緑軸、龍などの唐文)
 - ・ " h (手鉢)
 - ・ " i (黄瀬戸鉢、中央印花、外周波状の巻線文)
 - 8—小塚
 - 8—仏飯器
 - 9—香炉
 - ・TC-9-a (灰軸)
 - ・ " b (鉄軸)
 - ・ " c (御深井、鉄軸具による摺絵)
 - ・ " d (榻軸、半菊状のしのぎ)
 - ・ " e (割分け、しのぎ)
 - 10—瓶
 - ・TC-10-a (三合灰軸徳利、なで肩)
 - ・ " b (三合灰軸徳利、底部輪軸取り)
 - ・ " c (三合灰軸徳利、漬け掛)
 - ・ " d (五合榻軸徳利)
 - ・ " e (一升榻軸徳利)
 - ・ " f (舟形、漆黒釉または榻軸)
 - ・ " g (赤目榻軸徳利、一升徳利)
- ・TC-10-h (長頸瓶)
 - ・ " i (べこかん徳利、鉄軸)
 - ・ " j (滑子榻軸徳利)
- 11—仏花器
- 12—油壺
- 13—蓋物
- 14—蓋
 - ・TC-14-a (TC-15の蓋、鉾状つまみ、帯)
 - ・ " b (TC-15の蓋、鉾状つまみ、帯)
 - ・ " c (TC-27-bの蓋、鉾状つまみ、汗次)
- 15—蓋
- 18—合子
- 19—水濁
- 21—瓶木鉢
- 22—花生げ
- 23—片口鉢
- 24—燗煙具
 - ・TC-24-a (火入れ)
 - ・ " b (灰窯とし)
- 25—燗水入れ
- 26—壺
 - ・TC-26-a (半筒壺、榫軸、底部及び器面下端露筋、口縁部平滑)
 - ・ " b (榫軸灰軸流し、底部及び器面下端露筋、口縁部外反)
- 27—水注
 - ・TC-27-a (榻軸、底部露筋、らっきょう形、塔状の取手)
 - ・ " b (汗次、榻軸、円筒形の体部に汗口、取手、蓋付)
- 28—瀝瓶
- 29—搦鉢
- 30—餅入
- 31—火鉢
 - ・TC-31-a (火鉢)
 - ・ " b (藍漆)
- 38—手拵り
- 39—おろし皿
- 40—油受け皿
 - ・TC-40-a (脚付、錯軸)
 - ・ " b (脚付、灰軸)
 - ・ " c (脚なし、錯軸)
 - ・ " d (脚なし、灰軸)
- 41—油徳利
- 44—ひょうそく
- 48—焼炉
- ◎TD群—京都・信楽系陶器
 - 1—碗
 - ・TD-1-a (高台を丸く成形)
 - ・ " b (高台径が小さい半球形の碗、渾手)
 - ・ " c (高台径が大きい碗)
 - ・ " d (小杉茶碗、鉄または呉須で彩彩文)
 - ・ " e (扇形、口縁部緑軸体部灰軸の割分け)
 - ・ " f (扇形、器面鉄絵、白地で折長梅花文を描く)
 - ・ " g (扇形、小振りで器面には細かな貫入)
 - ・ " h (半筒形)
 - ・ " i (半筒形)
 - ・ " j (筒形、多くは鉄絵で文様)
 - 2—皿
 - ・TD-2-a (見込み欄目有、見込み施釉、多くは三個所のピン腹)
 - ・ " b (欄目無、見込み施釉、多くは三個所のピン腹)
 - 5—鉢
 - 6—小塚
 - 8—仏飯器
 - 9—香炉
 - ・TD-9-a (香炉有)
 - ・ " b (蛇ノ目高台、灰軸、胴部強いロクロ目、口縁部内折)
 - 10—瓶
 - 11—仏花器
 - 12—油壺
 - 13—蓋物
 - ・TD-13-a (丸碗形の身)
 - ・ " b (段有)
 - ・ " c (半筒形の身)
 - 14—蓋
 - ・TD-14-a (TD-13の蓋、蓋物)
 - ・ " b (TD-18の蓋、合子、多くはドーム形)
 - ・ " c (TD-27の蓋、水注)
 - ・ " d (TD-34の蓋、土瓶)
 - 15—蓋
 - 18—合子
 - 19—水濁
 - 22—花生げ
 - 24—燗煙具
 - ・TD-24-a (火入れ)
 - ・ " b (灰窯とし)
 - 25—燗水入れ
 - 26—壺
 - 27—水注
 - 32—ひしゃく
 - 33—鍋
 - 34—土瓶
 - 40—油受け皿
 - ・TD-40-a (脚付き、灰軸)
 - ・ " b (脚なし、灰軸)

表6 陶磁器・土器の分類(2)

農学部家畜病院地点 発掘調査報告

- ◎T E 群——扇前系陶器
 - 10——瓶
 - ・ T E-10-a (敷上手、薄作り、鈴首)
 - ・ " b (くこかん徳利)
 - 12——油壺
 - 13——蓋物
 - 14——蓋
 - 15——壺
 - 24——突椀具
 - 25——罍
 - 29——播鉢
 - 37——葉研
 - ◎T F 群——志戸呂系陶器
 - 1——瓶
 - 2——皿
 - 9——香炉
 - 10——徳利
 - 13——蓋物
 - 14——蓋
 - 15——壺
 - 29——播鉢
 - 40——油受け皿
 - ◎T G 群——常滑系陶器
 - 26——罍
 - ・ T G-26-a (Y字状口縁)
 - ・ " b (T字状口縁)
 - ◎T H 群——萩系陶器
 - 1——瓶
 - ・ T H-1-a (土灰袖開口瓶、渦巻高台)
 - ・ " b (ピラ掛け、渦巻高台)
 - ◎T I 群——万古系陶器
 - 1——瓶
 - 5——鉢
 - 16——急須
 - 34——土瓶
 - ◎T J 群——大塚拍馬系陶器
 - 6——小坏
 - ◎T K 群——丹波系陶器
 - 29——播鉢
 - ◎T L 群——堺系陶器
 - 29——播鉢
 - ◎T M 群——亞間・益子系陶器
 - 29——播鉢
 - ◎T O 群——亞摩系陶器
 - 10——徳利
 - 14——蓋 (10-10の蓋、密)
 - 15——罍
 - ◎T Z 群——生産地不明
 - 1——瓶
 - 2——皿
 - 5——鉢
 - 6——小坏
 - 9——香炉
 - 14——罍
 - ・ T Z-14-a (T Z-34-aの蓋、銅縁鉢、青土瓶)
 - ・ " b (T Z-34-bの蓋、白土染付)
 - ・ " c (T Z-34-cの蓋、三彩)
 - ・ " d (T Z-34-dの蓋、赤目)
 - ・ " e (T Z-34-eの蓋、鉄輪)
 - ・ " f (T Z-34-fの蓋、鉄輪)
 - ・ " g (T Z-34-gの蓋、鉄輪)
 - ・ " h (T Z-34-hの蓋、染付)
 - ・ " i (T Z-34-iの蓋、イッチン)
 - ・ " j (T Z-42-aの蓋、鉄輪)
 - ・ " k (T Z-42-bの蓋、鉄輪)
 - ・ " l (T Z-42-cの蓋、カンナ目)
 - ・ " m (T Z-42-dの蓋、鉄輪)
 - ・ " n (T Z-33-cの蓋、銅縁)
 - ・ " o (T Z-34-jの蓋、鉄輪)
 - 16——急須
 - 20——壺重
 - 21——積木鉢
 - 29——播鉢
 - 33——罍
 - ・ T Z-33-a (紐状把手貼付、播鉢)
 - ・ " b (罍鉢)
 - 34——土瓶
 - ・ T Z-34-a (銅縁鉢、青土瓶)
 - ・ " b (白土染付)
 - ・ " c (三彩)
 - ・ " d (赤目)
 - ・ " e (鉄輪)
 - ・ T Z-34-f (鉄輪)
 - ・ " g (鉄輪)
 - ・ " h (染付)
 - ・ " i (イッチン)
 - ・ " j (鉄輪)
 - 42——行平
 - ・ T Z-42-a (鉄輪)
 - ・ " b (鉄輪)
 - ・ " c (カンナ目)
 - ・ " d (鉄輪)
 - 53——蒸し器
 - 54——提炉
- 土器
 - ◎D Z 群——生産地不明
 - 2——皿
 - ・ D Z-2-a (右回転)
 - ・ " b (左回転)
 - ・ " c (磨きかわらけで底部同心円状)
 - ・ " d (磨きかわらけで底部平滑)
 - ・ " e (耳かわらけ)
 - ・ " f (へそかわらけ)
 - ・ " g (手づくね)
 - ・ " h (透明釉)
 - 14——蓋
 - ・ D Z-14-a (ドーム形、無印)
 - ・ " b (円形、御寄塩師製浄因)
 - ・ " c ("、無印)
 - ・ " d (断面台形、無印)
 - ・ " e (凸形、イツミツタ 花壇屋)
 - ・ " f (断面長方形、深草砂川権兵衛)
 - ・ " g ("、無印)
 - ・ " h (火消蓋)
 - 21——積木鉢
 - 24——突椀具
 - ・ D Z-24-a (火入れ)
 - 31——火鉢
 - ・ D Z-31-a (土師質火鉢)
 - ・ " b (五管火鉢)
 - ・ " c (鉄行角火鉢、掘炬燵)
 - 33——鍋 (ほうろく)
 - ・ D Z-33-a (丸底)
 - ・ " b (平底)
 - 40——油受け皿
 - ・ D Z-40-a (透明釉脚付)
 - ・ " b (透明釉脚無)
 - ・ " c (脚付)
 - ・ " d (脚無)
 - 43——十能
 - 44——ひょうそく
 - ・ D Z-44-a (脚付)
 - ・ " b (脚無)
 - 45——瓦甕
 - 46——八間
 - 47——たんころ
 - 48——提炉
 - ・ D Z-48-a (風炉)
 - ・ " b (七輪)
 - ・ " c (煎茶釜、涼炉)
 - 49——火消蓋
 - 50——五徳
 - 51——熊鷹蓋身
 - ・ D Z-51-a (輪作成形、ミナと左衛門)
 - ・ " b ("、一重神天下第一塚ミナと左衛門)
 - ・ " c ("、二重神天下第一塚ミナと左衛門)
 - ・ " d ("、天下第一御寄塩師製浄因と伊織)
 - ・ " e ("、御寄塩師製伊織)
 - ・ " f (板作成形、御寄塩師製伊織)
 - ・ " g ("、泉渡伊織)
 - ・ " h ("、小浄 泉州煎生)
 - ・ " i ("、大神 ")
 - ・ " j ("、泉州煎生)
 - ・ " k ("、サカイ 泉州煎生 御場所)
 - ・ " l ("、泉州煎生)
 - ・ " m ("、泉州煎生)
 - ・ " n ("、御寄塩師製浄因)
 - ・ " o ("、難波浄因)
 - ・ " p ("、摂州大坂)
 - ・ " q ("、イ徳ミ ツタ 花壇屋)
 - ・ " r ("、御寄塩)
 - ・ " s ("、大上々)
 - ・ " t ("、ミナと久左衛門)
 - ・ " u (口口成形、掘燵大坂上)
 - ・ " v ("、大坂上盛塩)
 - ・ " w ("、無印)
 - ・ " x (鉢形、内瀬)
 - ・ " y ("、直立)
 - ・ " z ("、茗荷底)
 - ・ " aa (輪作成形、無印)
 - ・ " ab (板作成形、無印)
 - 52——罍台

表7 陶磁器・土器の分類(3)

第II部 東京大学構内の遺跡発掘調査報告

時	胎質・産地	T E (備前系陶器)												
期	器種	10	12	13	14	15	24	26	29	37	他	合計		
	小分類	a	b											合計
IV b	S K 0 9	5										11	15	
Ⅷ c	S K 0 2	1										1	2	
	合計	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	18	

時	胎質・産地	T F (志戸呂系陶器)											
期	器種	1	2	9	10	13	14	15	29	40	他	合計	
	小分類											合計	
IV b	S K 0 9				2								2
Ⅷ c	S K 0 2				1								1
	合計	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3

時	胎質・産地	T G (常滑系陶器)		
期	器種	26	他	合計
	小分類	a	b	合計
IV b	S K 0 9		1	1
Ⅷ c	S K 0 2		1	1
	合計	0	2	2

時	胎質・産地	T H (萩系陶器)		
期	器種	1	他	合計
	小分類	a	b	合計
IV b	S K 0 9		0	0
Ⅷ c	S K 0 2	1	0	1
	合計	1	0	1

時	胎質・産地	T I (万古系陶器)					
期	器種	1	5	16	34	他	合計
	小分類						合計
IV b	S K 0 9						0
Ⅷ c	S K 0 2						0
	合計	0	0	0	0	0	0

時	胎質・産地	T J (大塚相)		
期	器種	6	他	合計
	小分類			合計
IV b	S K 0 9		0	0
Ⅷ c	S K 0 2		0	0
	合計	0	0	0

時	胎質・産地	T K (丹波系)		
期	器種	29	他	合計
	小分類			合計
IV b	S K 0 9	6	0	6
Ⅷ c	S K 0 2		0	0
	合計	6	0	6

時	胎質・産地	T L (堺系陶)		
期	器種	29	他	合計
	小分類			合計
IV b	S K 0 9	13	0	13
Ⅷ c	S K 0 2	6	0	6
	合計	19	0	19

時	胎質・産地	T M (笠間・)		
期	器種	29	他	合計
	小分類			合計
IV b	S K 0 9		0	0
Ⅷ c	S K 0 2		0	0
	合計	0	0	0

時	胎質・産地	T O (遠屋系陶器)				
期	器種	10	14	15	他	合計
	小分類					合計
IV b	S K 0 9					0
Ⅷ c	S K 0 2					0
	合計	0	0	0	0	0

時	胎質・産地	T Z (生産地不明)																														
期	器種	1	2	5	6	9	14 (蓋)														16	20	21	29	33	他	合計					
	小分類	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	他	小計	a	b	
IV b	S K 0 9																												0			
Ⅷ c	S K 0 2																												0		2	1
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1

)																	34 (土瓶)		42 (行平鍋)					53	54	他	合計				
他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	他	小計	a	b	c	d	他	小計	53	54	他	合計								
	0												0						0				0								
	3												0						0				3								
	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3

時	胎質・産地	D Z (生産地不明)														21 24 31 (火鉢)				33										
期	器種	2 (皿)														14 (蓋)				21 24 31 (火鉢)				33						
	小分類	a	b	c	d	e	f	g	h	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	他	小計	a	b	c	他	小計				
IV b	S K 0 9	174	4	2							180									2	12					9				
Ⅷ c	S K 0 2	82	1	2						66	151									0	0					6				
	合計	0	256	5	4	0	0	0	0	66	0	331	0	0	10	0	0	0	0	2	0	12	0	0	11	4	0	0	15	9

40 (油受け皿)											43 44 (ひょうそく)				45 46 47 48 (焔炉)				49 50 51 (焼壺壺身)					
b	a	b	c	d	他	小計	a	b	他	小計	a	b	c	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i
						0				1					1									11
2	24	51				75			7	7				1	1									
2	24	51	0	0	0	75	0	0	7	7	1	0	0	2	1	0	0	0	0	1	0	1	0	11

																	52		合計		
j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	aa	他	小計	52	合計
																		3	16		21.9
																		0	0		24.4
																		3	16	0	48.0

表10 主要遺構出土遺物組成表(3)

るからである。

- ⑥ 各期の実年代の推定を行う。推定は出土量も多く、文様・器形等の変化が顕著であり、生産地での研究も進んでいる肥前及び瀬戸・美濃の磁器碗・皿を用いて行った。本分析において分類された器種について、生産地での研究および紀年銘資料、災害、土地利用の変遷など遺跡の状況とを判断材料とした。

(2) 陶磁器・土器の分類 (表5～7)

医学部附属病院地点の報告では出土陶磁器類を分類した上で、数量提示を行い、組成の違いから年代的考察、陶磁器群の流通など当該地点で得られた成果の一端を示した(成瀬・堀内1990)。消費遺跡における定量的分析は歴史を復元する際に重要な手段であろう。しかし、定量的分析を行う際に陶磁器のみを分析対象とするのは不適當と思われること、また、以後の新資料の増加とその研究成果は目を見張るものがあり、本遺跡においても研究の進行にあわせて出土遺物全体について分類の再編成を行う事とした。本章では陶磁器、土器についてののみ掲載するが、その他、瓦、人形、ミニチュア、玩具類、金属製品、石製品等に関しては別項目が設定されているので各項目を参照されたい。

分析の基本資料となる分類の項目は従来どおり産地及び器種からの検索を容易に出来るように双方とも独立した項目として設定を行った。表記は胎質・産地—器種—小器種の順で行った。また、以前分析の対象から外れた土器類、灯火具、徳利類を分類に含めた関係で、分類の内容が追加・変更になっている。以下、医学部附属病院地点の際に行った分類との主な変更点を提示する。

胎質・産地・器種の変更点は、胎質で新たに土器(瓦質、土師質を含む)を設けD群とした。産地ではA群からJ群までは変更はない。K群は丹波系、L群は堺系、M群は益子・笠間系、N群は九谷系、O群は壺屋系、P群は淡路系とした。K群、L群は従来想定されていた播鉢の生産地が誤っていたことが判明したため設けた。また、M群やD群(京都・信楽系)、J群(大堀・相馬系)など相当量の出土が想定される産地の製品の中で、特に新しい段階にはその特定が困難な場合が多い。これら特定が困難なものに関してはZ群として分類したが、その中でも産地が特定できるものは各々に分類した。古九谷様式のJY群はその後の研究の進展によって肥前系磁器であることが判明したのでJB群とし、石川で焼成されている陶磁器は再興九谷を含めN群として分離した。器種では1類から39類までは変更はない。40類以降は特に土器類の器種が中心となっている。

なお、以降の埋蔵文化財調査室で行った調査において出土した遺物群の分析については基本的に今回で行った方法を踏襲するものとした。

(3) 家畜病院地点の陶磁器・土器群の様相

家畜病院地点で推定個体数100個体以上の遺構はSK02及びSK09である(表8・9)。SK02は東大編年のⅧc期, SK09はIVb期に位置づけられる。年代的にはSK02は嘉永年間(1848～54)の今戸の絵図に記された「楽市」の製品が含まれている新宿区南町遺跡49号遺構出土遺物群より前出的様相であることから、ほぼ19世紀第2四半期。SK09は宝永四(1707)年下限と推定される豊島区巣鴨遺跡中野組ビル地区1号遺構出土遺物と近似した様相であることから17世紀末～18世紀初頭と推定される。遺物群の内容を見ると、SK02は一般的な器種構成を示していない。生活する際に必須である器種が多く欠落しており、継続的な廃棄行為ではない可能性が考えられる。また、SK09については上質の磁器が多く含まれ、下級家臣団の使用品が廃棄された土坑であるとは考えにくい。水戸藩中屋敷の絵図面が現存していないので、遺跡が藩邸内にどのような空間であったかは文献上からは推定できない。しかし、本遺跡で確認されている遺構は、地下室、土坑、ピットなどで、これまで行われた加賀藩邸内の各地点の調査とは分布密度に粗密の相違はあるものの詰り空間に一般的な遺構構成である。

3 人形・ミニチュア・玩具

ここでは遺構ごとに遺物の名称や初現、共伴遺物との年代観について記述する。

SK02

本遺構は陶磁器をはじめ、かわらけ、灯明具、仏神具などの通常の器種組成と異なる遺物群からなる。人形は恵比須、大黒天をはじめ、福助、お多福、狐、獅子頭等の縁起ものが出土している。

狐は鉄砲狐である(図1・4)。狐は稲荷の神使で、稲荷は五穀神で御食神であった。しかし江戸で流行するようになると商売繁盛などの願掛けにお参りするようになる。元禄七年(1694)版行富尾似船著『堀川の丞』巻上には伏見の初午の様子が書かれており、土狐の文字もみられる。江戸での出土資料の初現は現段階では18世紀中葉である。

文献から年代が推定できるものに福助がある(図7・9)。福助については、浦野慶吉氏が「江戸の土人形」(1993)の中で書いている。文を引用すると、太田南畝著「一話一語」

享和三年（1803）の条に「冬より叶福助の人形流行」とあり、加藤尾庵著「我衣」に文化元年（1804）の条に「春の頃より叶福助という人形を張り抜きにせし物大いに流行」とある。また「享和雑記」に「叶福助といふ人形、其始め山城の伏見にて焼せ由。享和の頃に至りて江戸に流行し、焼物もあり、張貫も多し、子供の持ち遊びに夥敷売る也。然るに此の人形を棚へ置き朝夕膳を供え信心すれば何事によらず心願成就すると申出して敬い尊む人あり」とある。江戸では享和年間（1801～1804）に縁起物として焼かれていたことが窺える。出土資料の初現は現段階では18世紀末～19世紀初頭である。

ぶら人形（図10）はゴミ穴に再利用された地下室や土壌からの検出事例が多い。また墓からの検出事例もある（註1）。良好な検出事例に墨田区普賢寺遺跡がある。江戸時代の墓11基のうちの2号墓から、6体のぶら人形が検出している。このような墓の検出事例から友引き人形と呼称されたと思われる。またお腹がふっくらしてるところから腹孕人形と呼ばれたものであろうか。裸人形は貞享三年（1686）井原西鶴著『好色五人女』の文と挿し絵に登場しており、ぶら人形とは異なる。裸人形は増上寺子院群の墓 NO. BM181（10才前後の子供、1688～1698年代）から検出している。人形は木製（高さ約18cm）のもので胡粉が全体に施されていた。ぶら人形は生活遺構からの出土や、また性別をもったものもあるところから呼称が変わってきたと考えられる。手足が曲がる形態であるところから、持ち遊ぶ為の愛玩用であろう。また墓に副葬されたものは、友引き人形の代用にされたものと、生前愛でていた物、また淋しくないようにと埋葬したものであろう。人形の出現時期は現段階では18世紀末～19世紀初頭である。

天神（図12）は各地で出土している。胸に梅鉢を浮文したものと無いものがある。梅鉢のないものは彩色時に描いたといわれる。天神様は菅原道真公を神格化し学問の神様として子供のため祀ったといわれる。現段階では都立一橋高校遺跡のII層（18世紀中葉）から出土した素焼きと施釉の天神様が最も古い。胸部に梅鉢の描写はない。

西行法師（図15）は後述する恵比須、大黒天と同様に土人形の中では、最も古く17世紀後半から18世紀初頭から出土しており、幕末まで幅広く製作された人形である。江戸出土のものは比較的大きい（高さ10.5cm）立西行で、型起こし成形、前後合わせ、胎土は褐色を呈し、底部は開口している。京都市埋蔵文化財研究所の平安京左京三条十三町跡、後藤庄三郎（江戸幕府の御金改役。金座主宰者）邸から出土した資料に立西行がある。人形は小ぶりのもので（高さ4.3cm、首部欠損）、型起こし成形、中実、施釉（緑釉、黄釉）されたものである。この遺構からは西行の他に、素焼きの人形をはじめ施釉された布袋、大黒天、

武者、太鼓乗り童子、またミニチュアと多種多様なものが出土している(註2)。前記したものの年代は共伴した陶磁器から17世紀末～18世紀初頭位置づけられるものであった。西行は立西行と富士見西行(坐り西行)との二種類に大別されるが、立西行は盗難除け、富士見西行は腰痛除けのお守りとしたといわれている。

本遺構からは恵比須、大黒天が合わせて9点出土している(図17～20・22～25)。大黒天、恵比須については富田登著『江戸の小さな神々』によると、大黒天は仏教伝来とともに日本に入ってきた神様で、最澄が持ってきたといわれる。当初は三面大黒天で荒々しい顔を持った神であった。当時は比叡山の守護神として寺の厨房に祀られ、台所に入ってくる邪悪なものを追い払う神であった。三面大黒天が時代が下るにつれ、ふっくらとした大黒天になったといわれる。三面大黒天と同様に寺の食物が尽きないように、寺の厨房に置かれ祀られた。民衆の福神信仰となったのは16世紀末～17世紀初頭といわれ、やはり台所の神様であった。漁民の守護神であった恵比須が、民衆に普及し前出の大黒天と対になり、二福神として並べられて祀られるようになった。二福神となったのは室町時代中期偶像崇拜により流行したといわれる。恵比須の出土事例では、東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院病棟地点(以下附属病院病棟地点とする)の、17世紀後半にあたる遺構SK03からのものが最も古い。人形は残存高が4.5cmで型抜き成形、中実、施釉、胎土は淡白褐色を呈している。また都立一橋高校遺跡の17世紀後半～18世紀初頭の時期にあたる第III層から素焼きの恵比須、大黒天が出土している。本調査区からは出土していないが、七福神の一つとなる布袋も同時期から出土している。京都では火坊神として荒神棚に祀られる。七福神として成立し詣でるようになったのは寛政五年(1793)以降といわれる。

小瓶(図34)は本稿ではミニチュアとして分類した。小瓶の興味深い出土事例を二例紹介する。一つは茨城県鹿島市の神野遺跡のものがある。18世紀前期末の土坑墓、幼児2体の墓から2点出土している。高さが10.5cmと7.1cmのもので、外面に呉須で松と竹文、笹と梅花文様を描いている。共伴遺物は男雛、女雛、太夫、這子が計30点、伊万里の小皿が1点とハマグリであった。副葬品の多くは雛遊びのものであった。他の一例は附属病院病棟地点の南側に位置する墓域の、ST3441-2からのもので、幼児の骨と共に、高さ8.2cm、外面に蛸唐草文様を描いた肥前系磁器の染付の小瓶である。共伴遺物はミニチュアの釜、土瓶、七輪等であった。年代は七輪の形態で見ると、小林謙一氏の焜炉編年のIV期(19世紀前葉～中葉)にあたる。墓域は元和二年(1616)から明治九年(1875)以前まで講安寺の敷地であった。二例とも幼児の墓からのものであった。

土玉（図35・36）の、性格についてははっきりしていないが、明治期のビー玉の前身と報告されている例が多い。出土事例は多く古くは縄文時から出土している江戸期に近い出土事例では、神奈川県千葉地遺跡と千葉地東遺跡がある。両遺跡からは各1点出土している。千葉地遺跡の土玉は径1.8cm、手捻り成形、胎土は暗橙褐色である。ここでは陶丸の一種として報告している。また千葉地東遺跡のものは径1.7cm、手捻り成形、胎土は暗赤褐色である。土製丸玉として報告している。出土した遺構の年代は千葉地遺跡は13世紀中頃～15世紀中頃、千葉地東遺跡は14世紀第4四半期～15世紀第2四半期と報告されている。

碁石状土製品（図37）の最も古い出土資料は、東京大学本郷構内の遺跡理学部7号館地点の9号地下室で、廃棄年代が1650～1680年にあたる遺構から1点出土している。同本郷構内の遺跡医学部附属病院地点のH32-5からは3点出土している。17世紀後半にあたる遺構である。また同遺跡の2号組石からは262点出土している。遺構の年代は18世紀末～19世紀中葉である。呼称については、碁石、碁石状土製品、また弾碁玉として報告されている。弾碁玉と報告した新宿『内藤町遺跡』にみると「擲石」「弾碁」に使用したもの、明治期のガラス製の「おはじき」の前身であるとしている。擲石、弾碁については小高吉三郎著の『日本の遊戯』をみると、承平四年（931～938）源順の著した日本最初の分類辞典『和妙類聚抄』に記録されており、弾碁は中高の碁盤の上で碁石を弾き合う遊びで上流階層の人々のみの遊戯であった。正徳二年（1712）寺島良安著の『和漢三才図絵』では弾碁は簡易化され、普通の石弾きなり弾碁はすでに廃れてしまったと書かれている。小高氏は著書の中で弾碁→石弾き→おはじきと変化していったと書いている。当時のおはじきは貞享元年（1684）井原西鶴著『二代男』や『長崎歳時記』などから貝（猫貝＝キサゴ）を使用していたとある。また囲碁から始まった碁石遊びは正平二年（1347）虎関師錬著『異制庭訓往来』に記録されている。十不足、百五減、盗人隠、継子立、石抓、有哉立列挙している。遊戯のほとんどが数取り遊びである。また天文年間（1532～1533）から貞享、元禄年間（1684～1704）にかけ盛んに遊ばれた十六ムサシがある。起源はやはり上記した『和妙類聚抄』に記された「八道行成（やさすかりむさし）」であるという。十六ムサシについては『和漢三才図絵』や天明四年（1784）伊勢貞丈著『安斎随筆』に詳しく記録されている。明治の中頃まで続いた遊びである。以上のように『日本の遊戯』の中に書かれた資料から見ると、江戸期においておはじきは、貝を使用していたと考えられ、『内藤町遺跡』のいうガラスのおはじきの前身ではなく、むしろ十六ムサシや継子立、盗人隠等の数取り遊戯に使用されていたと考えられる。また、陶磁器や土器片を再利用した「円盤状製品」をおは

じきや、石蹴、面子等に位置づけて報告している事例がある。この円盤状製品については文京区の『新諏訪町遺跡』IV、各節の中で中野達也氏が詳細にまとめている。氏はいずれの報告も何ら根拠も提示されぬまま、「お弾き」、「石蹴り」、「めんこ」等に位置づけられていた円盤状土製品についての問題点を提示している（註3）。

以上 SK02出土の人形類について記述してきたが、列記した他に犬、泥面子の御三方、鯛等子供むけの縁起もので占められている。また見込みに「壽」と浮文されたかわらけ（口径10.4cm）が出土していることから、祝い事に使用された遺物群であろう。遺構の年代は陶磁器が東京大学編年のVIII b期、人形は文献等から19世紀初頭以降に位置づけられる。

SK09

釜形土製品（図39・40）は、玩具性の強い羽釜のミニチュアとして、また灯芯油痕の使用痕から灯明具と報告されている。釜形土製品について両角氏の分類を参考にすると、39はA1-b-ロ口縁の直立する平底、回転糸切り痕を残すロクロ水引き成形であり、40はB1-b-ロ口縁がすぼまる平底、回転糸切り痕を残すロクロ水引き成形である。2点の出現期は、両角氏の江戸在地系土器変遷観ではII b期（17世紀末～18世紀初頭）にあたる。本遺構の年代は陶磁器、煙管、銭貨等からも両角氏の土器変遷観と一致する。

江戸以外の出土事例に、古代学協会で発掘した平安京押小路殿跡第三次調査（銀座商家）の101土壙から、釜形土製品が出土している。口径2.7cm、器高4.0cmのもので墨壺と報告されている。両角氏分類のB1-a-イ口縁がすぼまる平底、鰐部分で貼り合わせた型作りのもので、上部に円文を押捺した鋸歯文を描いている。遺構の年代は慶長十三年（1608）～寛永期（1624～1644）にあたる。また平安京左京三条三坊十一町の16世紀から17世紀初頭の遺構から瓦質にちかい胎土のものが3点出土している。口径は5.3cm、4.2cm、3.6cm、器高5.1cm、5.1cm、4.8cm、おそらくB1-a-イにあたるものであろう。1点は交互二列に円文を押捺している。小型の羽釜と報告されている。

SK20

本遺構からは図示した3点のみの出土であった。型起こし成形の鶏の出土事例は多いが、（図46）のような手捻りのものは現段階では例を見ない。また17世紀後半に位置づけられる遺構、附属病院病棟地点のSK03から磁器製の鶏が出土している。性格については各地で異なるが、子供の夜泣き封じや、五穀豊穡を願ったものといわれる。少量の陶磁器片から年代を推定するならば19世紀前半に位置するものである。

註

- 1) 惟村忠志 1990「近世墓出土の土人形」『牟邪志』第3号
- 2) 京都市埋蔵文化財研究所の本氏の御厚意による実見資料である
- 3) 中野達也 1993「新諏訪町遺跡出土の円盤状土製品」『新諏訪町遺跡』

4 金属製品

S U 0 1

陶磁器の年代は18世紀中葉前期にあたるものであるが、銭貨1, 2は宝永五年(1708)から正徳三年(1713)に鑄造されたものであるから、ややズレはあるものの問題はない。

S U 0 2

「天下一藤原作」銘の鏡が出土していることを考えると、「天下一」が使用禁止になる以前の作であるならば天和二年(1682)以前の年代が与えられる。陶磁器はVIII b期, 18世紀後半~19世紀前半の年代のもので組成されていることから、天下一が禁止となり再び使用可となる安永元年(1772)以降の作となろう。伝世されていたものである可能性もあるが、同一年代と考えて問題はないであろう。

S K 0 9

陶磁器はIV b期, 17世紀末~18世紀初頭, 煙管は18世紀前半に位置付けられるもので構成されている。銭貨は19点出土しているが、拓図に示した2点11, 12を除いた他は陶磁器や煙管の年代と一致を見る。11, 12の2点は明和五年(1768)に鑄造されたものであることから他の資料とのズレが生じる。以上のことから2点の銭貨は流れ込みの可能性が大きい。

S K 1 1

陶磁器, 銭貨はいずれも18世紀前半に位置するものであるが、煙管については古泉編年の第V段階にあたる。陶磁器と銭貨については同一の見解であったが、煙管についてはおよそ半世期のズレが生じる。また今後報告する予定の本郷構内の遺跡医学部附属病院外来診療棟地点SU63から出土した煙管も同一の見解であった。本郷構内の遺跡では同一遺構から古泉編年の第III段階から第V段階の煙管が時期差なく出土している。このことは古泉氏自らも指摘していることから、今後の研究をまちたい(註1)。

註

- 1) 古泉 弘 1992「日本の初期煙管に関する覚え書」『郵政考古紀要』大阪・郵政考古学

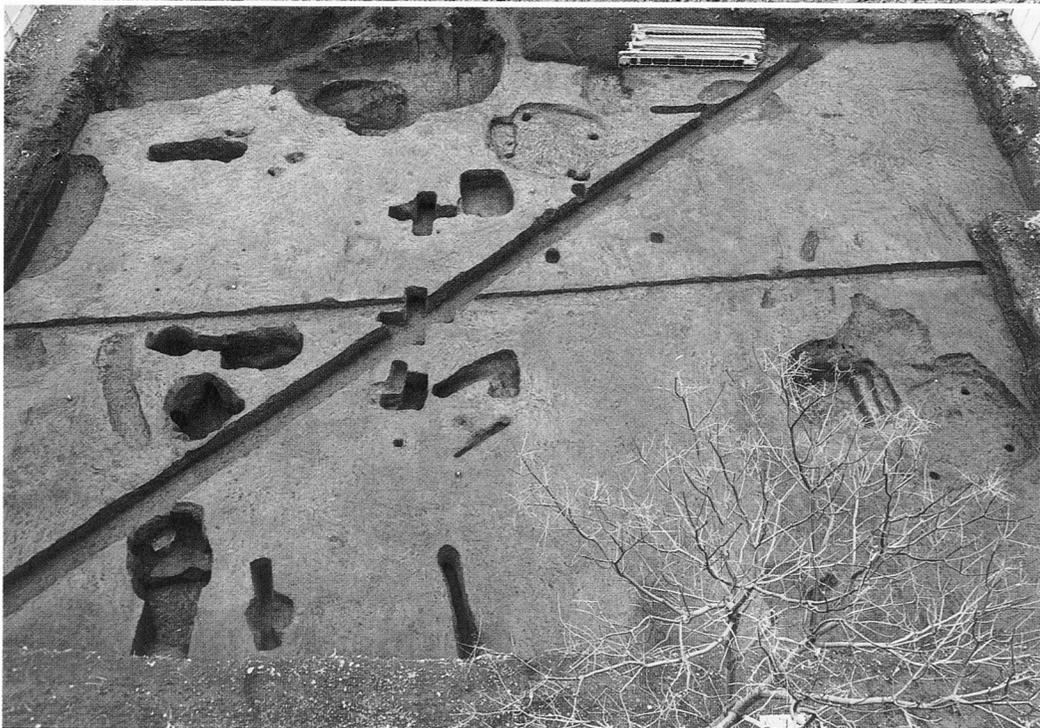
参考文献

- 安田 善三郎 1931『釘』自主出版
奥平昌洪輯 1938『東亞錢志』岩波書店
山田徳兵衛 1961『日本人形史』
小州吉儀 1964『新寛永錢鑑識と手引き』万国貨幣研究会
小高吉三郎 1977『日本の遊戯』拓石堂出版
千葉地遺跡発掘調査団 1982『千葉地遺跡』
 (財)大阪市文化財協会 1984『難波宮址の研究』第八
 (財)古代学協會 1984『平安京跡研究調査報告, 押小路殿跡, 平安京左京三条十一町』都立一橋高校遺跡
 調査団 1985『江戸 都立一橋高校地点発掘調査報告』
神奈川県立埋蔵文化財センター 1986『千葉地東遺跡』
白銀館址遺跡調査会 1988『白銀館址遺跡II』
港区教育委員会 1988『増上寺子院群』
宮田登 1989『江戸の小さな神々』青土社
東京大学理学部遺跡調査室 1989『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』
東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点一医学部附属病院中央診療棟・
 設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点一』
東京大学埋蔵文化財調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
江戸遺跡研究会 1990『シンポジウム 江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨
江戸在地系土器研究会 1991『江戸在地系土器の研究I』
両角まり 1991『釜形土製品と江戸在系土器の研究I』『江戸在地系土器の研究I』
茨城県鹿島町教育委員会 1992『鹿島町内遺跡発掘調査報告XIII』鹿島町内NO.66遺跡(神野向遺跡)NO.67
 遺跡(神野遺跡)
東京都建設局, 新宿区内藤町遺跡調査会 1992『内藤町遺跡』
古泉弘 1992「日本の初期煙管に関する覚え書」『郵政考古紀要』大阪, 郵政考古学
江戸陶磁土器研究グループ 1992『江戸出土陶磁器・土器の諸問題 I』
浦野慶吉 1993「江戸の土人形考」『おもちゃ』126号
嶋谷和彦 1994「一中世の模鑄銭生産一堺出土の鑄型型を中心に一」『考古学ジャーナル』372ニューサイエ
 ンス社
兵庫埋蔵銭調査会 1994『山崎町の中世・近世銭貨』山崎町教育委員会
 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995『京都市埋蔵文化財調査概要』

農学部家畜病院地点 発掘調査報告

江戸陶磁土器研究グループ 1996『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題 II』

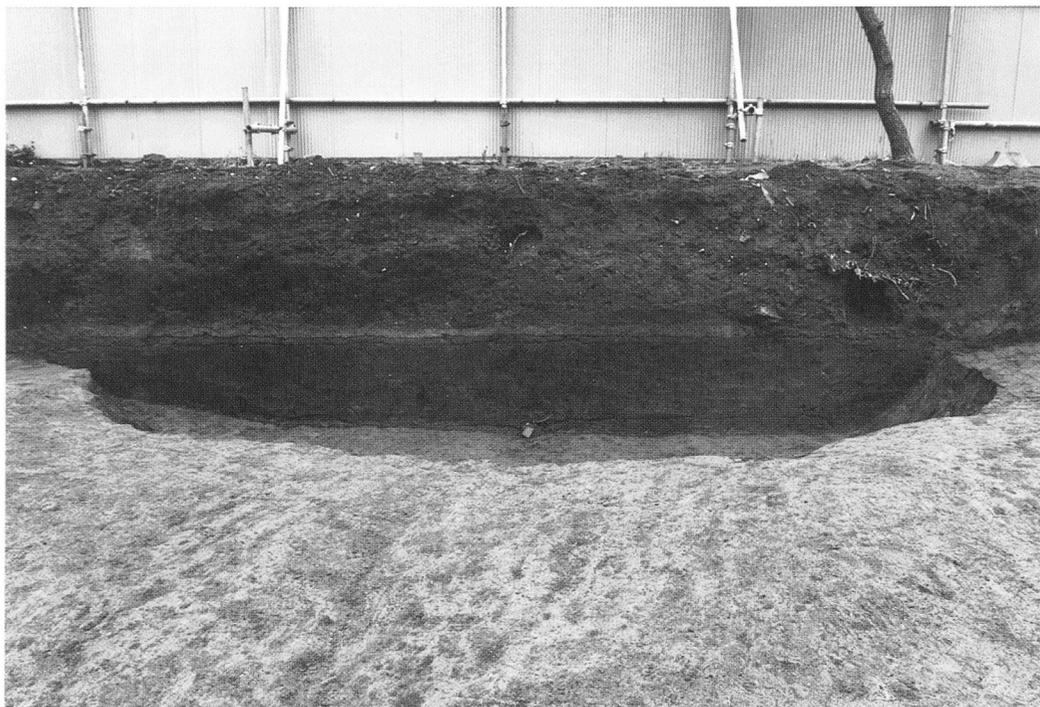
写真図版



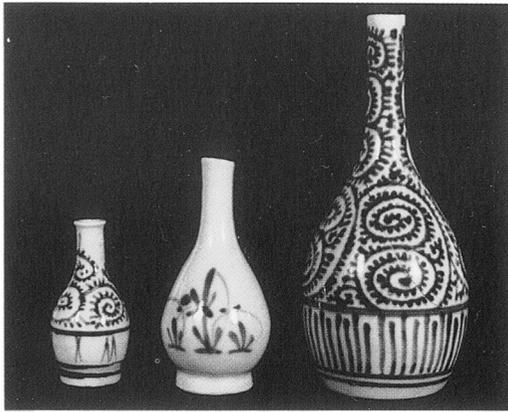
上：調査区西側全景，下：調査区東側全景



上 : SU01, 下 : SK02 • SU03 • SX23



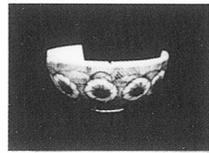
上 : SK06, 下 : SU07



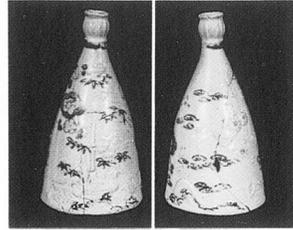
1



2



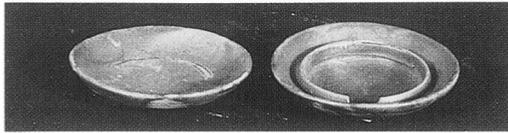
3



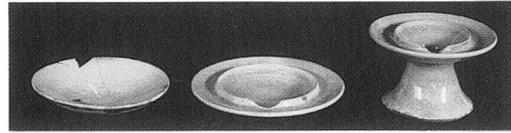
4



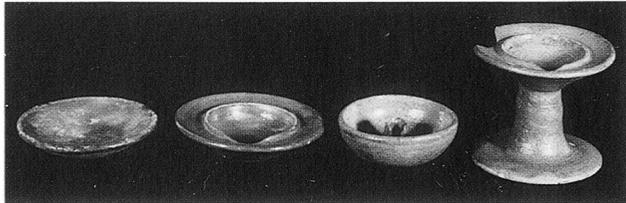
5



6



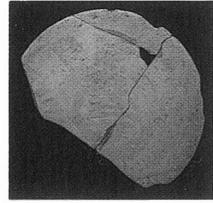
7



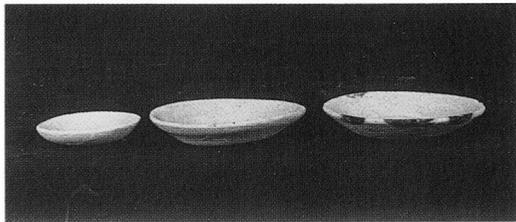
8



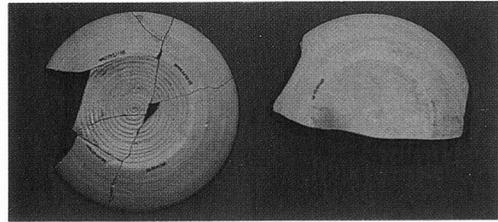
10



11



9



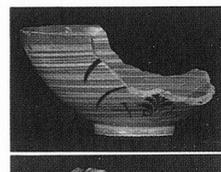
12



13



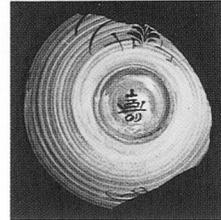
14



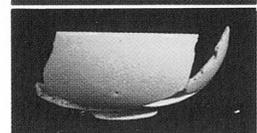
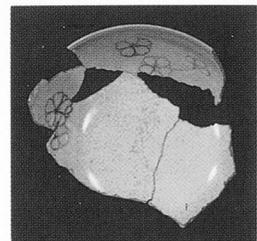
15



16

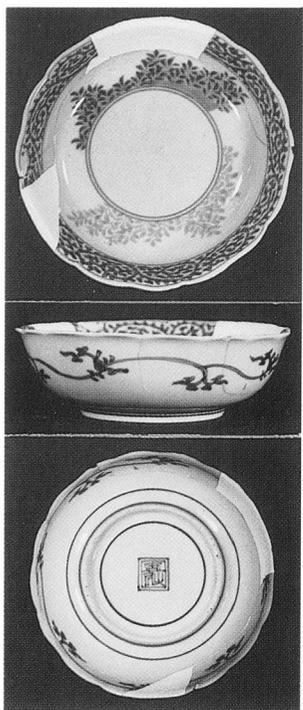


17

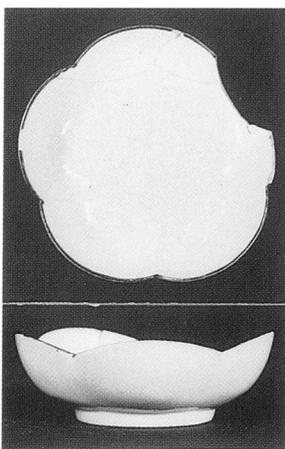


18

陶磁器類(1) SK02 (1~12), SK09 (13~18) (1/4)



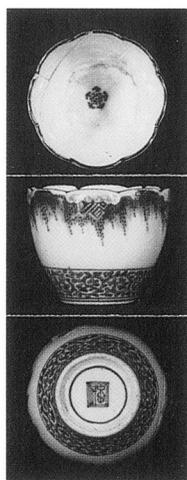
1



2



5



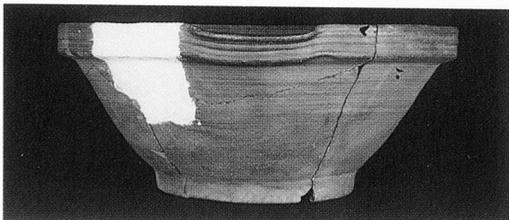
3



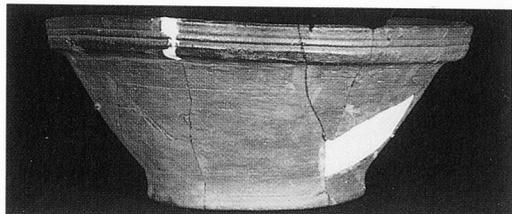
4



6



7 (1/8)



8 (1/8)



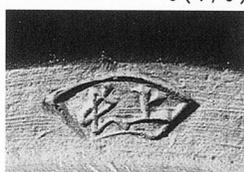
9 (1/1)



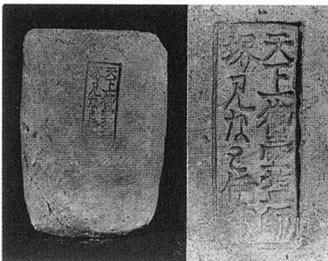
10 (1/1)



11 (1/1)



12 (1/1)



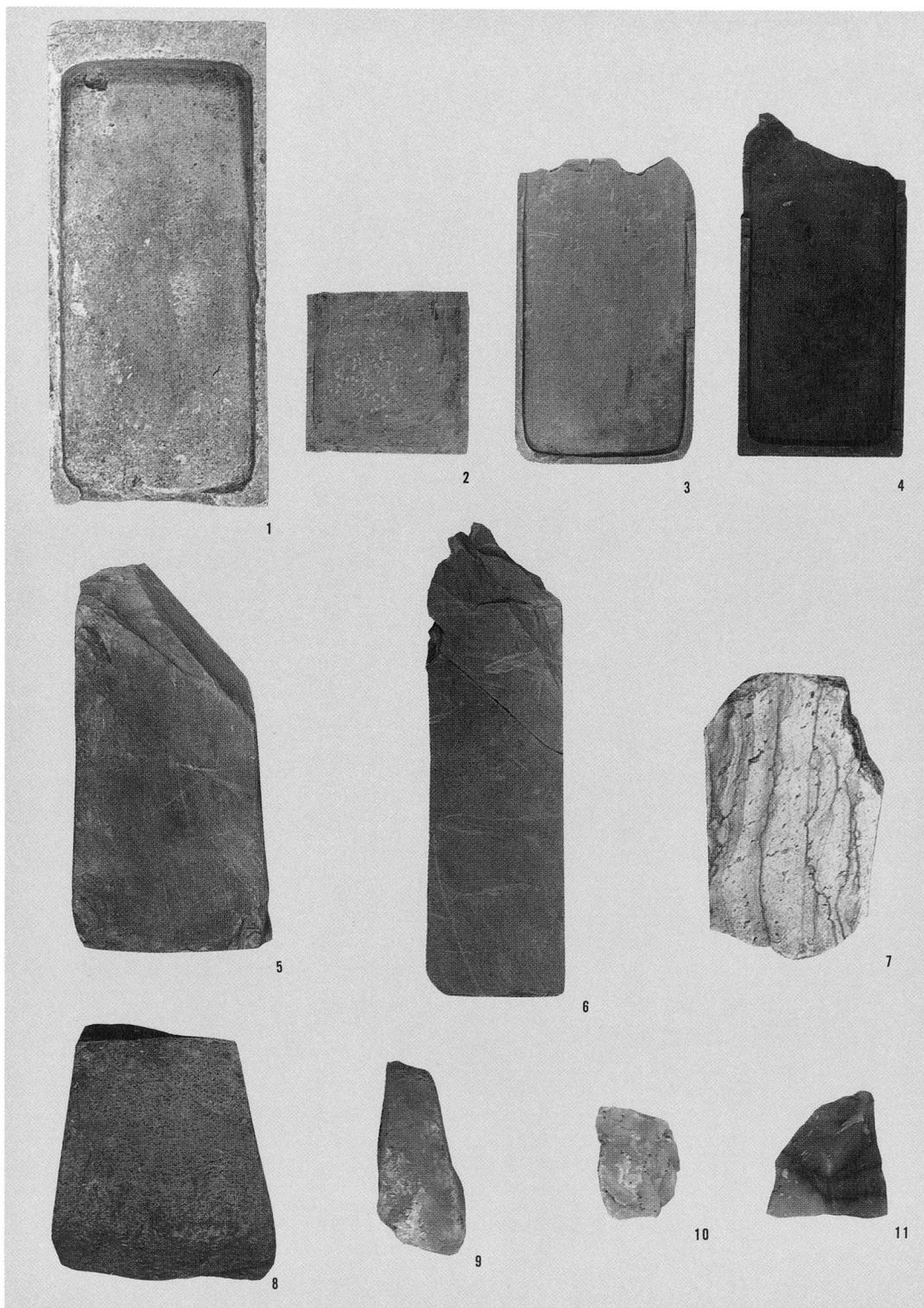
13



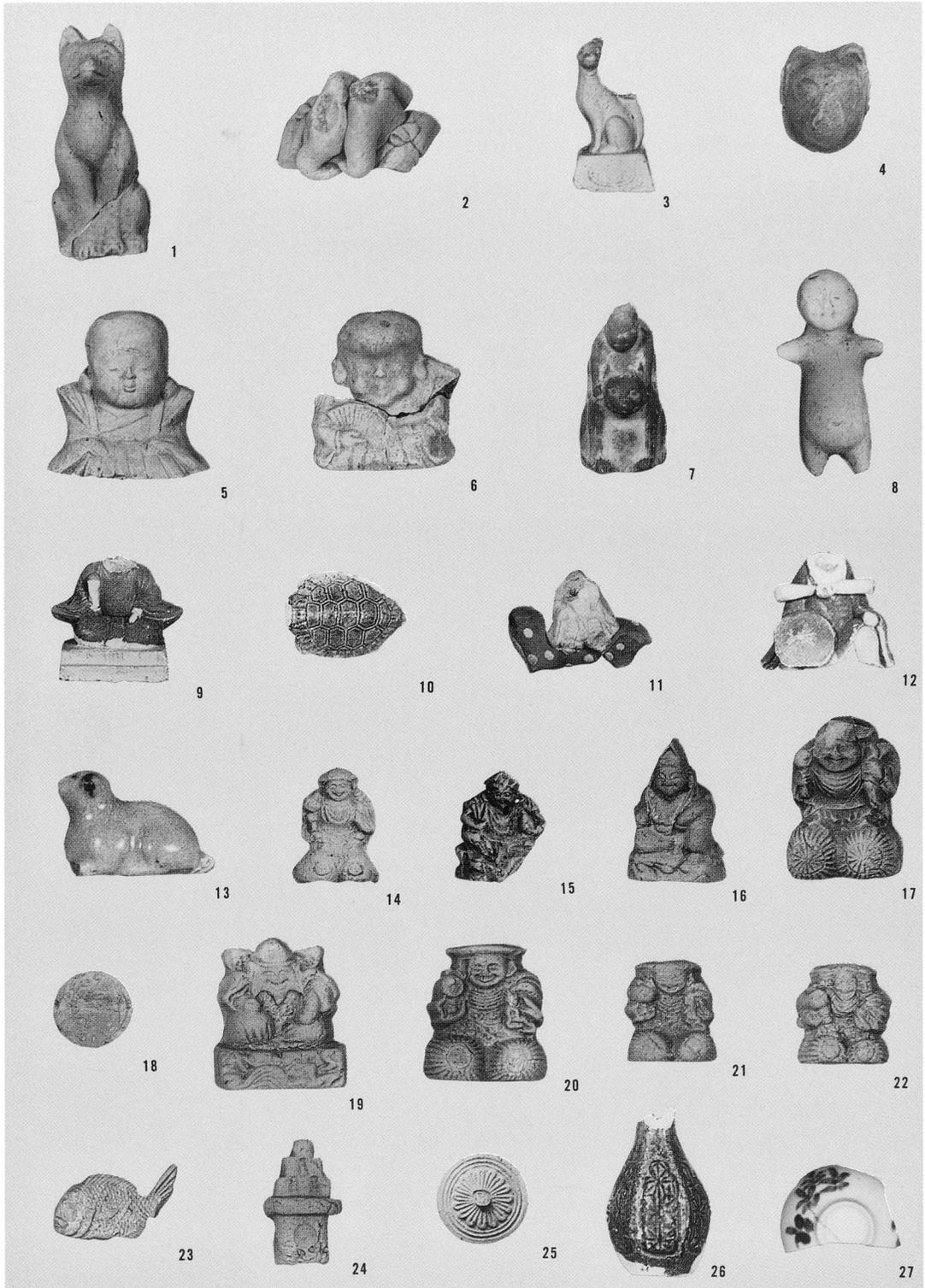
14



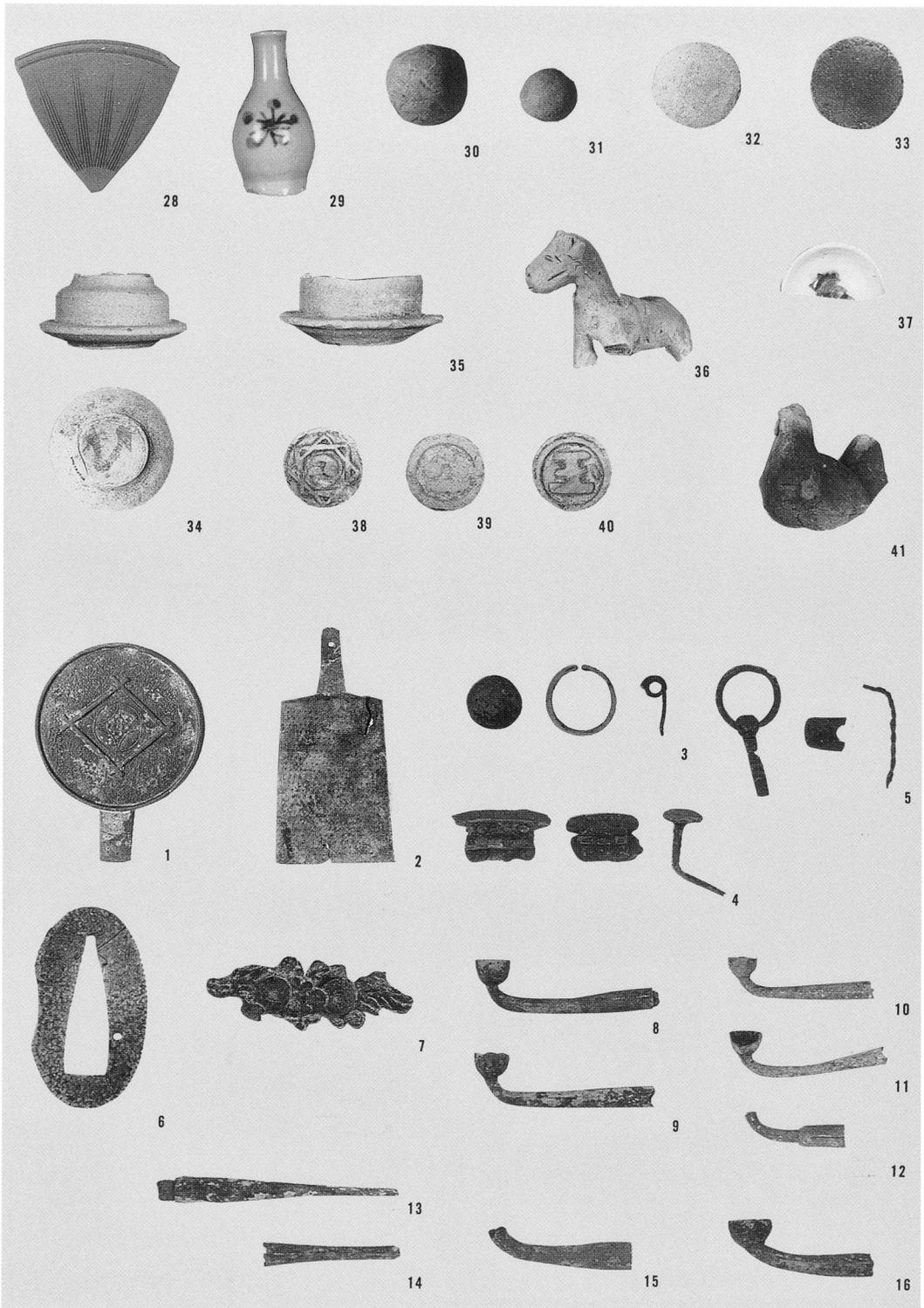
15



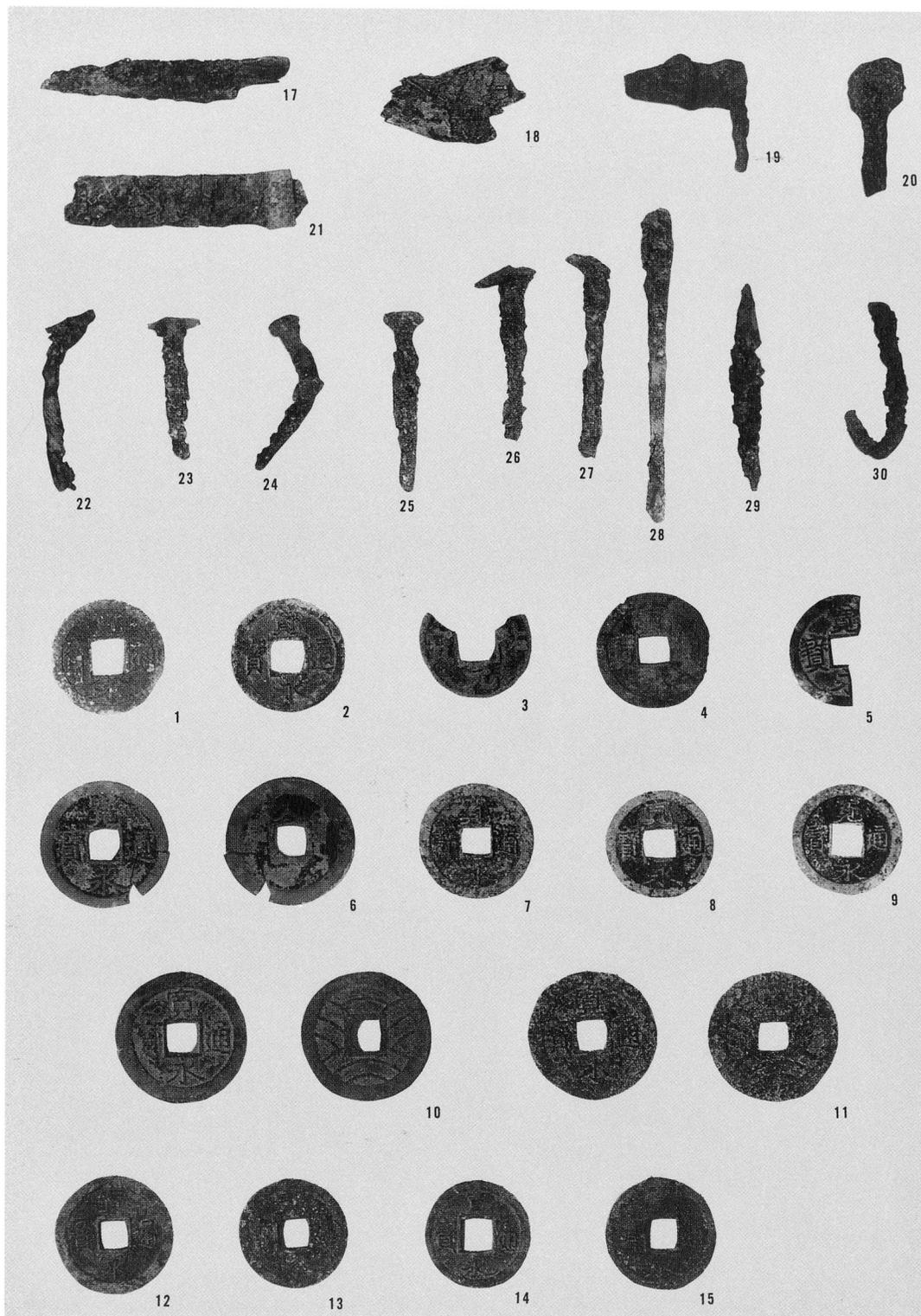
石製品 SK01(5), SK02 (1・9~11), SK06(2), SK09 (3・4・6~8)



人形・ミニチュア・玩具(1) SK02 (1~27)



人形・ミニチュア・玩具(2) SK02 (28~32・35), SK09 (34・36), SK20 (33・37・41)
 金属製品(1) SK01 (1), SK09 (2~5・8~14), SU11 (6・7・15・16)



金属製品(2) SK01 (22・23), SK04 (24), SK09 (17~22・25~30)
 SK01 (1・2), SK09 (3~11), SU11 (12~24), 遺構外 (15)

報告書抄録

ふりがな	とうきようだいがくほんごうこうないのいせき (ほんごうだいいせきぐん) のうがくぶかちくびょういんちてん はっくつちようさほうこく							
書名	東京大学本郷構内の遺跡 (本郷台遺跡群) 農学部家畜病院地点 発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	寺島孝一 武藤康弘 堀内秀樹 安芸穂子							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒153 東京都目黒区駒場 4-6-1 東京大学先端科学技術研究センター内 TEL 03-3481-4555							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査期間 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきようだいがく 東京大学 ほんごうこうない 本郷構内の いせき 遺跡 (ほんごうだい いせきぐん 遺跡群) のうがくぶ 農学部 かちくびょういん 家畜病院 ちてん 地点	とうきようと 東京都 ぶんきょうく ちよ 文京区弥生 1丁目1-1	13105	47	35° 42' 51"	139° 45' 52"	1990年 1月31日 ～ 1990年 3月14日	1040	東京大学 農学部 家畜病院の 新営に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別 主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
東京大学 本郷構内の 遺跡 (本郷台 遺跡群) 農学部 家畜病院 地点	武家屋敷跡 江戸時代	地下室 大型土坑 土坑 溝状遺構	4基 2基 8基 2基	近世陶磁器類 瓦 硯 人形・ミニチュア・玩具 柄鏡 銭貨				

新井城跡

理学部附属臨海実験所新研究棟地点発掘調査概要報告

1997

東京大学埋蔵文化財調査室

はじめに

今回報告するのは、1992年に行われた神奈川県三浦市小網代に所在する東京大学理学部附属臨海実験所の新研究棟建設に伴う新井城跡の発掘調査の概要である。現在、1980年に行われた宿舍建設に伴う発掘調査の成果も加えた、総括的な発掘調査報告書が準備されている。

1 調査に至る経過

東京大学理学部附属臨海実験所では、かねてから研究棟の新営が計画されていた。しかし、建設予定地一帯は室町時代の武将三浦義同の居城新井城跡にあたるため、埋蔵文化財の確認と建設が適当であるかを判断するための発掘調査が必要であった。このため東京大学遺跡調査室（当時）が1988年7月4日から8月2日まで試掘調査を行なった。その結果、本格的な発掘調査が必要であると判断されたため、東京大学埋蔵文化財調査室は1992年7月20日から9月25日まで、約1500m²の建設予定地の発掘調査を行なった。なお調査途中でSB04大型掘立柱建物跡の保存のため、新研究棟建設位置を北西側に移動させたことで約200m²を追加調査した。この他に1993年4月20日から23日に、実験所内の宿舍を結ぶ道路として利用されている空堀跡で設備埋設工事のための立会調査を行なった。また、1993年5月7日から8日には新研究棟南側で海水循環水路の管路掘削工事に伴う立会調査を実施した（図1）。

2 調査の方法

建設予定地点は土塁によって囲まれた平坦な海岸段丘面で、赤星直忠氏が『三浦半島城郭史』の中で「新井城の居館のあった場所で御殿跡と伝えられている」と記述した地区に相当する。（註1）調査地点には1897年に臨海実験所の学生寄宿舍が設立され、1909年の増築後1976年まで使用されていた。調査時点で、寄宿舍は北側に1棟残して取り壊され、一面に芝生が植えられた平坦地となっていた。

調査は保存状態が良好な土塁を損傷させないように慎重に行なわれ、まず最初に表土を重機によって除去し、試掘調査で確認されている遺構面の直上まで掘り下げ、次に人力掘削によって遺構面を露出させ遺構を確認するという方法をとった。また、測量は建築に伴う測量調査の杭をもとに、任意の原点から磁北をもとに調査軸を設定し、後に三浦市三戸と諸磯の基準点をもとにトラバース測量を行い、先に調査区内に設定した仮測量基準点の国土座標系座標値を求めるといった方法をとった。

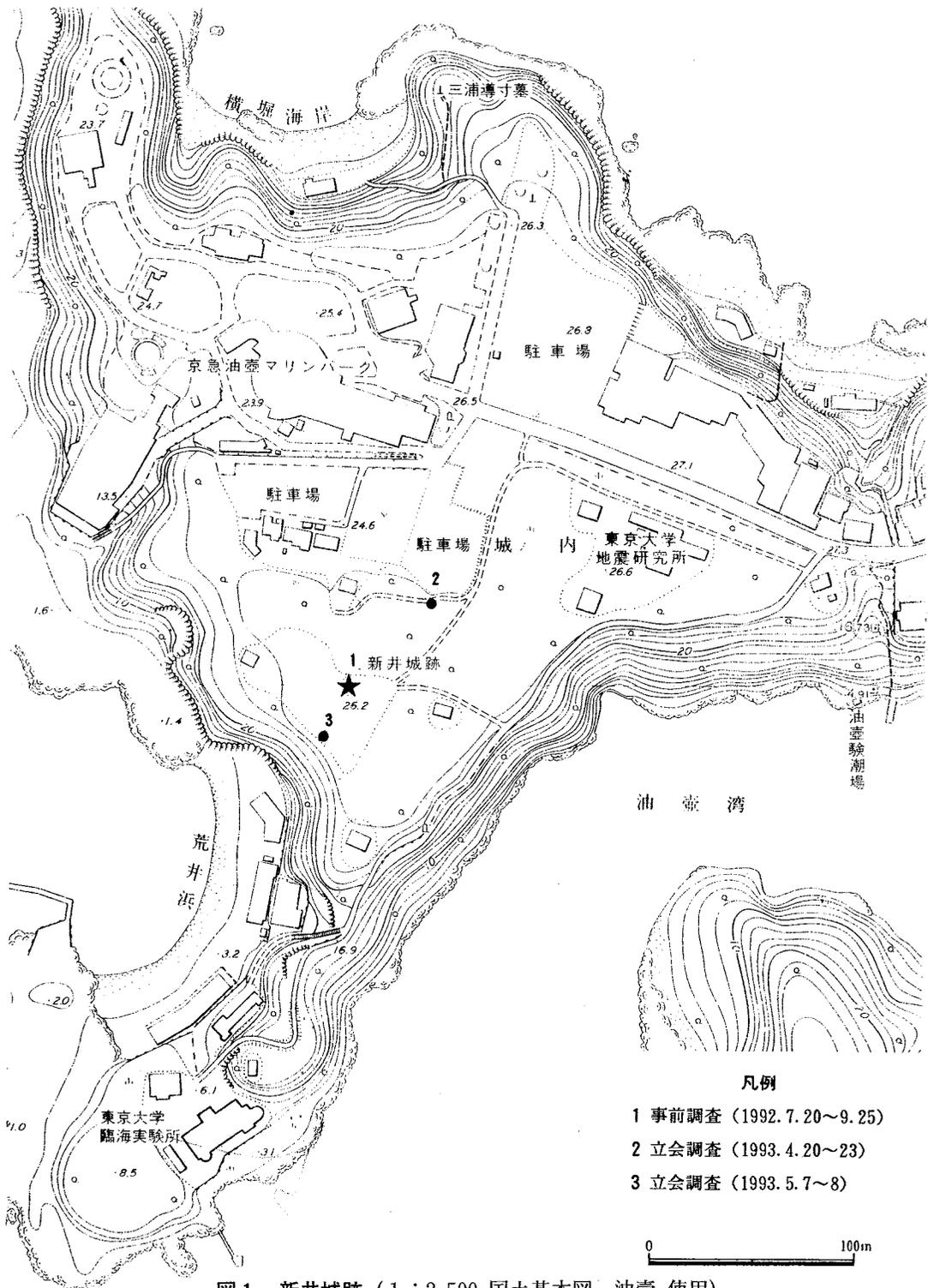


図1 新井城跡 (1 : 2,500 国土基本図 油壺 使用)

3 検出された遺構

発掘調査の結果、調査地点は明治時代の寄宿舎の建設ならびに昭和50年代の寄宿舎の解体によって攪乱をうけているものの、図2の遺構配置図およびPL. 1, 2の全景に示したように、多くの遺構が当時の生活面である黒褐色土の上面から検出された。主な遺構としては、大型掘立柱建物遺構2基、大型竪穴状遺構1基、溝状遺構2基、大型土坑3基、掘立柱穴列4基、円形土坑1基、土坑5基が検出された。主要遺構の概要は以下のとおりである。

SD01 調査区北側に位置する溝状遺構。幅2.2m、深さは最深部で確認面から0.6mあり断面形は逆台形を呈する。空堀を構成する溝と推定される。

SD02 調査区東端に位置する溝状遺構。幅2.2m、深さ0.7mで断面形は逆台形を呈する。SD01と共に空堀を構成するものと考えられる。

SB03 (PL. 5) 調査区東側に位置する掘立柱穴列。掘り方径約0.7m、深さ約0.7mの柱穴5基が約1.8m間隔で配列されている。また、東側にも同様の柱穴がSD02を囲むように不規則に配列されているが、柱穴の配列は相互に対応していない。両者ともに塀状の施設の基礎遺構と推定される。

SB04 (図3, PL. 3・4) 調査区南端に位置する長方形の大型掘立柱建物遺構。長軸約9m、短軸約2.5m、深さ約0.6mの規模の隅丸長方形の竪穴状遺構と、それを取り囲むように配列された18基の柱穴によって構成される。柱穴は掘り方径約0.7m、深さ約0.7mで、柱穴間隔は約1.8mである。西側には布掘りで連結し一方に礎石が据えられた2基の柱穴があり、竪穴状遺構の長軸と重なることから入口の施設と推定される。一方、入口と推定される位置と反対側の柱穴列も竪穴状遺構の幅に相当する間に柱穴が配置されていない。竪穴状遺構の内部には長軸に沿って棟持柱の小型柱穴が13基配列されている。調査中に本遺構の保存が決定されたため柱穴等の掘り上げは行わず埋めもどした。図3の土層断面図およびPL. 4に示したように、竪穴状遺構の底面には約20cmの厚さで全面にわたって浜砂が敷かれていた。そして、浜砂層の上には黒色土の薄い不連続な間層をはきんで、確認面まで厚く焼土が堆積している。焼土層からは陶磁器をはじめ、多量の鉄釘、炭化物、焼けた壁土等が出土した。棟持柱の位置で浜砂層と焼土層が陥没した状態で落ち込んでいることから、焼失時点まで上屋構造が存在していたと考えられる。また、焼けた壁土等が出土していることから土壁のある建物であったと推定される。



図2 新井城跡遺構配置全体図

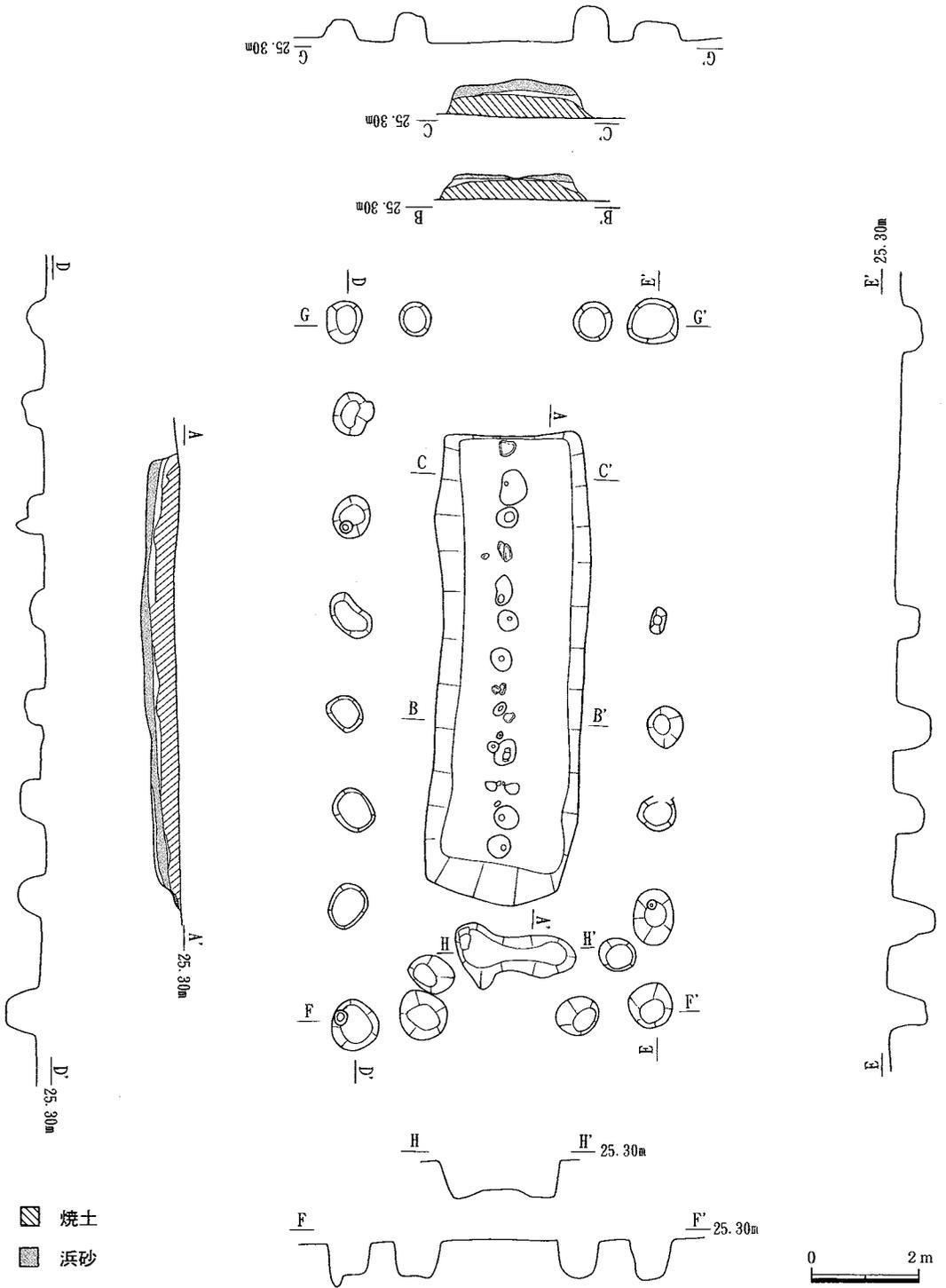


図3 SB04大型建物遺構

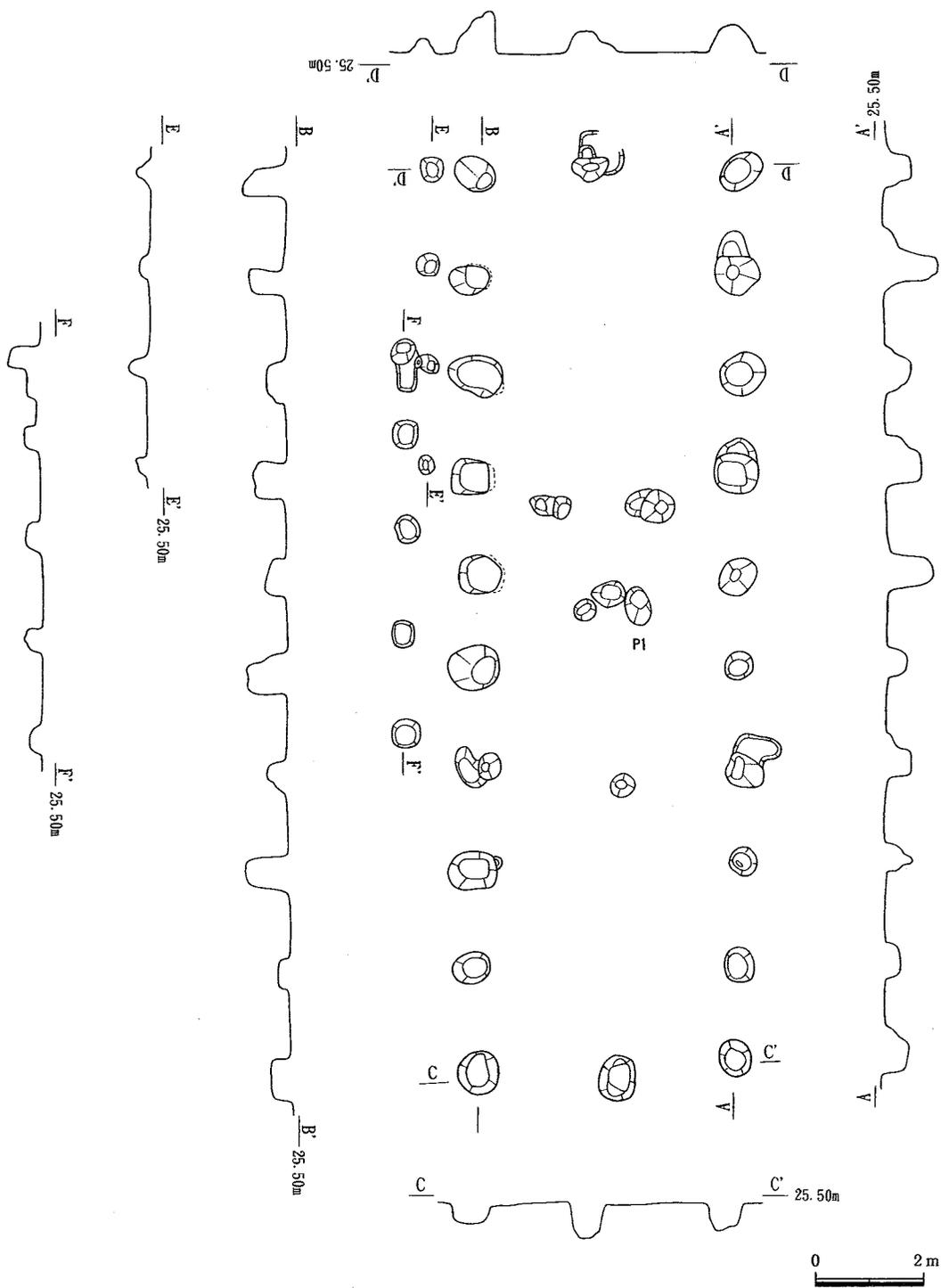


図4 SB05大型建物遺構

SB05 (図4, PL.5) 調査区東側に位置する長方形の大型掘立柱建物遺構。規模は長軸18m, 短軸6mをはかり, 22基の柱穴によって構成される。図4およびPL.5に示したように2間9間の長大な建物遺構である。柱穴は掘り方径が0.7m, 深さが0.8mをこえる大型の柱穴と, 掘り方径が約0.7m, 深さが約0.5mの浅い柱穴が同一軸上に配列されている。柱穴間隔は約1.8mである。西側には底または塀の基礎と推定される小型の柱穴列が2列付設している。遺構中央部の小ピット(P1)から灰と甕の羽口が, 柱穴内から青磁皿破片と銅銭が出土した。

S107 調査区南端に位置する長方形の大型竪穴状遺構。長軸約9m, 短軸約5m, 深さ約0.8mの規模で, 平面形は隅丸長方形を呈する。埋土は黒色土でほぼ単一の層積相を示している。SB04と重複しているため, その保存にともない, 本遺構も一部分だけ掘り上げるに止めたため, 遺構の全体像は不明である。

SK08 (図5, PL.6, 7) 調査区北側に位置する大型土坑。深さは約5.9mで底面は東京パミス上面に位置する。平面形は開口部で1×2mの長方形, 胴部では1.5×1.5mの隅丸方形, 底部では直径約1mの円形となっており, 断面形は長大な袋状を呈する。開口部から約4m下で人骨を大量に含む土層が約0.4mの厚さで堆積していた。人骨は遺物収納箱で20箱分出土した。大部分は大腿骨等の四肢骨で占められ, 関節も分離しており末節骨等も出土していないことから, 城内の合戦場に散乱した人骨を土坑内に投棄したものと推定される。また, 馬骨も一部含まれている。

SK09 調査区中央に位置する楕円形の土坑。

SK10 調査区中央に位置する円形の土坑で, 直径約2m, 深さ約1mの規模をもつ。断面形は上端部がやや括れた播鉢状を呈し, 内部からは落ち込んだ状態で砂岩の切石が2点出土した。埋土の堆積状態や形状から植栽痕と推定される。

SK14 調査区中央に位置する方形の土坑。

SK15 調査区西端に位置する不整形の平面形を有する土坑。

SK16 (図5, PL.8) 調査区西側に位置する大型土坑。深さは約5.3mで底面のやや上方に三色旗軽石層が位置している。平面形は開口部で1.3×3mの長方形, 底部は1×2mの隅丸長方形を呈している。断面形は開口部から約2.3m下で括れ, そこから大きく袋状に広がる形状となっている。

SK17 調査区西側に位置する方形の土坑。

SB18 調査区中央, SB05の北西に位置する掘立柱穴列。控え柱の柱穴が付設されてい

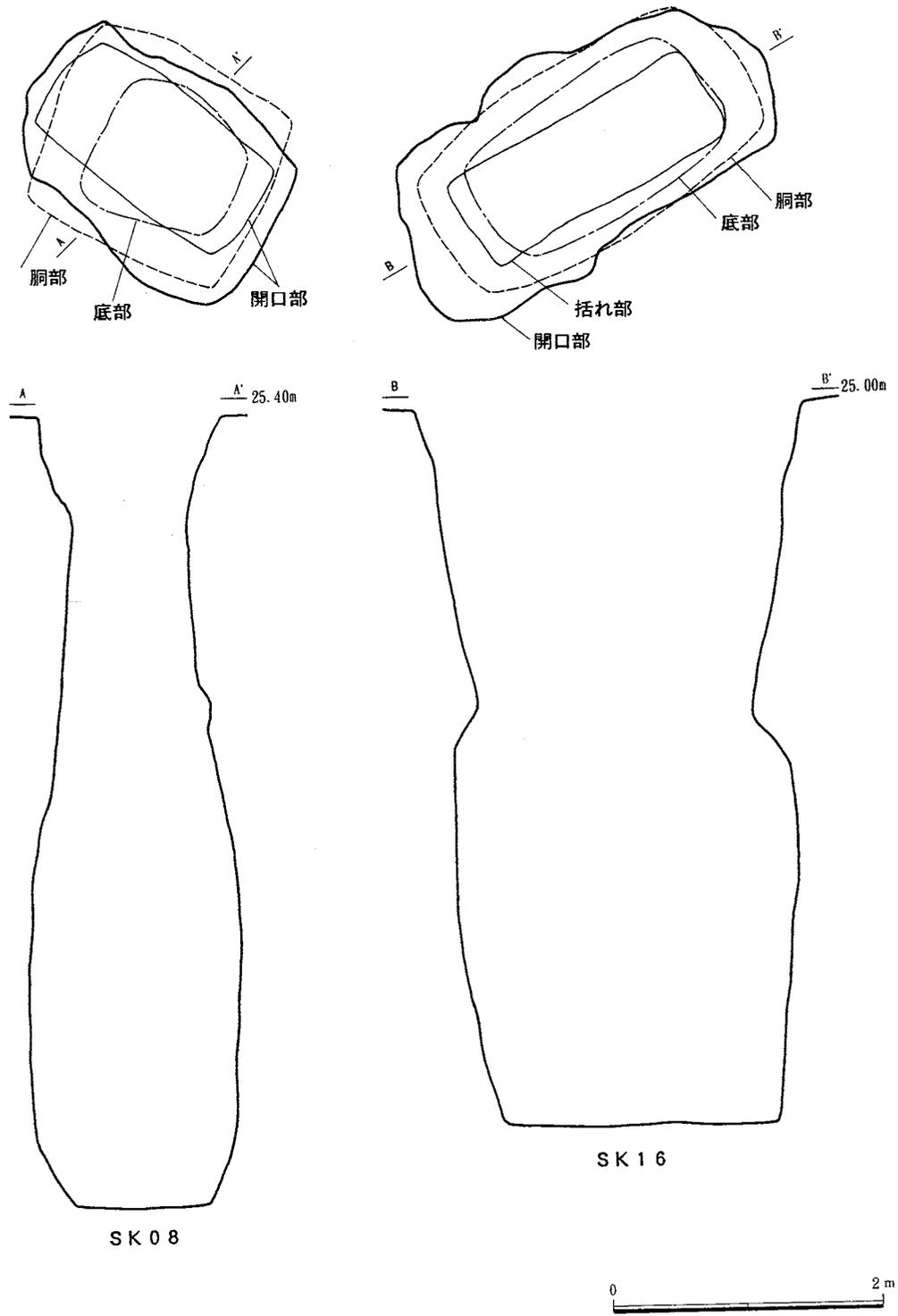


図5 SK08・SK16大型土坑

ることから塀等の基礎遺構と推定される。

SK19 調査区北端に位置する方形の土坑。

SK20 調査区北側，SK08に隣接した大型土坑。深さは約2.3mで，開口部と底部の形状は一辺1.8mの隅丸方形となっている。

SB21 調査区中央，SB05に隣接する掘立柱穴列。塀の基礎遺構と推定される。SB05に重複している。

SB22 調査区南端から中央部に延びる掘立柱穴列。塀の基礎遺構と推定される。SB04の竪穴状遺構の焼土層に重複しており，遺構群の中では最も新期と判断される。

柱穴群 調査区西側で密集して検出された建物の基礎と考えられる柱穴群。柱穴の規模は，SB04やSB05より掘り方径が小さく深度も浅い。また，乱杭状に密集しているため，配置等の対応関係を把握することが困難である。中には，SB22のように塀の基礎と考えられるものも含まれていると考えられる。他の遺構との重複関係から，検出された遺構群のなかでは最も新期と判断される。これらの柱穴群の相互の配置等の対応関係については現在も検討中であり，建物構造や性格については本報告に譲りたい。

土塁 調査区南側の海食崖際に延びる土塁は，一部断ち割りをいれて盛土の堆積状況を検討した。その結果，当時の地表面である黒褐色土の上に0.3m以上の褐色土が積み上げられていることが判明した。現状では侵食作用によって低平にみえる土塁も本来は盛土によって形成されていたことが明らかになった。一方，調査区北側の凸字形に突出した土塁の前面の空堀跡では設備埋設工事立会調査の際に現地表面から約1mの深度で地山層が確認されたことから，空堀が現状よりもさらに1mほど深かったことが明らかになった。

4 出土遺物の概要（図6～9）

遺構および包含層から出土した遺物の総量は遺物収納箱11箱分である。設備工事立会調査の際に出土した遺物も含めて図示した。

図6，7は，遺構出土の陶磁器である。

1，2は，SD01とSD02から出土した緑釉皿である。いずれも口縁部にのみ灰釉がかかっていることから瀬戸窯の窰窯の製品と判断される。溝状遺構からは殆ど遺物が出土しなかったが，僅かに検出された陶器が窰窯の時期のものであることが注目される。

3～5はSB04から出土した青磁鉢，かわらけおよび播鉢である。SB04では主に焼土層から遺物が出土している。4のかわらけには二次焼成の痕跡が認められるが，青磁鉢と播

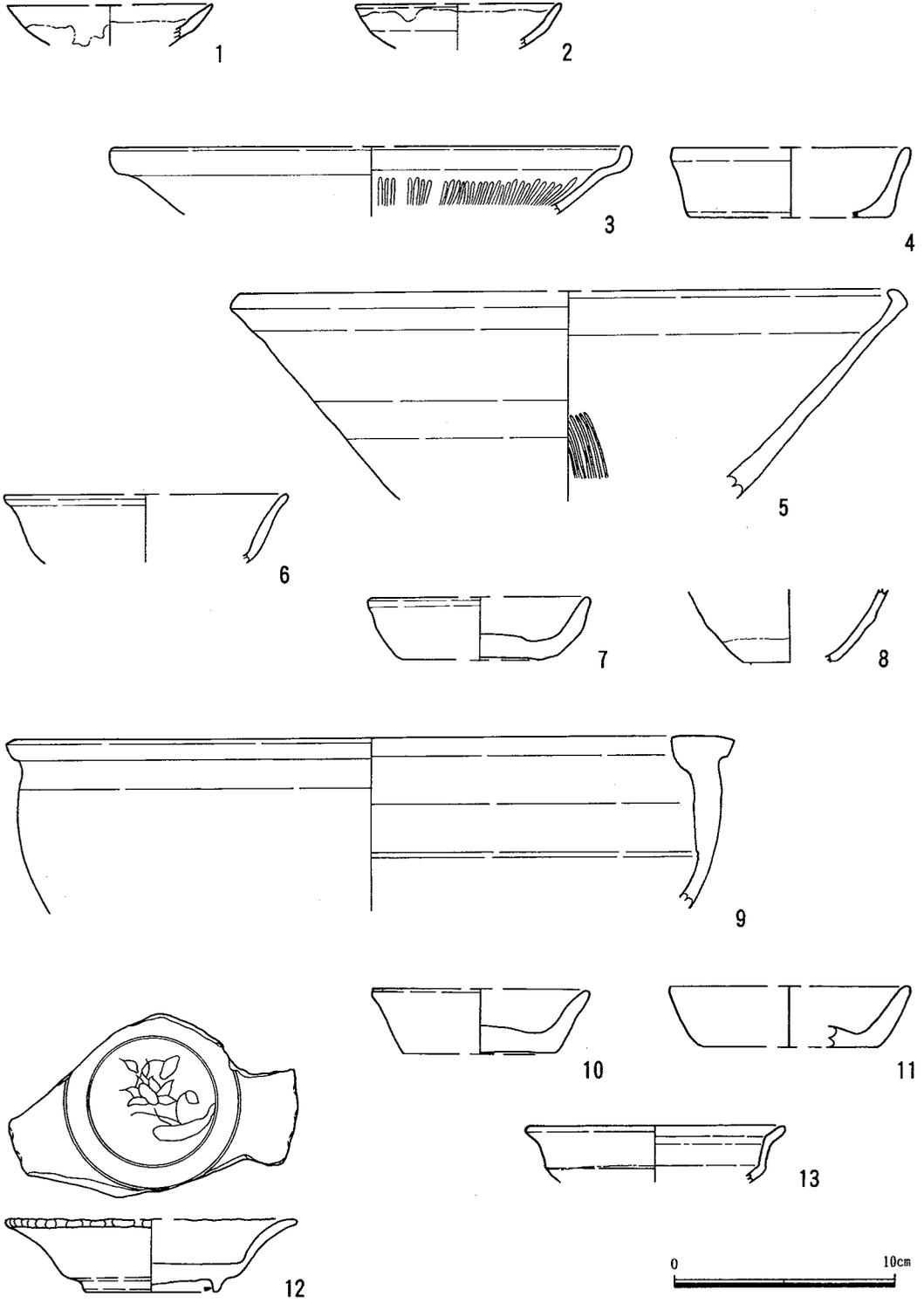


図6 遺構出土の陶磁器(1)

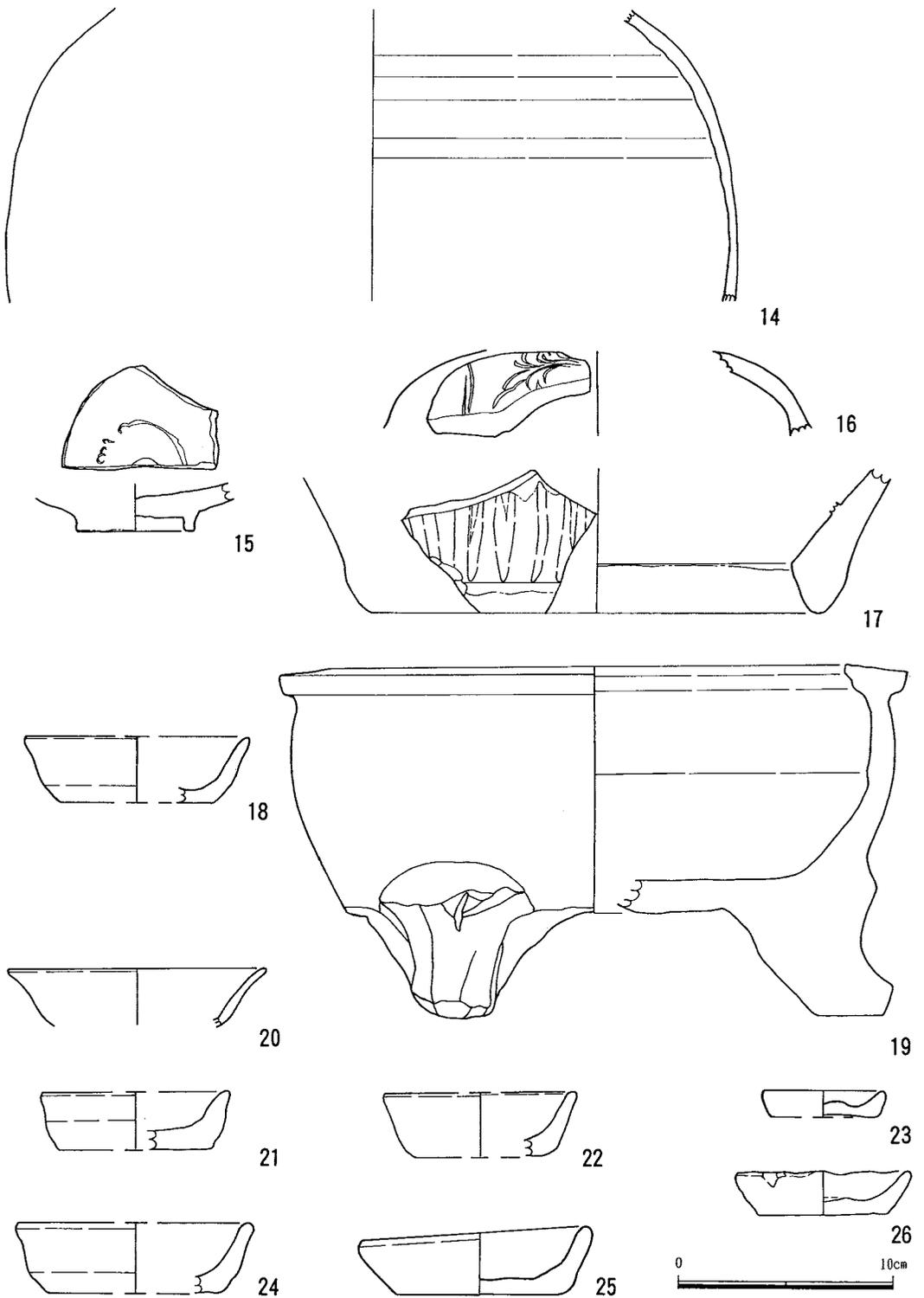


図7 遺構出土の陶磁器(2)

鉢にはその痕跡が観察されず、火災後に廃棄されたものと考えられる。5の播鉢は瀬戸窯の窰窯の製品である。

6は青磁の皿で、SB05の柱穴から出土した。

7～9はSK08から出土したかわらけ、天目茶碗および火舎である。8の天目茶碗は底部に鉄化粧が施されており、瀬戸の大窯の初期の製品と考えられる。9は19の火舎(SK19出土)と同型である。

10, 11はSK09とSK14から出土したかわらけである。

12はSK15出土の青磁稜花皿である。見込みに花文が印刻されている。

13はSK17出土の瀬戸窯の陶器で、屈曲した胴部の造りから香炉と考えられる。

14～17はSK16から出土した陶磁器である。14は舶載陶器の壺の肩から胴部にかけての大破片である。灰色の堅く緻密な胎土で全面に褐釉が施されている。明代の中国南部の窯の製品と推定される。なお、この壺の破片はSK08とSK16の底部から出土したものが接合しており、両遺構の埋没時期はほぼ同時と判断される。15は青磁稜花皿の底部で、見込みに印刻文が施されている。16は青磁の酒会壺の蓋の破片である。草花文が施されている。17は酒会壺の底部で胴下半に鎬文が施されている。肉厚の器体に比べて底は厚さ約5mmと非常に薄く精巧な造りの優品である。

18, 19はSK19出土のかわらけおよび火舎である。19は灰色の軟質の胎土で胴部外面にはヘラケズリの調整痕が残っている。口縁部断面形態はやや外傾したT字状で、体部は鉢状である。3ヵ所に獣脚が付くものと考えられる。内面には黒く炭化物が付着していることから火舎と判断される。

20～26は調査区北西側の建物跡の柱穴群から出土した遺物である。20は青磁の皿である。21～26はかわらけである。23のような口径6cm前後の小形のものと、24のような口径10cm前後のもの2種類がある。

図8は包含層出土の陶磁器である。

27～34はかわらけである。先述した柱穴群出土の資料と同様に、27のように口径6cm前後の小形のものと、28～33の口径10cm前後のもの、さらに34のように口径10cmを超えるものの3種類に分類される。いずれも口径底径比が小さく、分厚い造りが特徴である。35は内耳鍋である。口縁部が屈曲して立ち上がる独特の形状で、器厚は約4mmと極めて薄く胎土も淡褐色で他の土器類とは全く異なっている。外面の特徴として、口縁部に刷毛目調整が施され炭化物が付着している。また、内面には屈曲部の直下に円孔を施した板状の突

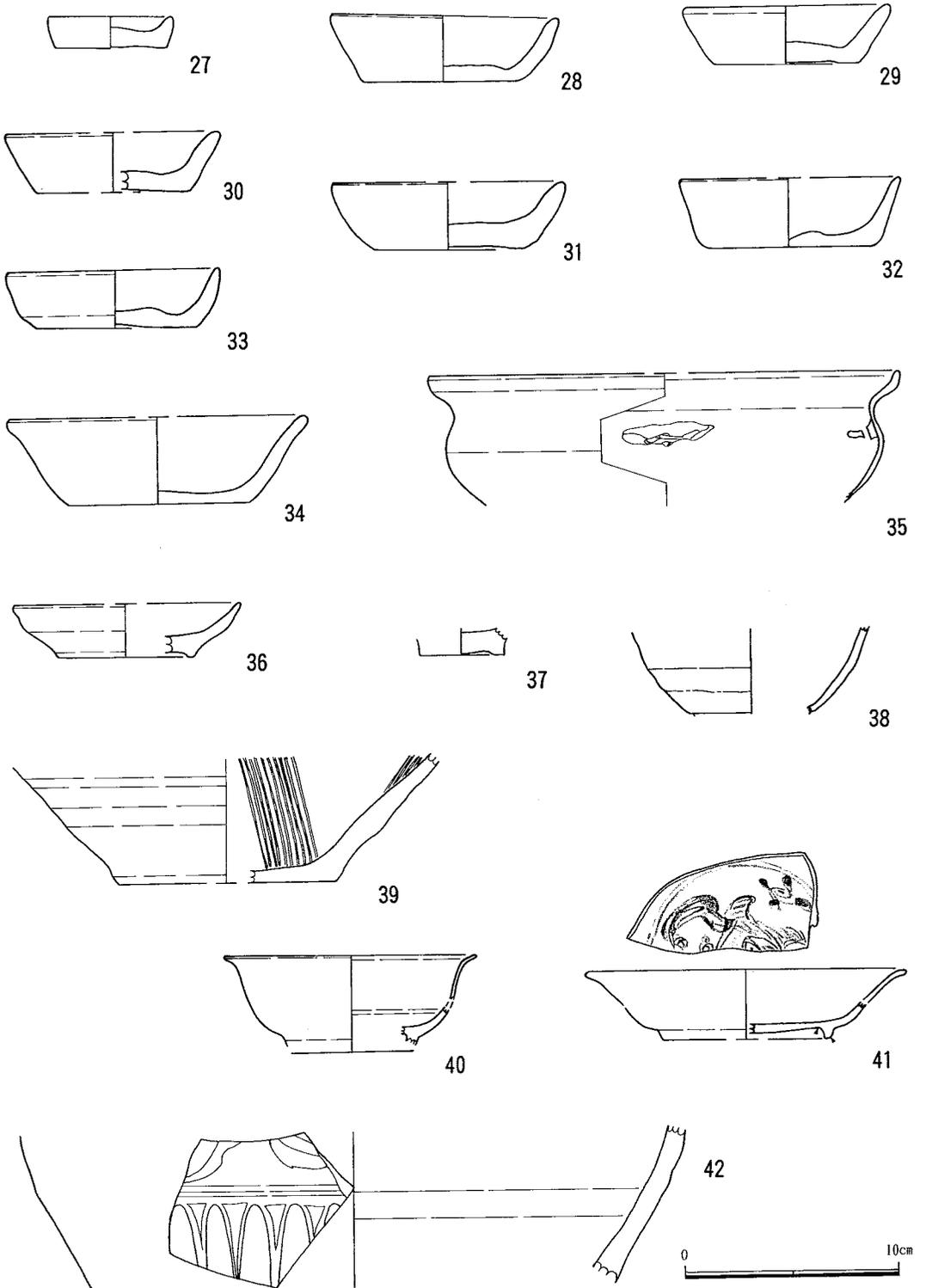


図8 包含層出土の陶磁器

起が付けられている。静岡県原川遺跡に類例がある。(註2) 36から39は瀬戸窯の陶器である。36は丸皿である。淡緑色の釉が全面に掛けられている。器形の特徴から大窯の後期の製品と判断され、他の陶器よりは後出のものである。37は天目茶碗の高台の部分である。鉄化粧が施され輪高台となっていることから大窯のI期の製品である。38も天目茶碗で、底部は露胎となっている。39は播鉢で、窖窯の製品と考えられる。40から42は舶載磁器である。40は白磁の端反皿である。少なくとも3個体分の破片が出土しているが、個体の識別が困難で接合も十分に行うことはできなかった。このため、図示した実測図は想定復元図である。やや器高が高く径も小さい可能性があるが、破片の復元からは図示したような器形になるものと判断される。内面には陽刻で唐草文が施されている。41は染付の端反皿で、見込みには玉取獅子文が描かれている。42は青磁酒会壺の胴下部の破片である。

図9は新研究棟の海水循環水路の管路掘削工事の立会調査の際に出土した常滑窯の大甕である。43は口縁部の折り返しが体部と一体になっているが、44は口縁部断面形態がn字状を呈している。

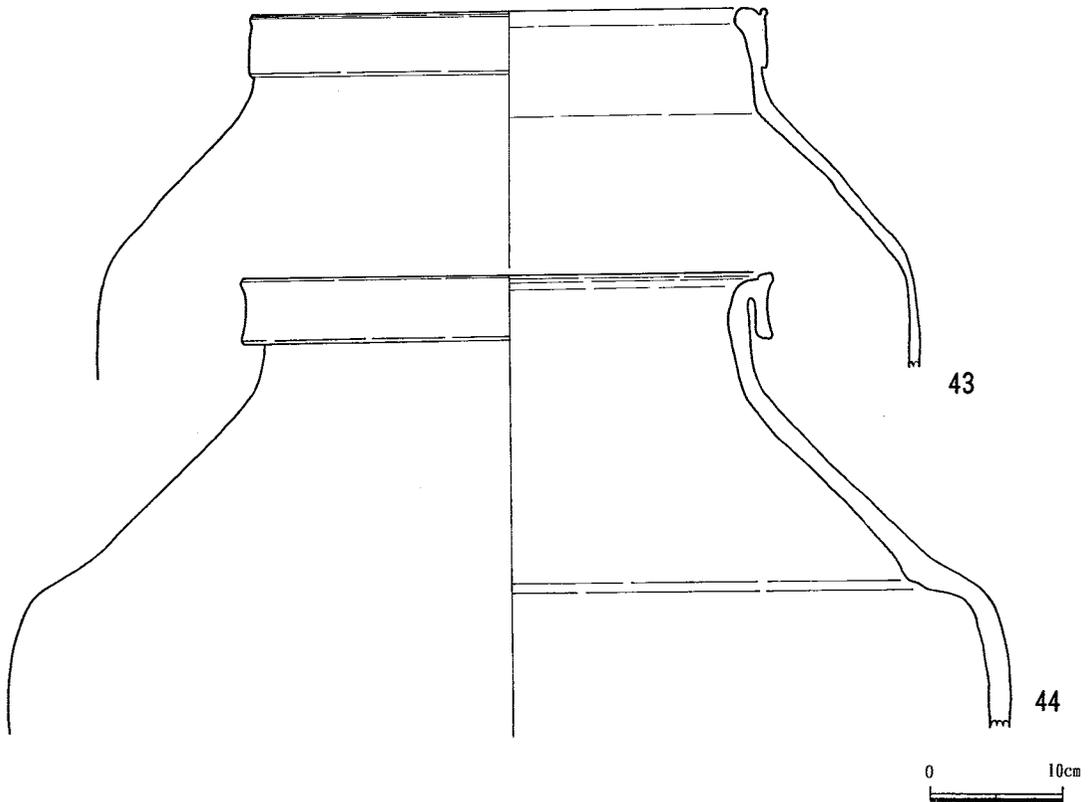


図9 設備立合調査出土の陶器

5 出土遺物の年代

出土遺物の主体となるのは在地系土器のかわらけである。ロクロによる器面調整をおこない、底部は回転糸切りによって切り離している。器高は低平で口径底径比の小さい独特の形状を呈している。口唇部に煤痕が顕著な例もある。三浦半島地域の中世の在地系土器として型式学的に安定した存在となっている。この他にかわらけと同じ胎土の在地系の土製品として管状土錘が多量に出土している。浮きと推定される軽石製品も多量に出土しておりセット関係になるものであろう。また、搬入品の土器として図8-35の東海系の内耳鍋の存在も注目される。

土器類に次いで出土量が多いのは瀬戸窯の陶器である。空堀や建物跡等の主要遺構から出土する緑釉皿、摺鉢は殆どが窖窯期の製品であるが、天目茶碗は大窯の初期のものが目立つ。包含層出土の陶器もほぼ同様の傾向を示している。従って、遺物の年代は15世紀末から16世紀初頭に位置づけられ、新井城が文献に記されている明応3（1494）年と永正9～13（1512～1516）年の合戦記事の年代と整合している。ただ、包含層出土の丸皿（図8-36）と東海系の内耳鍋（図8-35）は16世紀後半に年代付けられ、他の遺物よりは明らかに後出のものである。これらの遺物の出土地点は調査区西側の建物跡と考えられる柱穴群が密集している地域である。先に遺構の重複関係からこれらの柱穴群が、主要遺構よりも新期に属する可能性を提示したが、遺物の年代からもその新旧関係が裏付けられているといえる。

この他に中国明代の舶載陶磁器が出土している。量的には僅かであるが青磁酒会壺等優品ぞろいである。この中で比較的新期と考えられる青花磁器の端反り皿は小野正敏氏の分類では染付皿B1群VII類になる。（註3）年代的には15世紀後半以降に多く、16世紀後半までみられるとされているが、青磁皿や白磁皿との共伴関係も考慮すれば、15世紀末から16世紀前半の年代と考えられる。したがって、舶載陶磁器の年代も瀬戸窯陶器の年代と大きく矛盾せず、三浦氏の新井城に伴う遺物と判断される。

6 調査の成果

今回の発掘調査では非常に良好な状態で保存されていた戦国時代の城郭跡の曲輪内で、複雑に配置された空堀や大形掘立柱建物遺構等の建築遺構群を確認するという成果を得ることができた。

中でも、SB04は掘立柱建物の内部に底面に浜砂を敷きつめた竪穴状遺構が存在するという他に例をみない特殊な建築構造で注目される。遺構群はSI07とSB04およびSB22との

重複関係から少なくとも3時期に区分されると考えられる。一方、出土遺物の年代は、大部分が15世紀末から16世紀前半に年代付けられるものであるが、一部16世紀後半の時期のものも含まれている。

現在まで判明している遺構の年代と変遷は次のようにまとめられる。

主要遺構のうち、SK08とSK16は下層から出土した陶器が相互に接合しており埋没時期はほぼ同時であると判断される。さらに、SK08からは合戦の後に戦場に散乱した人骨を一括投棄した状態で大量の人骨が出土している。SI07より新期のSB04に伴う竪穴状遺構の埋土に焼土層が形成されている。遺構出土の陶器は瀬戸窯の窰窯の製品と大窯の初期の製品が主体となり、15世紀末から16世紀初頭の年代が与えられる。

以上の点から今回の発掘調査で検出された主要遺構と遺物の大部分は三浦氏の新井城に伴うものと考えられ、廃棄の年代は『北条五代記』等の文献に記された明応3（1494）年と永正9（1512）年から永正13（1516）年の2回の合戦記事のうち、おそらく後者の合戦の直後と推定される。

一方、SB22を含む調査区南側の柱穴群は、SB04に伴う竪穴状遺構埋土の焼土層と重複しており、明らかに上記の主要遺構群よりは新期と判断される。さらに、柱穴群の占地する地区の遺物包含層から出土した遺物には16世紀後半に年代付けられるものが含まれている。したがって、調査区西側の柱穴群は三浦氏の新井城より新期の建物遺構と判断される。このことは新井城が永正13（1516）年に落城したあとも後北条方の城として天正18（1590）年の後北条氏の滅亡まで存在していたとする文献史料と矛盾しないといえる。

以上の述べてきたように保存の良い中世城郭の調査で多くの建築遺構が検出され、しかも文献の合戦記事が考古学的に裏付けられたという点で今回の調査は貴重な事例といえる。今後は遺構の変遷をより細分して、文献に記された明応3（1494）年と永正9（1512）年から永正13（1516）年の2回の合戦記事と天正18（1590）年の後北条氏の滅亡まで城郭として機能していたという史料の記載と考古学資料の対応関係をより細かに検討していくことが課題として残されている。

（武藤 康弘）

註1 赤星直忠 1954『横須賀市史 第8冊 三浦半島城郭史(上)』横須賀市博物館

註2 静岡埋蔵文化財調査研究所 1991『原川遺跡 IV』第72図-26の内耳鍋

註3 小野正敏 1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会